



FGF 40th ANNIVERSARY

富士フィルム・グリーンファンド 40 周年を迎えて

ネイチャーポジティブ 実現のために 私たちができること



富士フィルム・グリーンファンド (FGF) とは

公益信託富士フィルム・グリーンファンド (FGF) は富士フィルムホールディングス (旧 富士写真フイルム) 株式会社が創立 50 周年を機に新しい分野での社会還元を志し、自然環境の保全・育成のための基金拠出を決意し、1983 年に設立されたものです。民間企業による、自然保護をテーマとした公益信託としては日本で最初に設立されたもので、この 40 年間に、自然環境の保全・育成に関する活動や研究に対して数多くの助成や支援を行い、成果を上げてきました。

●概要

設立年月日 1983 年 10 月 12 日
委託者 富士フィルムホールディングス株式会社
受託者 三井住友信託銀行株式会社
受託財産 1,000 百万円

●事業内容

FGF は 4 つの事業を進めています。

- ① 未来のための森づくり
- ② 緑のための支援事業
- ③ 緑とふれあいの活動助成
- ④ 緑の保全と活用の研究助成

* 現在、本公益信託の事業は、日本国内を対象に行っています。

Fujifilm Green Fund is the very first charitable trust in Japan which was established by a private enterprise for the purpose of nature conservation. For the last 40 years since its establishment, the Fund has been applied toward a number of successful programs for support of various activities and research works concerning nature conservation.

●OUTLINE

Date of establishment : October 12, 1983
Trustor : FUJIFILM Holdings Corporation
Trustee : The Sumitomo Mitsui Trust & Banking Co., Ltd.
Fund : Japanese Yen 1,000,000,000

●ACTIVITIES

1. Creating opportunities for exchange between people and green environment
 2. Promoting communication between concerned people in support of green environment
 3. Supporting activities for conservation of green environment
 4. Supporting research works for conserving and fostering green environment
- * Currently, the fund is applied to domestic activities only.

鞍馬の火祭 大小さまざまな松明が街道を行き交う

編集後記

今年、富士フィルム・グリーンファンド (FGF) は設立から 40 年の節目を迎えました。「自然の消失や悪化を止めて、さらに流れを逆転させ、自然を回復の軌道に乗せていく、いわゆるネイチャーポジティブの実現のために私たちができること」というテーマのもとに、今回の 40 周年記念誌を制作しました。

富士フィルムホールディングスの後藤社長と FGF の小林運営委員長の対談をはじめ、5 期にわたる「未来のための森づくり」やこの 10 年間の FGF 助成事業地からの報告、さらに 40 回目となる「わたしの自然観察路コンクール」受賞作品の紹介など、FGF のさまざまな活動に関する記事を掲載しました。また、これまでグリーンレターに登場いただいた皆さんから一言メッセージもいただきました。

この写真は、ちょうど 10 年前、私が本誌編集長をお引き受けした最初の年に、鞍馬の火祭りを取材した時のものです。街道を大小さまざまな松明が行き交うなか、火祭保存会の三宅会長のお宅を訪ねました。親戚や知り合いの方などたくさんの方が集まり、女性陣が準備した里山の恵みも感じられるご馳走を味わっていました。「家の外も祭りだけだ家の中もお祭り。男たちも祭りに誇りをもっているけど、女の人もそう。」という奥さまの言葉が印象的でした。次の瞬間、外で大きな歓声が上がりました。さつきまで部屋におられたとても小柄で高齢のお母さまが、神輿の太鼓をたたいているのです。力強い太鼓の音に驚きました。地域の人たちがまさに総力をあげて祭りを動かしている、そして祭りの松明やご馳走が里山の多様な資源に支えられている、そのことに心が動かされました。

10 年後の今秋、「未来のための森づくり」の取材でふたたび鞍馬を訪ねました。「火祭りや暮らしの資源を自分たちの里山で」をめざして、地元保存会の皆さんと京都大学の先生や学生たちが森づくりの活動を進めています。世代や地域をこえた新たな協働が生まれつつある、そう強く感じました。

地域の自然が回復した時に、自然との関わりのおかげで地域の暮らしや歴史、文化も輝きを増していく、そんなネイチャーポジティブを実現させていきたい。全国各地のひとつひとつの現場から、地域の特徴を活かした新たな動きが生まれ出されていくよう、ぜひとも願っています。そして、FGF がこれからもそうした地域に根ざした活動を息長く応援していくことを期待しています。(W)



ネイチャーポジティブ 実現のために 私たちができること

: a world of living in harmony with nature

「由岐神社の森」のシカ防護柵のなかでは、アカマツの稚樹がたくさんの人に見守られながら生長している

FGF機関誌「グリーンレター45号」では、FGF 設立40周年を機会に、事業内容を振り返るとともに、次のステージとして「ネイチャーポジティブ（自然を守って回復させる）」のために、我々に何ができるかを考えました。

巻頭の富士フィルムホールディングスの後藤社長と小林 FGF 運営委員長との対談をはじめ、過去にグリーンレターに登場された 26 名、FGF 活動・研究助成先の方々からも具体的な今後の目標など、未来へ向けた大事なメッセージをいただきました。

ネイチャーポジティブ実現のため、40周年以降も FGFは自然環境の保全に役立つ事業を続けてまいります。



特集 富士フィルム・グリーンファンド 40 周年を迎えて —ネイチャーポジティブ実現のために私たちができること—

4	FGF40 周年記念対談 社会全体のアプローチで ネイチャーポジティブの実現を 後藤禎一×小林光 司会 渡辺綱男	14	「ネイチャーポジティブ」実現の ために私たちは何ができるか 過去 10 年間にグリーンレターにご登場 いただいた 26 名からのメッセージ	28	緑のための支援事業 通算実施 40 回を迎えた 「わたしの自然観察路コンクール」 ・2023 年度の受賞作品紹介 ・過去の受賞者への取材で伝えるコンクールの魅力 稲垣貴厚・稲垣慶有・稲垣典寛
10	公益信託とは何か 三井住友信託銀行株式会社	18	未来のための森づくり 〈第 1 期〉まいおか水と緑の会 〈第 2 期〉冬雷塾 〈第 3 期〉金沢大学 角間里山本部	33	緑とふれあいの活動助成・ 緑の保全と活用の研究助成 ・2013 年から 2022 年までの 活動・研究助成 72 件の紹介 〈2017 年度研究助成〉世界自然遺産知床の ヒグマと人（下鶴倫人） 〈2018 年度活動助成〉皆で育む道 ～みちのく潮風トレイルを未来へ（相澤久美） 〈2021 年度活動助成〉女性パワーで ガイアの森植樹会を開催!!（徳永由佳）
11	FGF の 4 つの事業	20	未来のための森づくり 〈第 4 期〉エゾリスの会 伊藤育子・佐々木梨江	75	FGF 通信
12	助成申請を審査する立場から見た 富士フィルム・グリーンファンド 小林光	22	未来のための森づくり 〈第 5 期〉鞍馬火祭保存会 取材記事 「火祭りや暮らしの資源を自分たちの里山で」	78	FGF 助成一覧

45 号に登場してくださった方々



後藤 禎一（ごとう ていいち）

富士フィルムホールディングス（旧 富士写真フィルム）株式会社、及び富士フィルム株式会社の代表取締役社長・CEO。1983 年、関西学院大学卒業後、富士写真フィルム入社。1995 年から 2010 年までベトナム、シンガポール、中国駐在。2013 年、メディアカルシステム事業部長就任。2018 年同社取締役、2020 年に事業会社である富士フィルム株式会社の取締役専務執行役員を経て、2021 年より現職。



小林 光（こばやし ひかる）

1949 年東京生まれ。東大先端科学技術研究センター研究顧問。1973 年に環境庁に入庁。2011 年に事務次官を最後に退官。京都議定書の作成や実施に関する内外の交渉を長年担ったほか、一貫して、環境まちづくり、環境と共生する経済づくりを担当し、退官後も大学教員の立場から、各地で、自治体の環境政策や企業の環境取り組みへの助言・協力を行っている。



渡辺 綱男（わたなべ つなお）

1956 年東京生まれ。1978 年に環境庁に入庁、全国の国立公園や野生生物の保護管理にあたる。釧路湿原の自然再生や知床の世界遺産登録、生物多様性条約 COP10 の開催、三陸復興国立公園づくりなどに携わり、2012 年環境省を退官。現在は自然環境研究センターや国連大学に勤務。著書に『日本の自然環境政策』（東京大学出版会）など。



伊藤 育子（いとう いくこ）

エゾリスの会にて里山をつくらうプロジェクト企画・運営担当、モニタリングサイト 1000 里地調査コアサイト「帯広の森」のコーディネーター。1965 年東京生まれ埼玉育ち。帯広畜産大学へ進学し「帯広の森」と出会い、かれこれ 40 年。1 級ビオトープ施工管理士、自然観察指導員、環境カウンセラー（市民部門）。



佐々木 梨江（ささき りえ）

中学 1 年生の息子と小学 4 年生の娘とともにエゾリスの会の活動に参加している。1980 年生まれ、東京育ち。帯広畜産大学へ進学後、知床でネイチャーガイドとして働き、帯広に戻る。子供も一緒に森の中で過ごす時間が欲しい!まだまだ自然の事を知りたい!と思いエゾリスの会へ入会。



鞍馬火祭保存会（くらまひまつりぼぞんかい）

京都府京都市左京区鞍馬本町において 1963 年から活動する団体。本会は、1 千有余年の歴史を誇る鞍馬火祭を保存し、その比類なき火祭行事を振興することを目的とする。火祭行事に必要な諸陣道具の維持保存のための補助事業・火祭儀式及び行事の資料等の保存・その他目的達成に必要な様々な活動を継続的にを行っている。毎年 10 月 22 日の「鞍馬の火祭り」を実施し、2021 年からは FGF の助成を受けて由岐神社の森で、森林資源の管理・利用等を中心に活動を行う。



下鶴 倫人（しもづる みちと）

1979 年神奈川県生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻を修了。博士（獣医学）。2008 年より北海道大学大学院獣医学研究科（現・研究院）に助教として着任、現在准教授。専門は野生動物学。主としてヒグマをはじめとしたクマ類の生理生態に関する研究に取り組んでいる。



相澤 久美（あいざわ くみ）

認定 NPO 法人みちのくトレイルクラブ常務理事 兼 事務局長。建築設計、雑誌・書籍編集、映画プロデュース、震災支援等を経て、現在みちのく潮風トレイルの管理運営を行う。また、各地のロングトレイルの敷設や運営計画策定支援も行う。青森大学客員教授、中環審専門委員、他各種団体の理事も兼務。



徳永 由佳（とくなが ゆか）

大阪府生まれ。現在、宮崎県都城市在住。1996 年 7 月仲間とともに「どんぐり 1000 年の森をつくる会」を発足。2008 年 4 月に NPO 法人に。当初から事務局として活動し、今年で 27 年目。職業は市職員。ライフワークとして NPO 活動に取り組む。

発行
受託者
編集制作
編集人
編集協力
デザイン
印刷

公益信託 富士フィルム・グリーンファンド
三井住友信託銀行株式会社
一般財団法人 自然環境研究センター
渡辺綱男（（一財）自然環境研究センター上級研究員）
小島麻理 星野俊彦（富士フィルムホールディングス株式会社）
株式会社アートポスト
株式会社高陽堂印刷

社会全体のアプローチで

ネイチャーポジティブの

実現を

後藤 禎一さん

富士フィルムホールディングス代表取締役社長
・CEO

小林 光さん

富士フィルム・グリーンファンド運営委員長
東大先端科学技術研究センター研究顧問

司会 渡辺 綱男

FGF 機関誌「グリーンレター」編集長



右から小林氏、後藤氏、渡辺氏

富士フィルム・グリーンファンド（FGF）40周年を記念して、富士フィルムホールディングス社長、CEOの後藤氏、FGF運営委員長小林氏が、それぞれの来た道を振り返り、今後のFGF、富士フィルム、そして社会と環境の未来をともに見つめました。



Nature Positive

そして富士フィルムが自然を彷彿とさせる「グリーン」をコーポレートカラーに使い始めたのは1958年（昭和33年）で、私はその翌年、1959年（昭和34年）の1月生まれということもあり、FGFと、FGFがテーマとしている「自然環境」に対しては、個人的に特別な思いをもっています。

今から考えても、40年前にFGFを設立した当時の経営陣には先見の明があったと思います。「会社創立50周年」といえば、パーティーを開いたり記念館を建てたりという話になりがちだった時代に、公益信託という構想を持ったこと、また、単なる寄付や一過性のアクションではなく、継続的な環境保全のために、地域に根付いた自然保護活動に助成する基金を設立したことは、自社の行動ながら大変に価値ある判断だったと今回改めて思いました。「こ

れからの会社経営は、人とマーケットと地球が大切。緑を大切にしない経営では生き残れない」というのは当時の大西實社長の言葉ですが、40年前に地球環境に言及する経営者はまだ少なかったと思います。

富士フィルムは、もと

もと大阪に本社を置く企業から写真フィルム部門を分離独立させた会社で、社名の「富士フィルム」の「富士」は富士山が由来です。当時の幹部が大阪から東京へ向かう東海道線の車内から美しい富士山を眺め、その名を社名に冠したいと名付けたものです。その裾野にあつて、豊富な湧水ときれいな空気に恵まれた南足柄村（現南足柄市）に写真フィルム製造のための当社の最初の工場が建設されました。きれいな水と空気は、写真フィルムの製造には何よりも大切です。南足柄市の工場の近くには、今でも多くの湧水群が広がっています。

小林 ぜびその創業の地である、その土地を拝見したいものです。ところで、今日は富士フィルム本社の応接室で対談させていただいていますが、応接室の入口に大きな素晴らしい富士山の写真がありますね。

後藤 山岳写真家の白旗史朗さんの作品です。あの写真は決して偶然に撮影されたものではなく、気象学から雲の動きを読んで、この時間のこの角度を狙つてと、綿密な計算の上で撮影されたそうです。風景写真家の方々は皆さん、素晴らしい作品を撮影されるために、見えないところでそうした努力がされているそうです。

小林 後藤社長はもとと写真がお好きで、富士フィルムに入社されたのでしょうか。後藤 わたしには「写真は人を幸せにする」

という信念のようなものがありまして、人々の幸せを増やすために、写真が自社製品ならば自信をもつて売り込める、というのが入社の動機でした。



泥だらけになってしまった写真プリントを被災地で洗浄する様子（写真提供 / 富士フィルムホールディングス）

東日本大震災の時、われわれは被災地で、津波によって泥だらけになってしまった写真の救済を行いました。当時、被害を被った家に被災者の方々が戻られた時、真っ先に探したのは写真だと伺いました。また救助活動の過程でもアルバムなど思い出の品が多数発見されました。当社には、皆様の大切な思い出の品を一つでも多く救い出したいとの思いがありました。写真プリントの洗浄ノウハウの提供や、現地での洗浄作業も行いましたが、一部、現地から写真やアルバムをお預かりしての洗浄作業も実施しました。神奈川工場足柄サイトの体育館を作業場としたのですが、現役社員やその家族に加え、多くのOBもみなボランティアで集まり、作業をしました。写真は、結婚式や入学式、卒業式など、皆さんの大事な一瞬一瞬を記録するものですが、写真フィルムは撮影したあと現像・プリントしてはじめて、本当の価値を提供できる製品で、使う前に試すことができません。お客様はそれぞれの大事な瞬間を記録するため、当社の製品を信頼してフィルムを購入してくださっているのです。従業員はみな、



阿蘇山麓の菊陽町での稲刈りに参加する後藤社長。左下写真の社長のお隣は菊陽町の吉本孝寿町長
(写真提供 / 富士フイルムホールディングス)

* 30by30 アライアンスとは

2030年までに陸と海の30%以上の保全を目指す国際約束「30by30目標」の達成のため、2022年4月に環境省などが発起人となり、企業、自治体、NPOなどが集まって発足したものです。



業績評価指標）に水の項目を入れているのも良いですね。

後藤 映画や写真のフイルムの製造には清浄な水を多く使用します。われわれは、創業地である富士山近くの南足柄市で、豊富に湧くきれいな水をお借りして、製品を作らせていただいていたわけですから、その水をきれいな状態にして河川に戻さなくてはいいけない。そうした思いから、早くから水投入量の削減、及び水のリサイクル利用にも取り組んできました。



(右) オランダのバイオ医薬品用培地の生産拠点にて、使用電力を風力発電由来に転換
(下) 中国の複合機リサイクル拠点でカーボンニュートラルを実現
(写真提供 / 富士フイルムホールディングス)



そうしたお客様の思い出が詰まった写真を大事にしたい、お客様が当社を信頼してくださる気持ちに応えたいという気持ちをもっており、それはいわば当社のDNAとして従業員に心に深く刻まれていますから、この写真救済活動には本場に多くの従業員が参加しました。

手元にある写真というのは何年も経った後に、さらに価値が高まるものだと思います。最近ではデジタルの普及で、写真をプリントすることが少なくなりましたが、ぜひプリントして手元に残してほしいものです。

小林 確かに写真はさまざまな瞬間を記録することができるんですね。戦前の写真などを見ると、当時はこういう暮らしをしていたのかなどと興味深く思うことがあります。ところで、現在の富士フイルムグループは、写真フイルムだけでなく色々と新しい事業に取り組んでいらっしゃる印象です。

後藤 デジタルカメラの台頭で、2000年を境に世界の写真フイルム需要は激減しました。そのため、われわれは写真事業で培われた自分たちの技術を徹底的に深掘りして、それが応用できる新たな事業を探索しました。それが現在のヘルスケア事業と電子材料事業の伸長につながっています。これらのマーケットは間違いなく、今後益々大きくなっていくと考えています。

現在の富士フイルムグループには多くの事業がありますが、2017年に発表した2030年度をゴールとするCSR計画「Sustainable Value Plan (サステナブル・バリュー・プラン) 2030」(SVP 2030)に沿って、革新的技術・製品・サービスの提供など、事業活動を通じた社会課題の解決

により一層取り組み、サステナブル社会の実現に貢献する企業を目指して事業を推進しています。

渡辺 サステナブルという言葉が出てきましたが、ここ10年を振り返っていただいて環境分野では、どのような取り組みをされてきたのでしょうか。

後藤 当社はグループ経営を進化させるため、2006年に持ち株会社である富士フイルムホールディングスを設立しましたが、その翌年、2007年に当社の「CSRの考え方」を定めた時からサステナビリティや、持続可能性という言葉を使っています。2017年に発表した(前述の)SVP 2030では、13年後の2030年に、われわれの会社をどんな会社にするのか、どのような形で社会課題解決に貢献していくのか、その目指す姿をCSR計画として宣言しました。具体的には環境、健康、生活、働き方という4つの重点分野を掲げ、それに関わる社会的課題を解決していくというものです。そのなかでも環境は、世界的にみて大きな課題ですので、脱炭素に向けた計画をしっかりと練りました。

特に気候変動対応として、2040年度までに自社が使用するエネルギー起因のCO2排出を実質的にゼロにすることを目指すとともに、原材料調達から製造、輸送、使用、廃棄に至るまでの自社製品のライフサイクル全体において、2030年度までにCO2排出量を50%削減(2019年度比)することを目指しています。当初、2050年度までとしていた実質排出ゼロの従来目標を、10年前倒しにして2040年度に達成する計画にしました。

たとえば当社グループには熊本県の菊陽町にディスプレイ材料・半導体材料の工場があります。この工場の場所を含めた阿蘇山に連なる11市町村は、約100万人分の住民の水道水資源を地下水で賄う、世界でも珍しい地域です。豊かな地下水が保持できた理由のひとつが、阿蘇山麓から菊陽町に広がる白川中流域の水田にあります。最近宅地化や、住民の高齢化で、この大事な役割を果たす水田が少なくなってきたというところで、この地域で事業活動を行う企業の責務として、地元農家の協力を得ながら、菊陽町の水田を利用した地下水かん養を実施し、地下水の保全に努めています。時には従業員やその家族が水田での作業に参加して、地下水かん養や自然環境保全の大切さを身をもって感じており、従業員の環境意識の維持向上にもつながっています。今年は私自身も稲刈りに参加してきました。その水田で作った新米は大変美味しいお米なので、毎年楽しみにしています。

渡辺 まさにネイチャーポジティブを進める活動ですね。自然の悪化を止めるだけでなく、水の循環を守ることを通じて、自然の回復に向けた取り組みが動き出していると感じました。

2010年に名古屋で開かれた生物多様性の保護に関する国連の会議「COP10」では、まずは自然環境の悪化を止めようと、絶滅危惧種を守ることなど2020年までに取り組む20の目標が合意されました。昨年(2022年)12月にモントリオールで開催された「COP15」では、悪化の流れを逆転させて自然を回復軌道に乗せる、いわゆるネイチャーポジティブを進めるため、

小林 世界の多くの一流企業は、2050年目標でカーボンニュートラルを目指していますが、富士フイルムグループは10年前倒しにしたのですね。

後藤 気候変動は差し迫った課題になってきましたからね。数十年前までは、ここまで激しい気候変動が来るとは思っていませんでした。温室効果ガスが気候変動の要因であることは、科学的にもいまや疑いがないというのが国際的なコンセンサスなわけですから、重点課題として優先的に取り組むことは大切です。

小林 富士フイルムは脱炭素の取り組みが早かったのですね。1997年、初めて温室効果ガスの削減行動を義務化した京都議定書の頃は、環境の専門家の中でも、10年でCO2を5%、100年でようやく50%削減といった相場観でした。当時は、温暖化はわれわれが生きているうちには大して進まないんじゃないか、と考える人もたくさんいました。それが、今では2050年のカーボンニュートラルでは遅すぎで、2040年に温室効果ガスの排出量を全体としてゼロにすることが喫緊の課題と言われるようになってきました。

後藤 製造業としては、ものづくりにおけるカーボンニュートラルモデルの確立が、気候変動対策として急務だと考えています。われわれは天然ガスの代替となる脱炭素燃料として期待が高まっている「メタネーション」、つまりCO2を水素と合成してメタンをつくる技術の実証実験を、神奈川工場足柄サイトで東京ガス、南足柄市と共同で進めています。

小林 CO2だけでなく、KPI(重要

12年ぶりの新たな世界目標に合意することができました。2030年までに世界全体で陸域と海域のそれぞれ30%以上を保全する「30by30」目標などはその一つです。

後藤 富士フイルムホールディングスもその考えに賛同して「生物多様性のための30by30アライアンス」に加盟しました。

小林 FGFもアライアンスに加盟しましたが、自然は守るにしても、回復させるにしても、時間がかかるものです。長期の取り組みによって初めて成果が上がってくるものから、実際にはたいへんな時間と労力がかかることですね。

後藤 富士フイルムグループでは、1998年(平成10年)から中国の砂漠地帯で植林ボランティア活動を実施してきました。当初、労働組合が始めた活動ですが、中国のグループ会社で活動を引き継ぎ、この25年間に5万本以上の植樹を行いました。わたしも中国に駐在していた頃に参加したことがあります。最初の頃に植樹した人たちがこの場所を訪れた際に、自分たちが植えた樹が大きくなっているのを見て感動したと言っていました。何においても継続は力なりということですね。

渡辺 継続といえば、FGFは「緑とふれあいの活動助成」「緑の保全と活用の研究助成」という2つの事業を通じて、40年間で220件の助成を行ってきました。30周年以降のFGFのこの10年の活動を振り返ってみて、いかがでしょうか。

小林 2014年からこの10年間で助成した先は86件です。FGFは、地域の自然を守る草の根の活動はもちろん、日本学術振興会の科学研究費などでは対応できな



「未来のための森づくり」第4期助成先であるエゾリスの会を視察する。左から2番目が小林運営委員長

い、独特のニッチな研究にも助成しているため、応募される方が多いです。そのすべての方に助成できないのは残念ではありますが、FGFの趣旨により合致した助成先を選ばせてもらっています。

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に5年単位で資金援助する「未来のための森づくり」という自主的な事業があるのもFGFのユニークなところですね。第4期（2016年～2020年）助成先の、北海道帯広市で活動している「エゾリスの会」を視察に行ったことがあるのですが、市民とNPOが「一緒に進めている地道な活動を拝見して、自然は知恵と労力があれば良質なものとして再生できるのだな」と感銘を受けました。「未来のための森づくり」の助成は、2021年から第5期に入っており、京都の「鞍馬火祭保存会」による火祭り行事の松明の天然素材を供給する里山と、その文化を守るための活動に助成しています。こういった民間の活動に助成してくれる団体は少ないので、FGFがお役に立てているかなと思っています。

純粋な研究だけではない、自然環境の

利益というのは金融資本に対する

リターンですけど、人に対するリターンも大事だし、自然資本にもやっぱりリターンが必要です。小林

ネイチャーポジティブを進めるのは容易ではなく社会のいろんな仕組みを変えていかなければ。渡辺



保全や、回復に向けた人の知恵と労力を駆使した草の根の活動や研究。これからもFGFの趣旨に合った、そうした人の手間がかかるところに助成をしていきたいと思っています。

渡辺 FGF創立当初から実施している、「緑のための支援事業」である、「わたしの自然観察路コンクール」も同じく40年を迎えますね。

小林 全国の小・中・高校生を対象に、身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによつて、次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的としたコンクールです。こちらも毎年、力作揃いで応募数も多く、昨年は929

の視点を組み込んでいくこと、ひいてはネイチャーポジティブの実現に寄与することが期待されています。

後藤 CO2なら世界各地における活動の通算でバランスをとるという考え方もありますが、TNFDが求めている生物多様性の評価は各地での活動が求められるため、CO2とは違った工夫が必要ですね。

小林 地域固有の価値というのがありますしね。自然生態系には、それぞれの地域に固有の役割や価値があるので、CO2のように単純に量として扱うわけにはいきません。それぞれの土地が、他では果たせない効用や便益を人々に与え、そして企業の経営にも大いに役立っているということがあるの

し、関心を注いでいくことが大事ですね。
後藤 企業経営では、事業活動を進めながら社会課題を解決していかなければなりません。環境保全や社会貢献には原資が必要となることも多いですが、これからの経営者はそれを単なるコストと考えずに、事業成長のための投資として、様々なバランスを取りながら、経営にあたっていくべきと考えます。得られた利益を社会貢献に資するよう活用しない会社は、市場から退場を余儀なくされるでしょう。

小林 利益というのは金融資本に対するリターンですけど、人に対するリターンも大事だし、自然資本にもやっぱりリターンが必要です。それぞれ「お返しする」というのが

件もの応募がありました。

自然観察の動機付けにはうつつけの課題で、子どもたちの環境への理解、関心も深まっているように感じます。自然環境の価値に気づけば、それに対する人材も集まり、お金も集まるようになります。まずは環境の価値に気づく、わかるということが次のステップにつながるのではないのでしょうか。そういう意味でもよい企画であると思います。

後藤 自然観察路コンクールはやり方次第で、もつと大きく広がりそうですね。助成事業も40年で200件を超えるということとで、FGFの活動が着実に実っていると感じます。これも継続は力なりですね。今後継続して100年続けていきたいですね。

渡辺 最後に今後の活動について、富士フィロムグループがどのように展開していくのかというお考えをお尋ねします。

後藤（前述の）富士フィロムグループ Sustainable Value Plan 2030の中で、直接的に人々の健康増進に貢献していくヘルスケア領域には、今後より「層注力していきます。例えばインドやモンゴルでは、AI技術を活用して、がん検診などを行う健診センターを開設しました。インドには健康診断の制

大事なのでしょうね。

渡辺 実際にネイチャーポジティブを進めるのは容易ではなく、社会のいろいろな仕組みを変えていかなければ、「悪化を止めて回復に向かう」というのは実現しないと思っています。その実現のために、私は3つ大事なことがあると常々思っています。

1つ目は個別から連携へ。これは自然の問題だけを切り離して取り組むのではなく、気候変動、健康や福祉、教育、地域振興などへの対応と結びつけていくことが欠かせないということ。2つ目は、広域の自然や人のつながり。ある森や湿地の保全に着目するだけでなく、より広域な自然のつながりが大事なこと。3つ目は、地域社会全体の協働。「whole of society approach（社会全体でのアプローチ）」このフレーズは生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）の中で、参加者が皆、何度も口にした言葉です。ネイチャーポジティブの実現のためには、社会全体のさまざまなセクターが立ち上がり、協働の取り組みを進めることが不可欠だということです。

富士フィロムグループがFGFを通じた助成を含め、これからもこうした視点に立った先駆的な取り組みを進め、FGFとともに30by30アライアンスなどの活動をけん引していくことを大いに期待しています。本日は貴重なお話をありがとうございました。



企業経営では、事業活動を進めながら社会課題を解決していかなければなりません。後藤

FGFでは4つの事業を進めています

事業
1

未来のための森づくり

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に資金援助するもので、長期的な見通しで助成することによって、大きな成果をあげています。

第1期助成(1984～1992):「まいおか水と緑の会」(横浜市戸塚区の市民団体)、第2期助成(1988～2007):「冬雷塾」(東京都檜原村の地元青年グループ)、第3期助成(2011～2015):「金沢大学角間里山本部」(金沢大学の学内組織)、第4期助成(2016～2020):「エゾリスの会」(北海道帯広市の市民団体)、第5期助成(2021～継続中):「鞍馬火祭保存会」(京都市鞍馬の市民団体)。



エゾリスの会

*本事業の活動の様子は、本誌 18P～を参照ください。

事業
2

緑のための支援事業

FGFでは、より多くの人々に理解を深めていただくため、写真展やシンポジウムなどさまざまな活動をしてまいりました。1984年に始まった「わたしの自然観察路コンクール」は、身近な自然のおもしろさを発見し、自然を観察できる道を自分でつくって絵地図と文章で表現するもので、身近な自然への理解や愛着を深めています。



*本事業の活動の様子は、本誌 28P～を参照ください。

事業
3

緑とふれあいの活動助成

緑を確保し、保全するとともに、私たちが生きものとのふれあいを積極的に作り出そうと活動している個人や団体に対し、その一層の発展のための資金を助成金として支給しています。



*2013年～2022年までの10年間の助成先の活動の様子は、本誌 33P～を参照ください。

事業
4

緑の保全と活用の研究助成

身近な自然環境の保全・活用に関する具体的な研究や、緑地の質的向上を目指した実証研究などを行っている個人や団体に対し、今後の一層の充実のための資金を助成金として支給しています。



*2013年～2022年までの10年間の助成先の研究の様子は、本誌 33P～を参照ください。



公益信託とは何か

受託者 三井住友信託銀行株式会社

近

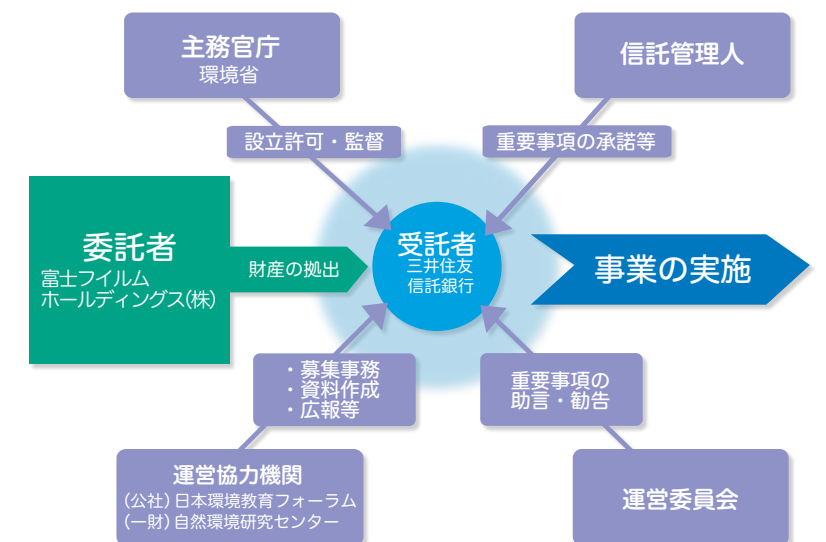
年、わが国では民間の公益活動に対する期待が高まる一方で、民間の公益活動のために自らの財産を提供しようとする個人の方や利益の一部を社会に還元しようとする企業・団体が増えています。公益信託は、こうした個人の方や企業等の篤志家(委託者)が自らの財産を信託銀行に信託し、委託者のご意志に基づいて定められた信託目的にしたがって信託銀行がその財産を管理・運用し公益事業を行うという制度で、わが国における民間の公益活動のための仕組みのひとつです。

公益信託は、1977年(昭和52年)に第1号が誕生して以来、個人や企業等の善意に支えられ、自然環境保護活動への助成、奨学金の支給、自然科学・人文科学研究への助成、さらには、国際協力・国際交流促進活動への助成等、幅広い分野で活用されており、2023年(令和5年)3月末現在、受託件数は385件、信託財産残高は554億円となっています。

公益信託の特長と仕組み

信託法に基づく公益信託と、公益法人認定法に基づく公益法人(特に公益財団法人)は共に公益事業を行う仕組みとしてほぼ同様の社会的機能を持っています。公益信託は、その設定にあたっては主務官庁の許可を必要とする、社会的にもオンライン化された制度です。公益財団法人では原則として事務局

運営の仕組み



及び専門の事務職員
の設置が必要である
のに対し、公益信託
では信託銀行が事務
を行うために一般的
に低コストな運営が
可能です。また公益
財団法人では原則と
して基本財産の取崩
しが認められないの
に対し、公益信託で
は信託財産の取崩し
が認められており、
このため公益信託で
は、比較的少ない財
産額で設定ができる
といった特長があり
ます。

公益信託は、主務
官庁の検査・監督を
受けるほか、信託管
理人や運営委員会
を公益信託ごとに設
置し、財産管理・事
業運営を監視する仕組みも設けていま
すので、厳格な管理・運営が図られて
います。

公益信託富士フィルム・グリーンファンドとは

公益信託富士フィルム・グリーンファ
ンド(FGF)は、富士写真フィルム株
式会社(現・富士フィルムホールディン

グス株式会社)が創立50周年を機に新
しい分野での社会還元を志し、自然環
境の保全・育成のため10億円の基金抛
出を決議し、1983年(昭和58年)に
設立されたものです。

民間企業による自然保護をテーマと
した公益信託としては、日本で最初に
設立されたもので、この40年間に自然環
境の保全・育成に関する活動や研究に
対して数多くの助成や支援を行い、成
果を上げてきました。

助成申請を審査する立場から見た 富士フィルム・グリーンファンド

小林光 FGF運営委員会委員長・東大先端科学技術研究センター研究顧問

私も7人の委員は、富士フィルム・グリーンファンドの自主事業の執行・監督のほか、同ファンドからの助成案件を選別する仕事も行っている。

ファンドからの助成は、数年以上の長期を掛けて取り組む森づくりに対するものと原則として単年度での活動・研究助成とに大きく二つに分かれている。前者は、したがって、数年に一度の公募であり、後者は毎年の公募になるが、後者で見ると助成対象としての採択割合は、応募件数比で活動助成が概ね11.4%、研究助成が8.8%と比較的狭き門である（下表1、2参照）。ファンドの資金量は限られているので、仕方ないとはいえすべてのお気持ちに応えきれないのは残念ではある。ただ、助成をお断りする理由から考えると、このファンドの趣旨、すな

わちその果たしたいと思う役割を十分理解して申請いただければ一層的確な申請内容になっていたのに、と思うものも散見される。そこで、本欄では、結果的に助成対象となった案件に即して、当ファンドが、どのようなものを助成したいと考えているか、そして、その意思をよりよく実現していくために本助成制度をどのように運営しているかなどを説明し、今後の助成申請を考えている方々の参考に供したい。

1. 未来のための森づくり

未来のための森づくりと題する助成は、地域の身近な自然を地域の人々自らの活動で保全整備し、未来世代へ引き継いでいくことを応援するものである。したがって、助成を得るポイントはいくつか

あるが、はっきりしている。一つ目は、対象となる自然が身の回りの自然であることであり、二つ目は、その保全主体が地元の人々、近在の民間の人々であること、そして、三つ目には、将来世代にその自然が受け継がれていくことである。

貴重な自然などは、国や自治体などが保全するのが相当であろうが、身近な自然の保全や活用は公的な制度がないだけに難しいことも多い。そうした難点に着目した助成であって、およそ5年間、総額で1000万円といった力のある支援を行っている。既に、5件の助成が行われ、うち4件が助成を終了して自律的な保全活動や利用活動が続けられている（それぞれの森づくりにはこの冊子の中で頁が割かれて報告されているので、是非、参照いただきたい。）。

このカテゴリーでは助成金額も大きいことから、運営委員会が委員や専門家を派遣して候補になる活動の現地を訪問して、前述のようなポイントをチェックしている。特に、助成にあたって往々心配になる点は、助成を受ける団体の実行能力である。志は高くとも、人員が乏しかったり、専門性に欠けていたりすると、助成を躊躇せざるを得ない。また、保全活動の対象地が、そうした民間の団体が手入れをしてよい土地なのか、また、未来に向かって、活動した成果が維持され引き続き活用されていくのか、といった点も心配になる点である。

このような審査を経て、例えば7年前の2016年には、北海道帯広市の市民団体「エゾリスの会」による帯広の森づくりが助成対象に選ばれた。我々運営委員会では、助成最終年度には、その成果を確認しに現地調査をし、助成終了後の、一層すそ野の広い活動の在り方に関して助言を行っている。この帯広の森づくりでは、刻々の森の様子や活動ぶりを、電子

情報化して地域に広く共有することなどをお願いした。富士フィルム・グリーンファンドは、助成して終わり、というものではない。実際に、優れた自然が活用されていくことを強く願っているのである。

2. 活動助成、研究助成

このカテゴリーは、原則単年度（複数年度にわたることを妨げない）を対象としており、1に掲げた森づくり活動に比べ、一件一件への助成は小型・少額である。対象は内容面で、保全や利用の活動と研究調査とに分かたれている。例年合計で10件を少し下回る案件が採択されている。

（1）活動助成

活動助成の対象は大きく分けて2つ、生物種などに着目した保全の活動と、身近な優れた自然地に着目し、その保全とともにそれとのふれあいを増進する活動である。

助成のポイントは、1に掲げた森づくりとそう変わるものでなく、保全や利用の活動を行う団体などの実行能力と、その活動の継続性や広がりである。ただし、助成金額が少額であるので、その成果とのバランスも助成側としては気にしている。活動助成の案件の金額で見た最頻規模（申請時）は、グラフのとおり、25万円から50万円のクラスと75万円から100

万円のクラスになっている（図1参照）。少額のクラスの助成ケースでは、専門家の助言を得るとか、ポケットマネーでは手が出にくい観察機器などの購入など備品費などが多く、比較的高額のケースでは、それらに加え、講演会や印刷物作成などの横展開のための費用が乗っかってくるケースが多い。円グラフは、少額タイプ、比較的高額タイプの、支出内訳を、運営委員会側の判断で典型的と思われるケースについてみたものである（図2参照）。

（2）研究助成

このカテゴリーも二つの対象があり、生物種や自然環境の保全体を研究するものと、それらとの触れ合いを促進する手法などを研究するものである。助成採択のポイントは、1や2の（1）の場合と大きくは変わらず、研究者・団体の能力と、研究自体の意義である。ただし、世の中には研究支援の仕組みは数多い。公的なもので言えば、JSPS（日本学術振興会）による科学研究費助成事業とか環境省の環境研究総合推進費であり、公益財団によるものも数多い。そのため、富士フィルム・グリーンファンドは、身近な自然を対象とする実践的な性格の強いものを採択する傾向がある。逆に言えば、募集要項にも明記されているように公的な研究費でその成果を広く学界で共有するこ

とを目的とした大規模な研究については、応募をしないように呼び掛けている。

助成を受けた案件の最頻規模（申請時点）は、グラフのとおり100万円から150万円と、（1）の活動助成より一回り大きい（図3参照）。その支出費目を見ると、基礎的な調査・研究助成では、研究者の本拠地と研究対象地に距離があるため、物品費に加え、交通費が顕著に膨らみ、ふれあい活動を促進する内容の研究助成の場合は、身近な自然が対象であるからか、交通費は少ない代わりに、人件費的な支出が膨らんでいる（円グラフは（1）の場合と同様にこれらの典型例の場合の内訳）（図4参照）。

年1回発行の当ファンド機関誌「グリーンレター」では、毎号に活動・研究の成果を発表するページを確保しているが、今号では40周年記念として過去10年間にわたる助成先72件から活動・研究報告をしていただいた。この報告を読んでもいただければわかるように、助成の成果は着実にあがっており、助成年度が終わってからも有意義な活動・研究が続いている。

これからも富士フィルム・グリーンファンドの趣旨に合った、人の知恵と労力を駆使した草の根の活動や研究、人の手間がかかるところに助成していきたいと考えている。

表1. 2014～2023年におけるカテゴリーごとの活動助成の申請件数及び助成件数と採択比率

年度	森林		里山		田舎・農村環境		河川・湖沼・池・湧出		その他		申請件数計	助成件数計
	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数		
2014	21	2	7	0	2	0	9	1	6	0	45	3
2015	14	3	5	2	2	0	9	0	4	0	34	5
2016	23	1	20	2	4	0	13	1	3	0	63	4
2017	16	3	15	1	3	0	7	0	3	1	44	5
2018	14	1	14	1	1	0	10	2	0	0	39	4
2019	17	2	13	2	4	1	6	0	2	0	42	5
2020	11	2	7	1	2	0	7	1	5	0	32	4
2021	14	2	14	2	8	0	2	1	4	0	42	5
2022	10	0	9	1	2	1	7	3	2	0	30	5
2023	14	3	6	1	2	0	9	2	2	0	33	6
計	154	19	110	13	30	2	79	11	31	1	404	46
採択比率（％）	12.3		11.8		6.7		13.9		3.2		11.4	

表2. 2014～2023年におけるカテゴリーごとの研究助成の申請件数及び助成件数と採択比率

年度	動植物（地域生態系）の基礎的な調査・研究		雑種の効用・保全に関する研究		その他		申請件数計	助成件数計
	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数		
2014	37	3	8	1	7	0	52	4
2015	45	3	9	0	2	0	56	3
2016	37	3	6	0	10	1	53	4
2017	37	3	10	0	6	0	53	3
2018	40	4	12	1	6	0	58	5
2019	27	3	3	0	7	1	37	4
2020	29	3	9	0	4	0	42	3
2021	37	2	6	1	4	1	47	4
2022	22	4	4	1	3	0	29	5
2023	21	4	3	0	2	1	26	5
計	332	32	70	4	51	4	453	40
採択比率（％）	9.6		5.7		7.8		8.8	

図1. 採択された活動助成の申請額の分布

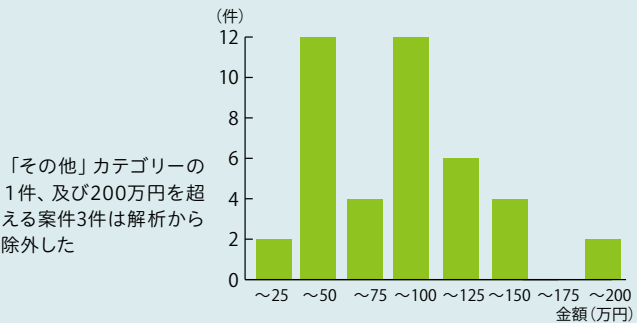


図3. 研究助成の申請額の分布

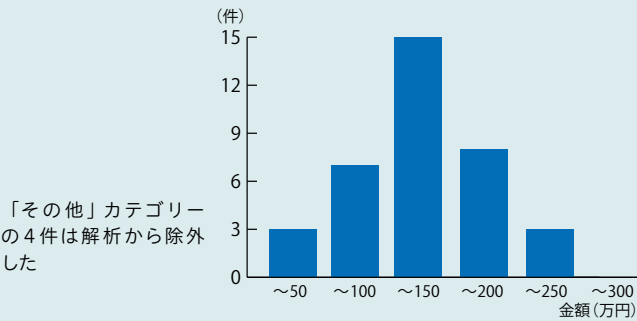


図2. 採択された活動助成の申請額の最頻額区分における代表的な使途の例
左：少額（25～50万円）のクラス、右：比較的高額（75～100万円）のクラス

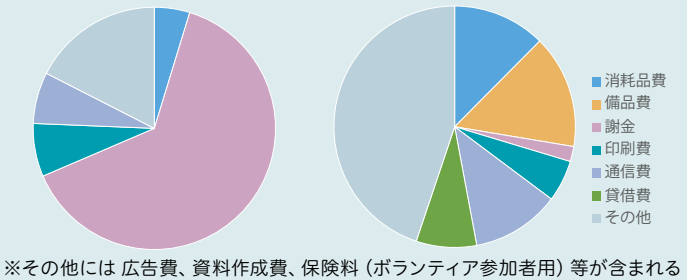
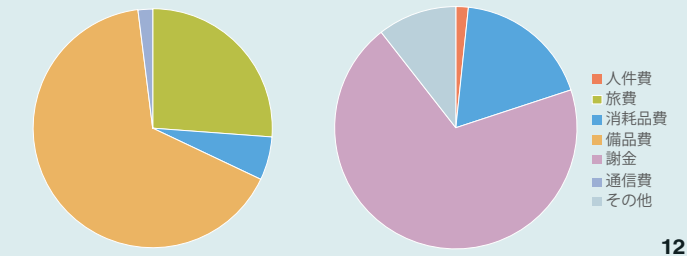


図4. 採択された活動助成の申請額の最頻額区分における代表的な使途の例
左：基礎的な調査・研究助成、右：ふれあい活動を促進する内容の研究助成





© 徳永桂子

26 Messages

「ネイチャーポジティブ」実現のために私たちは何ができるか

過去10年間にグリーンレターにご登場いただいた26名の方から
40周年記念号のテーマである
「ネイチャーポジティブ（自然を守って回復させる）」のために
私たちは何ができるかについて、ひとことメッセージをいただきました。

保全対象

のこを調べて、守るため、回復させるためには何が必要かを理解すること、それが社会の中で維持される仕組みをつくるのが大事だと考えています。保全を効果的に実践するには社会に適切に伝えることも重要です。自然保護においてFGFのこれまでの貢献は非常に大きいと感じています。今後の発展を期待しております！

阿部司 ラーゴ生物多様性研究室

地域の自然は地域の「宝」です。しかし、ただそこに自然があるだけでは本当の「宝」にはなり得ません。子どもたちを含めた地域の方々が、その有り様を知り、価値や魅力について思いを馳せ、伝え合い、共有して初めて地域の「宝」として受け継がれていくのだと思います。身近な自然を「宝」として認識し、伝える取り組みの継続、つまり人を育てることが、ネイチャーポジティブ実現の鍵と考えています。

阿部拓三 南三陸町自然環境活用センター 研究員

一つは田んぼや川で

子どもと楽しく虫とり魚とりをすること。実体験を通じて知りえないものは愛せないし、愛せないものは守れないんじゃないかな、と。もう一つは小さな自然再生。生きものがにぎわう証拠が明らかな技術と行動の組合せで、日曜大工感覚でみんなできます、ご検索を。前者は未来、後者は今のために。そして、そんなことしながらフィールドで空を見上げたらコウノトリが飛んでたりして、ね。

伊崎実那

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

森や海

に出掛け、地域の自然をしつかり見直しておくことが、自然を生かすために大切である。時間の積み重ねに気づき、風景の見え方が変わってくる。奄美群島と琉球諸島には、自然を畏れ敬いながら上手に利用してきた文化が色濃く残る。文化を通して自然を感じることが重要だと思う。身近な自然を活用し、寄り添い、伝統的な暮らしに学びながら自然回復に努めていきたい。

泉和子 島料理研究家

ネイチャーポジティブ

は、明るく美しい言葉だ。しかしこの手

の言葉を、つい最近どこかで聞いたような気がする。いつの間にか忘れ去られた言葉たち。心地良さに力強さを付与すること、それは現場を潜らせることよつてのみ実現する。言葉に現実の錘を付け、その重さを支えて、かつ明るさを失わないこと。都会の饒舌さではなく、地域の沈黙に対峙しそれを受け止めること、それが自然保護に向き合うということなのだ。

小野寺浩

屋久島環境文化財団理事長、大正大学客員教授

地球の表面積の7割

を占める海。世界は海でつながっています。一人ひとりが身近な暮らしを見直すことで、海が守られ、地球も救われます。まずは自分ができることを地道に続け、様々なステークホルダーと協力・連携していきたいです。

片山清宏

NPO 法人 湘南ビジョン研究所 理事長

このたびは発行40周年記念を心よりお祝い申し上げます。常に先駆的かつ奥深い環境テーマはもちろん、特に当事者の思いを丁寧に伝えていらっしゃることに貴誌の誠実さが表れています。貴誌42号に能登半島の里海研究を共有する機会をいただいたことを光栄に思います。社会全体が自然環境の保全への貢献が求められるこの時代において、貴誌が今後も多様な主体をつなげる橋渡しとして環境課題のナレッジリーダーであり続けることを願っています。

イヴォーン・ユー

EY 新日本有限責任監査法人
気候変動・サステナビリティ・サービス
(CCaSS) マネージャー

人々が自然を守ろうとするのは、その自然が今の暮らしにとって不可欠で、次の世代に残していきたいと思うとき。そこに経済や精神的な満足が伴わなければ守ることはできません。自然に触れ、利用し、その価値を身体にインプットすること。そこから何を守り、取り戻したいかが多くの人に伝えてくると思います。エコツーリズムはその循環を生み出すひとつのきっかけになると思います。私はこのテーマを追いかけています。

海津ゆりえ

文教大学国際学部国際観光学科教授

北アルプス・雲ノ平の登山道周辺の環境整備に参加している。作業をしていると登山者に「ありがとう」と言われる。ところが、登山道周辺の植生復元や地形の回復作業自体が楽しくてやっているのだから、感謝されるときまりが悪い。僅かな私の力でさえ自然の二助になるという実感は、優しい言葉よりも強烈だ。植生回復を手助けし、地形を直すことは創作活動であり、自身のための発露なのだ。

勝俣隆

雲ノ平トレイルクラブ 理事

自然環境は私たち人間がこの地球で生活していく上でも、人間としての文化を育むためにも欠かせない存在であることを多くの方に理解してもらうこと。そして自然と人間が共存していくために必要な時代に合わせた新しい価値感を創出していくこと。その理念を次の世代また次の世代へと引き継いでいくことが大事だと考えます。

河野円樹

綾町役場ユネスコエコパーク推進室



© 徳永桂子

26 Messages

「ネイチャーポジティブ」実現のために私たちは何ができるか

自然の恵みを心と身体で感じよう。観て、聴いて、触れて、香って、味わって。自然と自分がつながっていることを思い出そう。まちなかの公園で、菜園や林で、庭やベランダで、学校やオフィスで。日々の暮らしの中で、自然とつながれる場、つないでくれる人があることが、とっても大切なこと。

佐藤留美

NPO 法人 Green Connection TOKYO 代表理事

北米大陸の最高峰デナリ（巨大な高山）は1896年から最近までマッキンリーであり、世界の最高峰サガルマータ（世界の頂上）も1865年から最近までエベレストであった。前者はアメリカ大統領、後者はイギリスの測量局長官の名前であるが、先住民民族の要請により本来の名前に復活した。現在、日本でも伝統的地名の消滅が進行しているが、歴史ある地名の意義を見直す必要がある。

月尾嘉男 東京大学名誉教授

これまでもこれからも、地域毎に自然環境を保全することが大事だと思っています。しかし、地域毎の生物多様性の現状把握は、あまり進んでいません。先ずは、地域毎の把握を進め、それを脱炭素や社会経済活動を含めた「地域の未来像」として形にすることが重要だと考えています。

出島誠一 公益財団法人 日本自然保護協会

自然の一部としての意識をもつこと、そして、良くも悪くも自然と関わってきた歴史に学ぶこと。

西村明 東京大学准教授（宗教学）

地域に残されている知恵や技術には、持続的に自然を活用するためのヒントがあると思います。その資産が失われてしまう前に、まずは伝えるしくみをつくり、時代に合わせた資産の活用方法を社会の中に組み上げていくことが大切だと考えます。過去に戻るということではなく、過去に学ぶことで、良い未来を創っていききたいと思っています。

白川勝信

登別市観光交流センター「ヌブル」

副センター長／学芸員

自然に関わる地域の住民や企業、自治体、学校、NGOなどのステークホルダーが、その地域の自然の保全と利活用の仕方や自然と共生する社会経済の在り方について共通のビジョンを描き、自分たちのネイチャーポジティブの「物語」を描くこと。

藤田 香 東北大学 教授、日経 ESG シニアエディター

里山など身近でかけがえのない自然に目を向けること。移りゆく季節や時間の中で見つける、一瞬で心に深く刻まれる美しい風景。そんな風景をつくりだす自然を五感で感じ、身近な人々と共有し、そして行動すること。そんな一日を大事にしていけるといいな、と思います。

深町加津枝 京都大学准教授

技術原理主義からの脱皮。人の知恵とテクノロジーだけで解決できるという考えは間違いだと思える事。即効性のある炭素隔離貯蔵方法は葉緑素の光合成利用以外にない。その光合成の働きをあらゆる生態系で促進させることによって、大気の過剰な炭素をもう一度命に有利な有機炭素に戻すこと！自然摂理をふまえて自然と共に働いて初めて成功にむけられる！

ブライアン・ウィリアムズ

風景画家

自然環境の保全や復元を現場で実際に進めている人が動きやすい仕組みが充実するといったと考えています。また、変化が大きく予測困難な時代に対応するには、特定の専門知では足りないと思います。地域を舞台として、分野を超えて、いろんな立場から意見を出し合い将来構想でできる場の重要性が高まりそう。

山下慎吾 魚山研（現…環境省）

気候変動

が、重要な問題
となっています。

今夏の酷暑にもめげず湧き水が滔々と流れ、涼をもたらしてくれました。暮らしの中で、人々が究極のエコキツチンシステム「カバタ（川端）」を利用し、自然資源を活かし・守ることで持続可能な水の循環を保っています。全ては自然が循環していることを忘れずにいたいものです。

前田典子

針江生水の郷委員会

市民一人一人が自然に愛着を持つことが重要だと思います。一人一人が自身の行動を変え、さらにはより自然に配慮した商品やサービスを選択するようなレベルの愛着をどのように持ち、周りにも広げていけるかが、重要であり難しい問題だと思います。

前田尚大 環境省 職員

自然を守って回復させる

ためには、ヒトもその一員である生態系をつくる種

の間に網の目のように張り巡らされている関係のうち、互いの命の継続と繁栄を支え合う「共生」の「要」といえる関係に目を向けることが必要です。まずは対象をつぶさに見つめ、鍵となる種や種間のつながりを見いだすことから始めなければなりません。

鷲谷いづみ 東京大学名誉教授

人が自然と関わり続けていくこと

が大事だと
考えていま

す。太古から、人は自然の恵みに生かされてきました。文明を手に入れて、自然から遠ざかったことで、大切に思う心が失われていったのだと思います。自然と人との距離が近い奄美では、自然を敬う心が今も暮らしの中に生きています。世界自然遺産になったことで、そういう心が未来に受け継がれ、新しい関わり方も育まれていけばいいなと思っています。

山崎みどり 南海日日新聞記者

私は2つのことを問題提起したい。1つは獣害対策。トチの巨木が群生する私の村では、とち餅で村おこしをしています。シカによる被害で山は荒れ放題。2つ目は、スギの扱い。間伐もままならない杉林は保水能力がなく雨水が滝のように流れ、地面がむき出しに。解決策としては、シカをこれ以上増やさないために駆除をすること。山の実態も知らずに動物愛護なんて言ってる時代はとくに過ぎていきます。杉材は政府が買い上げ、その後には落葉樹を植えて落葉で保水能力をつけていく。私の考えは極端と思われるかも知れませんが、それほど私たちの山は切羽詰まっているといえます。シカやサル、イノシシなどの被害は、森を破壊するだけでなく、人々の勤労意欲まで失わせていると思います。

渡邊和重 「水源の里・古屋（こや）」代表

を意識した取
組や現状の

社会的単位に捉われることなく生態系のつながり

科学的評価・検証、環境教育の推進などが大切だと思います。地方では人口減少が進むことによる担い手不足という課題もありますが、地域内外の多様な主体が積極的に協働して幅広い視野で創意工夫や努力を重ねていく姿勢がカギになると思います。

野本和宏

釧路市立博物館 学芸員

FGF では、都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に資金援助しており、長期的な見通しで助成することによって、大きな成果をあげてもらおう助成を行っています。

1984年から2023年までの
第1期から5期までの活動の概要と
現在の様子をお伝えします。



1980年代

第1期助成 (1984～1992)

まいおか水と緑の会（横浜市戸塚区の市民団体）

地元市民の手で谷戸の再生

横浜の原風景である谷戸。高度経済成長期には、都市域の拡大によって緑地が急速に失われ、谷戸は宅地に代わった。生活様式も変わり、地域の自然に根差した文化が失われる危機に、横浜市戸塚区では、1983年に、谷戸の再生を図り、地元の自然や文化を市民の手で受け継ぎ育てることを目的とする市民団体「まいおか水と緑の会」が設立された。

「まいおか水と緑の会」は、設立当初からFGFの第1期助成を受けて活発に活動しており、横浜市より舞岡公園予定地の使用許可を得て、休耕田の復元や雑木林の手入れ、生物の観察会などの自然体験や農文化体験を実施。助成の成果として、自然体験等のイベントだけでなく、舞岡地区の民俗

調査・記録、記録映画制作も行っている。

市民と自治体との連携

舞岡公園の開園準備に当たっては、「まいおか水と緑の会」は蓄積した市民活動のノウハウを横浜市に提供するとともに、公園計画の施設整備や管理運営についても具体的な提案を行い、舞岡公園の公園設計に寄与している。これは、市民と自治体が連携して計画・管理・運営を行った先駆事例となった。

1993年には、「舞岡公園」が開園。開園後は「まいおか水と緑の会」のノウハウを受け継いだ「舞岡公園を育む会」が公園の一部の管理運営を市から委託され、さまざまな自然体験、農文化体験のプログラムを実施している。



田んぼの草取り（2023年）



手もみ茶作り体験（2023年）

第2期助成 (1988～2007)

冬雷塾（東京都檜原村の地元青年グループ）

フジの森の誕生

1981年に結成された地元の青年グループ「冬雷塾」を中心として、檜原村では人と自然とのふれあいの場、周辺都市の人々と村の人々の交流の場を作ることを目

的とした活動が行われてきた。第2期の助成を受けて1990年にオープンした自然体験型活動拠点とした約7500㎡の山林は「フジの森」と命名され、子どもたちにとって自然とふれあう場、交流の場を広げてい

く場となるよう、1年を通して檜原の自然や文化、森の楽しみを実感できるイベントを行ってきた。
1993年には地元材を活かした木造の檜原野外音楽堂を建設し、FGF10周年記



誕生当初のフジの森

念事業として故C・W・ニコル氏の講演やオーケストラの演奏などを行った。音楽堂の竣工により、落語会や舞踊、日本フィルハーモニー交響楽団によるコンサートなど文化活動の幅も大きく広がった。音楽活動はさらに広がりをもみせ、現在では村内各地の民家やお寺なども舞台としてイベントが行われている。

変化する管理やプログラム

フジの森は、整備された当初から民有地を借りて活動していたが、檜原村が

2004年に策定した教育の森条例で定める教育の森事業の一環として、フジの森とその周辺の山林を2005年に購入したことを機に、冬雷塾はNPO法人フジの森と名称を変え、2008年から指定管理者として運営・管理に携わることとなった。フジの森ができてから今年で33年が経ち、自然体験や文化体験プログラム、周辺環境の整備、地産地消のレストランの運営などの活動を続けてきたが、2023年から檜原村の意向で運営が大きく変わることになった。教育の森条例の廃止に伴い、これ

までのプログラムを一部終了して、コロナ禍で積極的に進められなかった、子どもと自然とのふれあい活動を実施することを企画している。



子どもと生きもののふれあい活動

第3期助成 (2011～2015)

金沢大学 角間里山本部（金沢大学の学内組織）

里山がキャンパス

金沢大学が里山保全の活動を始めたきっかけとなったのは、1989年から開始された、金沢城跡から角間丘陵への総合移転だった。金沢大学は移転先の角間丘陵のキャンパス造成に残された薪炭林や棚田を自学特有の環境資産ととらえ、キャンパスの3分の1を「里山ゾーン」に指定し、活用していくことを決定。1999年には、角間キャンパスの恵まれた自然環境を大学の教育研究に活用するだけでなく、広く市民の学習の場として開放し、さまざまな自然学習とボランティア活動プログラムを作成・実施するために「角間の里山自然学校」を発足させ、教育研究フィールドの整備、市民に開放した生涯学習機会の提供、里山の復元などに取り組んできた。

移転が完了した2010年には、我が国

固有の文化的価値を有する里山をキャンパス内に有する大学として、里山ゾーンを活かした「21世紀型の里山キャンパス」を作り出すために、大学の一部門として「角間里山本部」を設置。角間里山本部には管理、教育、連携の3部門がおかれ、里山ゾーンの総合的な管理運営を開始することになった。

広がる里山ゾーンの活用

2011年から5年間、FGFの助成を受けて、里山ゾーンの保全・活用のマスタープランづくりを進めた。その中で、管理部門は里山に入りやすい環境づくり、教育部門は学長との山歩きイベントや角間里山の日の制定、哺乳類の生息状況調査、連携部門では地域団体と協働した里山保全活動や企業のCSR活動との連携を支援する団体

の設立支援などを実施している。

金沢大学では里山ゾーンを取り巻く環境の変化を踏まえ2019年に里山本部を再編。4つの部会（教育企画、研究利用、連携保全、野生生物）からなる新体制のもと、高度な自然体験・生涯学習プログラムの研究開発と人材育成、金沢大学角間キャンパス内の里山ゾーンの「市民開放型整備」、里山の生態学調査研究などに取り組んでいる。



授業「角間の里山づくり」で竹林整備する学生（2023年）

第4期助成 (2016～2020)

エゾリスの会 (北海道帯広市の市民団体)

伊藤 育子 (エゾリスの会会員、里山をつくろうプロジェクト企画・運営担当／モニタリングサイト1000帯広の森サイトコーディネーター)

F G F機関誌『GREEN LETTER 43号(2021年発行)』の助成先訪問記に取り上げていただきましたエゾリスの会と申します。私たちは、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らし続けていくまちづくりを目指して、帯広で1986年に発足した市民グループです。エゾリスも好きですが、エゾリスに限らず多くの生きものたちとともに暮らしてゆけるまちづくりを目指す仲間の集まりです。

森づくり活動

私たちは、北海道帯広市のまちづくりの基盤となっている都市公園『帯広の森』で継続的な育林・自然復元作業を行いながら、自然とのつきあい方を参加者自らが考えていくことを目指す「里山をつくろうプロジェクト」を1989年に始めました。また、2008年からは環境省のモニタリングサイト1000里地調査において『帯広の森』をコアサイトとすることをお引き受けして、植物相、鳥類などの各生物相の調査にも取り組んでいます。

作業を楽しみ、調査により森への理解も



産みだすエゾアカガエルの卵塊!



エノスジグロシロチョウ (左) とスジグロシロチョウ (右)



チョウの調査をしながらも、イワアカバナの種子の出来具合を確認



帯広のアイドル エゾリス



モニタリングサイト 1000 カエル類調査中。ぐちゃぐちゃドロドロを歩くのも楽しい!



子どもは自然のなかでやりたいことに夢中になる。その環境を用意するのが大人の役目



ヤマメを捕まえて盛り上がってます!



初めての伐倒に取り組み中の小学6年生

さらに季節が進むとチョウの調査が始まります。虫取り網と図鑑、観察するためのケースを携え、チョウを見つけては追いかけて、捕まえ、種を調べていきます。走ってチョウを追いかける人「あっち、あっち」と主に指示を出す人。大人も子どもも元気に走っているのをほほえましいと思いつつ、私も時々走ります。

里山をつくろうプロジェクトでは、冬の雪が積もった中、スノーシューなどをはいて森の中へ。十勝の冬はとっても寒いのですが、作業をしていると体が温まり、木の香りの漂う冷たい空気を吸うのはとても気持ちがいいです。息子は去年手に入れたマイのこぎりで、今年、木を一本切り倒させてもらいました。木を切り倒すのは初めて。どっ



チェーンソーを積んだソリを小学生が引く

大人も子どもも楽しんで学べる『帯広の森』

エゾリスの会には子ども向けの活動はありませんが、大人も子どもと一緒にそこにあるものを見て、それぞれができることをして楽しい時間を過ごしています。活動に参加していると、森は木を植えただけでは戻らないこと、いろんな生きものが関係しあっていることをひしひしと感じます。これから5年経ったら、さらに10年、20年経ったら、この帯広の森はどうなっているのでしょうか?そんなことを思いながら、また子どもたちと帯広の森に行きます。

林床植物たちの再生過程をみんなでモニタリング中



チョウを捕まえた三日市則昭会長の笑顔

開拓で拓かれた土地にふるさとの森を再生しようとしている『帯広の森』は、最初の植樹祭から40年以上を経過し植樹木の成長によって森らしい外観は整いつつあります。しかし、自律的な森となるためには林床植生の再生こそが本丸です。その道のりは容易ではないことが「未来のための森づくり事業」でも明確となりました。

これまで以上に気合いを入れて活動します!と言えると格好良いのですが、私たちはこれまでどおり、急がば回れと申しもしょうか、自然相手に効率を求めず、少しずつ、ゆっくり楽しく行こうと思います。自然の森に様々な生きものが棲んでいるように、森の作業や調査にもいろいろな役割分担があります。高い技術や詳しい知識がなくても担える役割もたくさんあります。ここからは書き手を交代して、活動の様子をご紹介します。楽しそう!と思われ



右上 / ドローン画像を見ると、鞍馬の家々は鞍馬川に沿って立ち並び、西の鞍馬山と東の竜王岳に挟まれていることがよくわかる（写真：王間氏）
右下 / 由岐神社への参道。賑やかな参道には土産物や食堂が並び、左 / 川沿いに並んだ家の裏からは川面に降りる石段が今も残る

火祭りや 暮らしの資源を 自分たちの里山で 鞍馬火祭保存会（京都市鞍馬の市民団体）

FGF 運営委員であり
当誌の渡辺綱男編集長と事務局が、
11月4日から5日にかけて現地を訪れ、
助成開始から3年目の
鞍馬火祭保存会の活動を拝見してきました。
保存会では「火祭りや暮らしの資源が
自分たちの里山でまかなえる」。
そんな未来を目指しています。

文・グリーンレター編集部 写真・橋本幸則

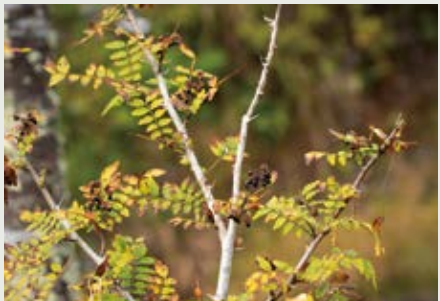
京都市左京区を流れる鴨川の支流「鞍馬川」沿いの小道をゆっくり歩く。11月だというのに汗ばむような陽気のなか、鞍馬火祭保存会会長の三宅徳彦さんと副会長の三浦公三さんが、取材に訪れた私たちを先導してくれる。「この鞍馬川で火祭りに使う松明をくくるためのフジの根を洗います。わたしら子どものときは、ようこで遊んだ。ゴリもおる、カエルもおる、遊び場だらけや。」と語るおふたり。秋の午後の陽射しをうけて川はせせらぎの音をたてて流れ、鳥や虫の声以外は聞こえてこない。川沿いに



昔から松明の材料は
地元の方々が協力し合いながら、
身近な里山から採取し、
加工してきた。

左が鞍馬火祭保存会会長の三宅徳彦さん、右が副会長の三浦公三さん。火祭りの材料を保管する倉庫を見せていただいた。「火祭りのすぐ後だから良い材料はないけど」と言いながら、三宅さんが手にしているのがコバノミツバツツジなど（柴）。三浦さんは右手にアカマツのジンテでできている手松明、左手にフジの根を持つ

火祭りはただの刺激じゃない。
一度参加すると炎の虜になってしまう。
オレンジの炎と匂い、
そして音。



上 / 2023 年の鞍馬の火祭り。若者が御神輿の先頭に大の字になってつかまる「チョッペン」は鞍馬での成人になるための通過儀礼の名残りとも言われている(写真:深町加津枝氏) 下 3 枚 / 鞍馬の伝統的な保存食の「木の芽煮(きのめだき)」を炊く「鞍馬かどや」のご主人、原さん。大鍋で炊いて3〜4 時間ほど蒸らして昆布と一緒に細かく刻む。地元では半栽培のサンショウを活用して季節に合わせて自家製で楽しむ人も多い

並んだ家々の裏からは川面におりる石段が伸び、昔ながらの景観が保たれている。どこか懐かしさを感じるこの鞍馬が、富士フイルム・グリーンファンドの「未来のための森づくり」第5期事業の対象地だ。
2021年度から助成が開始され、今年は3年目の取り組みが進められている。活動の目的は、地域の伝統文化である火祭りや暮らしの資源が自分たちの里山でまかなえること。地域の人々が平安時代から大切にしてきた「鞍馬の火祭」に用いられる松明の材料を守り、再生させる。またサンショ

ウヤクリなど、鞍馬の伝統的な食文化を守り、伝える、などを目指している。昔から松明の材料は地元の方々が協力し合いながら、身近な里山から採取し、加工してきた。またサンショウなどは、山に自生しているものや庭に植えたものを四季折々に利用してきた。三宅さんや三浦さんが子どもの頃には、鞍馬の町中を歩くと、サンショウを炊く匂いと一緒に、トントントントンとリズムカルなサンショウと昆布を刻む音が聞こえてきたという。今号では鞍馬での祭りや暮らし・生業を支えてきた里山の恵みを

未来につなげるための鞍馬火祭保存会の活動を紹介したい。

シカがすべてを食べつくす

今、どこに行ってもシカの食害の話を聞かないことがない。ここ鞍馬の里山も例外なく、ニホンジカの影響で、火祭りで用いられる松明の材料となるコバノミツバツジ、クロモジ、フジなどの入手が難しくなってきた。もっとも1960年代ごろから燃料用の薪炭の利用がなくなると同時に



里山は荒れ、70年代に入ってから松くい虫の影響によるマツ枯れなどによって、すでに里山を維持することが難しくなってきた。
保存会では、「由岐神社の森」へのシカの侵入を防ぐために、全長230m、高さ1.8mのシカ防護柵を2022年の夏に設置した。由岐神社の森は、鞍馬集落から車で10分ほどに位置するアカマツとコナラの多い里山である。薪炭林等として利用され、集落から近い便利な火祭り素材の入手先であったが、ここ最近では利用されなくなった急斜面はヤブと化し、コバノミツバツジなどの新芽はすべてシカに食べられてしまっていた。この森にぐるりとシカ防護柵を設置し、再び火祭りの材料を手に入れられる場所にしようとするプロジェクトが動き出している。

五感で感じる火祭り

そもそも鞍馬に住む人々にとって火祭りとは何なのか。祭りの中心になるのは「火」そのもの。西暦940年に、御所から鞍馬の地へ御遷宮される由岐大明神を河原に生えていた葦を束にした松明に火をつけて村人がお迎えしたのが始まりと伝えられている。大人3、4人が担ぐ大松明は、長さ4m、重さ100kgほどもあり、その大きな松明が燃え上がるさまは人々を酔わせるという。祭りは由岐神社と、神社に続く鞍馬街道沿いの集落一帯で行われ「サイレヤ、サイリョウ」の勇ましい声と共に、街道が松明の炎で埋め尽くされていく様は圧巻。会長、副会長が口々に言うには「火祭りはただ



上右 / 1950 年代まで鞍馬の多くの人が炭間屋を生業にしていた。三宅会長のご自宅にはその頃の貴重な道具がたくさん保存されている 上中上 / 「鞍馬かどや」の工場の天井には火祭りの材料が保管される。いつもの生活のなかに火祭りが顔をのぞかせる 上中下 / 火祭りが終わると武者草鞋(わらじ)はこの通り。松明の火の粉が容赦なく降りかかり焼けてしまう 上左 / フジの根は、ひげ根と節を処理して鞍馬川で洗う(写真:南尊大氏) 下右 / 火祭り資材倉庫の柴 下左 / 頑丈なステンレス製のシカ柵。設置は大変だったが完璧な仕上がりがてシカを寄せ付けない

- *関係論文
- ・ 日高美美,深町加津枝,伝統行事「鞍馬の火祭」で用いる森林の柴採取ポテンシャルの評価,日本緑化工学会誌,2021年47巻1号p. 69-74
 - ・ 奥野真木保,深町加津枝,京都市鞍馬における住民のサンショウの採集利用と継続要因,ランドスケープ研究, 2023年86巻5号p. 617-622
 - ・ 田中慶太,深町加津枝,京都市鞍馬本町におけるコバノミツバツツジの潜在生育地の推定と柴資源としての利用可能性,日本緑化工学会誌,2023年49巻1号p. 69-74 など



午前中の学生さんたちによる調査のようす。「昼食べたらまた山入るか?車出すて(三宅会長)」
「はい。お願いします! (大学生さんたち)」というやり取りが微笑ましい



①	②	③
④	⑤	⑥

由岐神社の森で生長する植物たち ①松明の材料として利用されるクロモジ ②植栽されたコバノミツバツツジ ③天然更新したアカマツ ④岩場の斜面のイワナシ ⑤シカ柵内の明るい環境で生長したヤマツツジ ⑥急斜面で植物の世話をする



鞍馬に「1年13カ月」という言葉がある。「祭りのために1カ月分多く働く」という意味だそうだ。「外からやって来た人は、すごいお祭りですね。お金がかかるでしょう」と

鞍馬13カ月

の刺激じゃない。一度参加すると炎の虜になってしまう。オレンジの炎と匂い、そして音。五感で感じてほしい」と。アカマツの油の「ジン」が燃える匂いは独特なもので、この地域で育った人々には祭りの匂いとし

てしみ込んでいるという。

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当



手松明づくり体験学習。フジの根っこでアカマツのジンを縛ることに挑戦する(2022年12月・写真:王間氏)

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

言わはるけど、多くはボランティア。1年間かけての祭りの準備にはたくさんの方力がかかっている」と三宅会長。松明の材料はすべて山から採取してきた天然の素材。コバノミツバツツジなどの柴、アカマツのジン、木羽*を美しく形を整えてフジの根で括って仕上げる。

材料の多くを集めるのも松明を作るのも、祭りに参加する鞍馬の人々。春にフジの花が咲いたところを見定めて秋にフジの根を探しに行っても、半日歩きまわって見つからない日もある。そして、ようやく見つけたフジの根を固い地面からツルハシで掘り出し、10mの根っこを一本取るのに20分はかかるという。

鞍馬の方々はほんとうに手間を惜しまずよく働く。予め、頼んでおいた業者さんに、5月、6月にかけて松明用の柴切りをしてもらい、乾燥のため山中に置く。9月には柴(約300束)を氏子が山から集落へ運び、各家に配る。10月にはフジの根採取とフジ洗い、松明づくりなど、一年中大忙しだ。作業は年配の方から若い人へ受け継がれ、神事であるがゆえに決まり事もたくさんある。「火祭りを見にくる人も自分のところの神さんを大事にせんと。自分とこのお祭りに協力してはる?」、という言葉是三宅さんから投げかけられ、今もその言葉を反芻している。

鞍馬の女性たち

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとっても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

日の草鞋・衣装の準備から始まり、家の表の格子をはずし、清掃する。3日前の19日の火改めからは四つ足のものを食卓に並べず精進する。三宅会長の奥さまの三宅和美さんにお話しを伺った。

「主人とはじめて鞍馬の火祭りを見たときは、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来ると必ず太鼓をたたく。鞍馬の女の人はすごいなあ、その母から私につながっていくことを思うと、えらいところに来たなあ」と(笑)。

祭りの日はどこの家にもお客さんが大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上ということもあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰯と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するといえ、10月からたくさんのお栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でとれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬で咲いているものが使えたらいいなあ。男も祭りに誇りをもっているけど、裏方の女の人も大変と言いながらもそうかもしれないですね。」

三宅家の息子さんは10月になると毎週末帰ってきて祭

まな成果が上がりに始めている。*(関係論文はページ左上を参照)

調査の合間を縫ってボランティアを買って出してくれる学生らと地元の方との信頼関係は厚い。「彼らは真面目で頼んだことをきちっとやってくれる」「こちらの言うことを正確に理解できるし、疑問点も聞いてくれてやりやすい」「役員も年がいつてきて、鞍馬自体も人口が減っているから大助かりですわ」「この学生さんたちの働きがあれば、この由岐神社の森のシカ防護柵は張れへんかった」と地元の方たち。学生たちも、「普段山に入っている方について作業をするのは勉強になります」「仕事の段取りなど、気を付けることも教えていただける」「火祭りがあることで、地元だけでなく他の地域の人も絆ができたのがとてもいいと思う」と前向きだ。世代を超えた新たな協働が生まれつつある。

現在、火祭りの下準備を中心となって活動している地元の正副区長を始めとする火祭関係役員は18名。ぎりぎりで活動をまわしている感もあるという。

由岐神社の森の柴を刈るにはあと12年、一回りはかかる。変わるもの、変わってはいけないものを見つめながらの息の長い活動に向けて支援が求められている。

取材2日目は朝から由岐神社の森へ。こ

学生さんとともに

りの準備をし、娘さんも小さい子どもと一緒に祭りに参加するそう。どうしてこんなに鞍馬にこだわるかというと「やっぱり祭りがあるからやろうなあ」と。祭りを通して女性同士の付き合いも深いという。

昨年、保存会は地元の小学生とその保護者を対象に手松明づくりの体験学習会を実施した。はじめての試みということだが、楽しいと思った子どもたちも多いそうで、「こうした取り組みが将来につながっていつてくれるとええなあ」と会長と副会長はその話をしながら心から嬉しそうだった。

取材2日目は朝から由岐神社の森へ。こ



笑顔が素敵な三宅ご夫妻

男も祭りに誇りをもっているけど、女の人もそう。

自然を大切に思う心を育てる絵地図と作文 通算実施 40 回を迎えました！

わたしの自然観察路コンクールは、全国の小・中・高校生を対象に身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによって次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的に実施されています。

1984年度からはじまった歴史あるこのコンクールには、これまで多くの子どもたちが応募し自然観察や考察を通して自然を大切に思う心が醸成され作品づくりを通して表現力を身に付けてきました。

今号では、2023年度の受賞作品を紹介するとともに FGF40周年を記念して過去の実績者への取材を行いわたしの自然観察路コンクールの魅力を伝えます。



2023年度 第40回 わたしの自然観察路コンクール報告



高校生の部

ぼくの通学路 川の生き物観察

石川睦紀さん（愛知教育大学附属特別支援学校高等部 1 年生）
愛知県

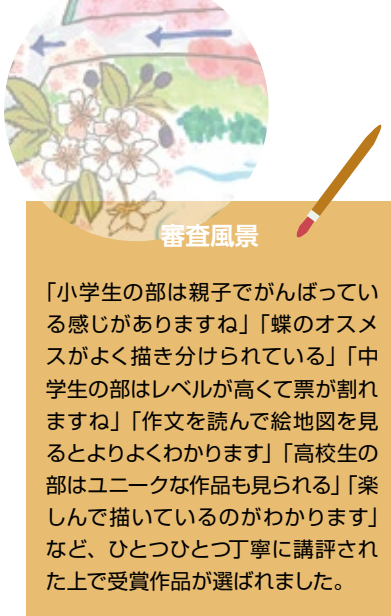
紹介するのは、僕の通学路です。学校は 4 月からですが、道を覚えて一人で学校に行けるようにするために、3 月からこの道を歩いています。通学路は伊賀川ぞいです。伊賀川は一級河川矢作川水系乙川の支流の小さな川です。岡崎城の西側を流れるこの川は、通称伊賀川桜堤と呼ばれ、観光名所になっています。地元の方が川の手入れをしていて、とてもきれいな川です。僕の歩く所は岡崎城からはなれているので、桜が満開の季節でも、近所の人が散歩するくらいで、普段からあまり人はいません。朝夕は僕と同じ通学に利用する学生がたくさんいますが、自転車通学が多いせいか、このきれいでたくさんの生きものがある川をのぞいたりしません。僕は練習の時、この道がとても楽しくてきれいだったので、初めて歩いた時は往復で一時間もかかってしまいました。こんなにも歩くのが楽しくて気持ちよくて、のんびりする道をみんなに紹介したいと思います。

中学生の部

荒神山公園の観察路

原田千愛さん（滋賀県立守山中学校 1 年生）
滋賀県

荒神山公園は、滋賀県彦根市にある山に囲まれた自然あふれる場所です。そのため、一年を通してたくさんの植物や生物を観察することができます。日当たりが全体的に良いので湿気は少なくけはあまり見られません。しかし、草むらや林、石が多い場所などいろんな環境があり生物の観察にうってつけです。また、敷地内には給水ポイントがいくつかあるので、暑い夏でも歩きやすい観察路です。近くには、川も流れており水鳥なども観察できます。そんな荒神山公園の観察路を十個のポイントに分けて紹介していきます。



第 40 回になる 2023 年度は、4 部門で合計 724 件の応募があり、環境大臣賞の 3 件を含め、計 21 件の優秀作品を表彰しました。

ここでは環境大臣賞を受賞した小学生の部、中学生の部、高校生の部の 3 作品（絵地図と作品の一部）をご紹介します。

小学生の部

私のせせらぎ散歩道

古賀詠麻さん（清瀬市立芝山小学校 6 年生）
東京都

私には時間があれば散歩に行ってしまうほどのお気に入りの観察路があります。全長約 1.9 キロメートル、1～2 時間などあつという間に過ぎていきます。自宅を出て、雑木林の中の小道や川沿いの遊歩道、せせらぎ公園、畑を通るルートです。清瀬は東京郊外にある街ですが、祖父母が住んでいる長野の面影を感じられるほど自然豊かです。雑木林や川、せせらぎにはそれぞれの動物たちが自生していて、散歩するたびに四季折々の姿を見せてくれます。私は、「清瀬の自然を守る会」というボランティアに参加しています。そこでの活動は主に雑木林の管理等です。他にも、川の保全活動をしている団体もあるそうです。清瀬の素晴らしい自然はそんな方々によって守られているのを実感でき、私も自然を守る役割を引き継いでいくのだと思うのでやりがいを感じられます。では、これから私の自然観察路のポイントを案内していきましょう。

絵地図の世界へ、 散歩に行こうよ

グリーンレター編集部

「わたしの自然観察路コンクール」は、絵地図と作文をセットにして応募する、なかなか難易度の高いコンクールです。そのハードルを越えて何度も応募し、しかも複数の入賞経験のある3兄弟がいっしょになると聞き、滋賀県近江八幡市のご自宅にお話を伺いに行ってきました。ご自宅のある「安土」は信長のゆかりの町です。滋賀県の東部、琵琶湖東岸に位置し、安土桃山時代の語源ともなった安土城が建てられた地として知られています。



たかひろ
稲垣 貴厚くん
(長男) 高校1年生

よしひろ
稲垣 慶宥くん
(次男) 中学校2年生

のりひろ
稲垣 典寛くん
(三男) 小学校6年生

家族全員、散歩好き！



家族の日課「散歩」

こちらの3兄弟、動植物のイラストが非常に上手で、発想も素晴らしい。応募したきっかけは？とお尋ねすると、「毎日、家族で散歩していて、どこで何の生きものを見つけたかを地図にまとめてみたら面白いかもね」と言っていたところ、お母さんがこんなコンクールがあるみたいよって持ってきて来て。面白そうと二度応募したらはまってしまつて。夏が来たら応募するもんだということに（笑）。

お父さんのお仕事の関係で転勤が多かったという稲垣家。「引越するたびに小旅行気分、毎日散歩しては、そこどんな生きものがいるのかを見つけて楽しんできました」とお母さん。同じ道でも毎日歩いてみると、何かしら発見があつて飽きないですよ、と。玄関先にキアゲハ用のパセリを置き、毎日の成長を楽しむ昆虫好きお母さんです。お父さんも負けず劣らず、地図、歴史、昆虫何でも来いという方で、100均の材料で標本箱を作ってしまうほど。やはり家族や環境の影響は大きいようです。

今、思うこと

虫好きな友だちにはなかなか出会えないという3兄弟ですが、それでもまわりに影響を与えるよう、長男の貴厚くんによると「ブラックバスは脂に臭みがあるけど、ブルーギルはけっこういける」とのこと。近くの川で釣りをしては、友人と調理し、試食を楽しんでいる模様。地学部にも所属していて、高校がある山の成り立ちを調べているという彼に、今思うこと、同世代に伝えたいことを聞かけると、「植物ひとつ、虫ひとつ、岩石ひとつ見つけるだけで、知識は広がって

審査員紹介



web サイトが公開されるまでは冊子で作品紹介がされていた（初代運営事務局 / 国立公園協会発行）。2012年に事務局は日本自然保護協会に引き継がれ、2018年からは日本環境教育フォーラムが担当する



左手前から小林光氏（公益信託富士フィルム・グリーンファンド運営委員長）、水谷努氏（環境省）、赤松良伸氏（三井住友信託銀行）、執行昭彦氏（日本空間デザイン協会）、瀬尾隆史氏（日本環境教育フォーラム）、星野俊彦氏（富士フィルムホールディングス）

緑のための支援事業
わたしの自然観察路コンクール

第40回 わたしの自然観察路コンクール 入賞作品一覧

賞	作品タイトル	氏名 (敬称略)	学校名	学年	都道府県
小学生の部 6作品					
環境大臣賞	私のせせらぎ散歩道	古賀詠麻	清瀬市立芝山小学校	6年	東京都
優秀賞	鎌倉の自然観察路	木内瑛太	鎌倉市立御成小学校	2年	神奈川県
優秀賞	駒込・すがも生き物たんけんマップ	大塚史翔	豊島区立駒込小学校	1年	東京都
入選	湯の沢山菜採りの散歩道	平井満帆	飯能市立名栗小学校	6年	埼玉県
入選	楽しいな!! 理科が学べるぼくのまち	高山翔暉	裾野市立千福が丘小学校	3年	静岡県
入選	キーナの森のたからものたち	小島匠太	神戸大学附属小学校	1年	兵庫県
中学生の部 6作品					
環境大臣賞	荒神山公園の観察路	原田千愛	滋賀県立守山中学校	1年	滋賀県
優秀賞	函南町の原風景	米田莉子	不二聖心女子学院中学校	2年	静岡県
優秀賞	のぼりべつの自然	成澤結紀乃	北海道登別明日中等教育学校	2年	北海道
優秀賞	里山の夏草	卯山愛菜	明治大学附属中野八王子中学校	3年	東京都
入選	群馬県立公園群馬の森観察路	小倉あおば	群馬県立中央中等教育学校	3年	群馬県
入選	夏の三ッ池公園自然路～幼い頃から親しんできた思い出の公園～	大森らら	明治大学附属中野八王子中学校	1年	神奈川県
高校生の部 6作品					
環境大臣賞	ぼくの通学路 川の生き物観察	石川睦紀	愛知教育大学附属特別支援学校 高等部	1年	愛知県
優秀賞	自然観察の森～自然を満喫する～	四海香佳	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
優秀賞	お地蔵さまとまったり散歩道～自然と共に歩む～	神足佳音	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
優秀賞	地上107cmの景色	小川詠子	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
入選	堀と石垣に囲まれた我が街の自然観察路	中本日和	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
入選	おいしそう たのしそう 散歩道	森本真以	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
団体の部 3作品					
優秀賞	姉弟で逆川緑地大冒険 part3	園部柚玲 計2名	茨城大学教育学部附属中学校・小学校 (逆川緑地自然観察隊)	中学1年 小学5年	茨城県
優秀賞	香住の観察路～水でつながる生き物 map～	藤井大翔 計5名	兵庫県立香住高等学校 (課題研究清水班)	高校3年	兵庫県
入選	ほくしょうぶんこうのまわりのかんさつじ	細川来吾 計3名	長崎県立佐世保特別支援学校 北松分校 (ほくぶん2くみ)	小学3年 小学4年	長崎県

詳細は、「わたしの自然観察路コンクール」の公式サイトをご覧ください。
<http://kansatsuro.jeef.or.jp/>

FGF 40周年を迎えて
40th anniversary of FGF



3 緑とふれあいの活動助成

4 緑の保全と活用の研究助成

1984年からはじまった助成件数は40年間で220件、助成総額は4億円を超えました。
ここでは2013年から10年間の助成先から、助成後を含めた活動・研究の報告をいただきました。
なお、83件のうち11件はご寄稿が難しいと報告があったため、72件の報告となります。



作文等はサイトでご確認ください
<http://kansatsuro.jeef.or.jp/>



よしひろ
稲垣 慶宥くん
(次男) 中学校2年生

入賞作品

- 1年生：小学生の部 入選
にぎやかさん歩道
- 2年生：小学生の部 入選
日本さい古の神社でくらす生き物さん歩道
- 6年生：小学生の部 入選
いつまでも残したい散歩道



稲垣 慶宥くん
(光輝学園つくば市立松代小学校 2年生)
「日本さい古の神社でくらす生き物さん歩道」
2017年・入選



のりひろ
稲垣 典寛くん
(三男) 小学校6年生

入賞作品

- 1年生：小学生の部 環境大臣賞
おいしいさそう みつけたマップ
- 2年生：小学生の部 優秀賞
生きもののいっぱい見つけたよマップ
- 3年生：小学生の部 優秀賞
ぼくの大好きなさん歩道 すごろくマップ

稲垣 典寛くん
(光輝学園つくば市立松代小学校 1年生)
「おいしいさそう みつけたマップ」
2018年・環境大臣賞



たかひろ
稲垣 貴厚くん
(長男) 高校1年生

入賞作品

- 3年生：小学生の部 優秀賞
にぎやかさん歩道
- 4年生：小学生の部 優秀賞
神様とくらす生き物さん歩道
- 6年生：小学生の部 優秀賞
ゆったり、歴史、散歩道



3兄弟仲良し!



稲垣 貴厚くん
(光輝学園つくば市立松代小学校 6年生)
「ゆったり、歴史、散歩道」
2019年・優秀賞



いく。その土地のことも広く知れる。外に出てみれば知識も話せる相手も増えると思う。3兄弟とも地域の野球部にも所属しているというだけあって日焼けしている次男の慶宥くんは「意外と女子より男子のほうが虫を怖がるかも(笑) 自分の決めたことは最後まで投げ出さないでやりとげたい。それが評価されなくても次につながれることを発見できるから」。同世代に言いたいこととして、考えることをやめないで、とちよと大人っぽい表情で語ってくれました。三男の典寛くんは「虫がきらいなのはしょうがないかなとも思うけど、ちよとでも自然に触れたら、虫とか自然を好きになれるかも」。絵地図の発想も構図も素晴らしいのは、この素直な考え方が生きているのだと思いました。

お話を聞いた後、日課だという散歩を一緒にさせていただきました。
意外と早いペースで歩くご家族。毎日歩いているだけあります。途中、道沿いの昆虫や水辺の鳥を観察しながら、安土の風情ある街並みをどんどん歩きます。いつしか絵地図にも何度も登場している北川湧水へ。安土は伏流水が豊富で、自噴する湧水が多く見られるそうです。
最後に今日の散歩の終着地、沙々貴神社へ。広い境内で「あ、ハニミョウ」と、めざとく見つけた3兄弟。テレビより、ゲームより、外に出るのは面白いよ、と教えてくれた3兄弟。わたしも明日、散歩してみよう。



3 緑とふれあいの
活動助成

4 緑の保全と
活用の研究助成

no.164

2017年度助成
研究助成

知床国立公園とその周辺における

ヒグマと人の共存の道を探る調査研究

世界自然遺産知床のヒグマと人

下鶴 倫人

(北海道大学大学院獣医学研究院 准教授)



サケ科魚類を食べて冬眠に
備えるヒグマ

私たちが知床財団と共同で知床のヒグマの研究を始めて約15年が経ちました。この間、富士ワイルド・グリーンファンドをはじめ、様々な団体・機関より研究助成をいただいたお陰で、ヒグマに関する様々な知見が蓄積されてきています。しかし同時に、人とヒグマの軋轢も年を追うごとに深刻化していくのを目の当たりにしてきました。そんな私たちの15年。分かってきたことと、これからの課題について、お伝えしたいと思います。

世界トップレベルの ヒグマ生息密度

はたして知床に何頭ヒグマがいるのか？我々は長年の謎に迫るべく、2019年から2020



ヒグマが木に残した毛を回収する様子

年にかけて知床半島全域を対象とした大規模なDNA調査を実施しました。半島全域に70基近いヘアトラップ（ヒグマの背こすり行動を利用し、木に付着した毛を回収する仕組み）を配置し、毛の回収を実施しました。またDNA解析の試料となる糞を、ひたすら探し回りました。2020年は、体毛約7000サンプル、約500個もの糞を集め、DNAによる個体識別を行いました。この結果、知床半島に約500頭のヒグマが生息していることが明らかになりました。これは、小さな知床半島が世界でもトップレベルのヒグマ高密度生息地であることを意味しています。知床では現在、1300頭を超えるヒグマの個体情報がデータベース化されています。あるクマが問題を起こした場合、その個体の過去の行動履歴や、血縁関係、出生地などを検証することで、クマ対策に活かされています。

ヒグマは豊かな自然を 象徴する動物

大量出沒は なぜ起きるのか？

ヒグマ生息地と人の居住区が隣接している知床において、ヒグマの出沒は地域住民の安全を脅かす要因となっています。知床半島では、2012年と2015年に例年の2倍近い数（約70頭）のヒグマが市街地周辺に出沒して駆除されるとい



サクラの実を食べたヒグマの糞



糞からDNAを採取する様子

これからの人とヒグマ

知床にとって、ヒグマは豊かな自然を象徴する動物であり、重要な観光資源として地域の経済を支える存在でもあります。また、彼らは「食べて排泄する」という命の営みを通して、植物の種子を離れた場所に運び、サケ由来の豊富な栄養を陸に戻すことで、森林の維持や更新に大きな役割を果たしています。しかし一方で、一瞬で人を殺めることのできる力を有し、農作物や家畜・ペットに被害をもたらすこともあります。私たちが富士ワイルド・グリーンファンドの助成をうけた研究課題では「ヒグマと人の共存の道を探る」ことを目的に掲げていました。今もこの想いは変わりませんが、「同じ生活場所を共有する」という意味での「共存」は不可能です。ヒグマが今後も北海道の森林生態系の王であるためには、人とヒグマの生活エリアの区分け（棲み分け）をより強固にし、クマが人里へ出てこないような街づくりや、問題を起こした個体を適切に排除できるような体制を強化することが必要です。残念ながら、昨今頻発しているヒグマによる人身事故や家畜被害を受けて、世間におけるヒグマのイメージは悪化していると言わざる



マスを待つ痩せ細ったヒグマ



ヒグマと観光船

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：「特定の人馴れた母と子が、人との軋轢を生む」という単純なストーリーでは語れないことが分かったことは大きな進展です。
- 具体的な今後の目標：今後は人の安全とヒグマの保全、並びに観光利用とのより良い調和を目指すことが目標です。

を得ません。私は「ヒグマは家の近くにはいてほしくないけど、彼らが山奥で悠々と生活しているのを想像するのって素敵だよ」と多くの人々が感じることで、きょうのような世の中であって欲しいと強く願っています。このような社会の実現に向けて、今後も研究や教育普及活動に力を注ぎたいと考えています。



海岸を歩くヒグマ

ハイマツの実



は、週上数が減少し、年によっては週上の開始が遅れることがあります。こういったクマにとっての「不運」が重なった年に、人里周辺に食べ物を求めてヒグマが出やすくなること分かってきました。



MCTには憲章があり、豊かな自然、歴史・文化を次世代に継承する、震災の記憶を語り継ぐ道とすることなどが謳われています。最後には「皆で育てる道とします」とあり、まさに今、各地域でトレイルを育てようという気運が醸成されつつあります。

最近では寄付の申し出や、広報協力、トレイル上での清掃活動など、企業の協力も増えてきました。

ハイカーが歩く風景が、自治体はじ

未来に繋ぐロングトレイル

商品造成をする宿泊施設や店舗、電源・トイレ・水・テント場などを提供する商店、まちぐるみでハイカーをもてなす自治体も増えています。ゴミを拾いながら歩くハイカーを見て、清掃活動が行われるようになった集落もあります。



「一本の爪で引っ掻いたようなトレイル作り」を実現する

「みちのく潮風トレイル」をデータ化

「人は社会人である前に自然人であった」自然の中に身体を晒すことで自然をリアルに体験し、学んでほしい。ロングトレイルは、そのフィールドになり得ると訴え続けたのが、ネイチャーライターの加藤則芳さんでした。守るべき自然を知らなければ、何にどう取り組みれば良いのかも分かりません。ロングトレイルは、自らに向き合う時間を提供すると共に、環境保全について考えを深めてもらう場でもあります。

東北太平洋岸自然歩道、通称…みちのく潮風トレイル（MCT）は、東北太平洋沿岸を一本に繋ぐ

1000kmを超えるロングトレイルです。東日本大震災後、加藤さんの提言を受けた環境省が、復興事業の一環として地域の方々と協働を強く意識し敷設したもので、2019年に全線開通しました。NPO法人みちのくトレイルクラブは、このトレイルの管理運営を担うことを目指し、2017年に設立されました。

全線開通前の2018年、FGFの助成をいただき取り組んだのは、MCT基礎情報の調査でした。国内外のロングトレイルを歩き、その利用について専門的な知見を有したハイカーらの協力を仰ぎ、長く歩く旅の計画に必要な、補給地点、水場やトイレ等、それらの地点間距離、標高差等、1000km全てを調査しデータ化。その成果を基に「Hiking Map Book」（全10冊の地図）と、「DATA BOOK」（1冊）を作成し2020年から順次販売を開始しました。MCTを歩く際必要な情報が掲載されたこの2種類の冊子は、これまでの約3年間で、1万冊以上販売され、NPOの運営を支えています。

広がる協力体制

全線開通以降、困難な時期もあり

め地域の方々や、企業の協力、時に教育現場との協働などを実現し、ハイカーは地域の暖かい受け入れの姿勢と、歩くために必要な情報が提供されているからこそ訪れ、その数は増えています。歩く速度は出会いをもたらし、ハイカーはトレイル沿いの地域に愛着をもち、繰り返し訪れるファンになっています。最近ではインバウンドの利用も増えてきました。

じています。

FGFの助成を受け実施した調査が、今のMCTの礎になっています。まだ課題は山積していますが、今年度から加藤さんがいう「一本の爪で引っ掻いたようなトレイル作り」を実現するため、トレイルの保全技術や手法を学び始めました。利用促進と同時に、周辺の自然環境を守ることは、私たちNPOの大切な役割です。これからも、地域の皆さん、利用者であるハイカーの皆さんと協働し、みちのく潮風トレイルを育て、未来に繋いでいきます。



上：名取トレイルセンターに来館した外国人ハイカー
中：傷んだトレイルルートを地域の人たちと修復
下：名取トレイルセンターにて、全線踏破した地元の方（名取市）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：トレイルを歩くために必要な情報の調査実施により、歩く計画を立てやすくなり利用者増につながった。
- 具体的な今後の目標：今後はトレイルの質の向上、周辺の環境保全を目指し、ルートの整備活動とその仕組みづくりにも力を入れていく。



釜崎峠を歩く、調査に協力してくれたハイカー（釜石市）



Hiking Map Book



DATA BOOK

みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
皆で育む道、みちのく潮風トレイルを未来へ
相澤久美（特定非営利活動法人みちのくトレイルクラブ 常務理事・事務局長）
写真©岩間幸司、みちのくトレイルクラブ



3 緑とふれあいの活動助成

4 緑の保全と活用の研究助成

no.194
2021年度助成
活動助成

Lady go! 女性が中心となり、女性が育む「ガイアの森」里山再生モデル事業

女性パワーでガイアの森植樹会を開催!!

徳永由佳

(どんぐり1000年の森をつくる会)

どんぐり1000年の森をつくる会は、1996年に発足して以来、年1回3月中旬に植樹会を行っている。これまで、27か所の国有林等に苗木を植えているが、ほとんどの植樹地が10年を経過すると、森へと成長している。しかし、1か所だけ、何回植え直しても樹木が育たない植樹地があった。それが15号地 青井嶺国有林である。

この15号地を、当会の女性会員が、「土壌に適した樹木を植え、草刈りをして、女性がつくる森として再生したい」と、総会で提案をした。男性会員からも拍手をいただき、満場一致で実行することになった。

あえて女性たちの手で

15号地を「ガイアの森」と命名し、「Lady go! 女性が中心となり、女性が育む『ガイアの森』里山再生モデル事業」としたこのプロジェクトは、まず、草刈りから始めた。カヤに覆われた植樹地を、女性

会員が慣れない手つきで刈払機を扱い、草刈りをして、カヤの除去を試みた。長年、男性会員に頼りきりだった刈払機での草刈も、やってみると意外に楽しく、当初、男性会員の3分の1くらいしか刈れなかった女性たちが、回数を重ねるごとに3分の2くらいは刈れるようになっていた。



植樹会でのコンサートのようす

れ、参加申込みは少なく、思った以上に苦戦した。「今時、女性限定なんて」という批判もたくさんあった。しかし、これまで、幾たび植樹しても育たない地だからこそ、「生」をはぐくむ「性」である「女性」の手で植樹をしたかったのである。

女性パワー引き出す「植樹会」

植樹会当日12月18日(日)は、雪が舞うとても寒い日であった。コロナ禍でもあり、当日キャンセルした人もいた。

参加者は65人、寒さにも負けず、みんなが楽しく植樹をする姿は、とてもまぶしかった。母娘で参加している人も何組かいて、とても微笑ましい光景であった。

寒さ故のアクシデントもあった。男性会員がクリスマススープを植樹地で炊いてくれたのだが、ガスボンベが凍って、火がなかなかつかなかった。そのため、1時間近く、ランチの時間が遅れ、その間、

この15号地を、女性がつくる森として再生したい



イチイガシ、クヌギ、コナラ、ヤマザクラ、イロハモミジ、エゴノキ、ヤマボウシを530本植樹した

コンサートもとても素晴らしく感動的でした。(60代)

○今回は、女性のみという企画でしたが、女性パワーはすごいーと思いました。母娘で参加されていた方もおり、うらやましいなと思いました。私も次回娘と参加したいです。寒い中でしたが、スープがおいしく、おかわりしました。作ってくださった男性の皆さん、とてもいいお味でしたよ。(40代)

○今回、母といっしょに初めて植樹会に参加させていただきました。思っていた以上に大変に感じましたが、自分の手で植樹した苗木が何年後かには大きくなくて森になり、未来の何かに繋がると考えたら、とても素敵なことだなと思いました。寒い中、スタッフの方々は、準備も大変だったと思いますが、ありがとうございます。また、機会があれば参加してみたいです。(10代)

* *

植樹をし続けることになった。しかし、参加者の女性たちは、誰一人文句も言わず、黙って植樹を続けていた。これには、事務局長も「女性はすごい。いつもの植樹会なら大ブーイングだっただろう。」と感心していた。

* *

参加者からは、このような感想が寄せられた。

○老体であり役立てなかったのですが、色々な出逢いがあり、楽しいひとときでした。苗木がすくすく育ってくれることを祈ります。



サンタさんから参加記念品を受け取る参加者

「ガイアの森」は、車のアクセスがよく、安全で誰もが立ち寄りやすい場所にある。植樹会参加者たちが、たびたび森を訪れて、森の成長過程を見守り、関わっていきけるよう、今後もホームページ等で案内していきたい。

年明けの5月、ゴールデンウィークの最中に、参加者と当会の会員で下草刈りを行った。苗に結ばれたピンクの目印リボンが風にゆれ、苗はすくすくと成長しているようだった。



参加者のためにスープをつくる男性スタッフ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：今回、いつか女性を中心に植樹会をやりたいと思っていた夢を実現してもらい、そして、その植樹会が成功した。
- 具体的な今後の目標：今後も私たちは、どんぐりを拾い→種をまき→苗を育てて→山に植える。この活動を永遠に続けていきたい。



植樹会参加者で記念撮影

日本に留学している 大学生の中山間地域に おける日本文化体験 プログラム

扇原 淳（早稲田大学社会医学研究室）
埼玉県



稲刈りと麦刈りの様子（助成当時）

協力隊として皆野町に着任しました。また、海外大学との協働で地域課題解決を目指した科目を創設するに至りました。

このように、多世代多文化交流を通じてグローバル課題解決を目指す国際連携プロジェクトに発展することができたのは、FGF様からいただいた助成がきっかけであり、あらためて感謝申し上げます。今後も、地方創生、持続可能な社会をテーマにして更に多文化多世代交流活動を展開していきたいと考えております。



シイタケ用原木の切り出し作業（現在）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：海外教育機関および自治体との連携（助成金獲得事業等：JST さくらサイエンスプログラム、地域おこし協力隊、デジタル田園都市国家構想交付金、シンポジウムの開催等）。
- 具体的な今後の目標：教育をベースに地元企業、地域住民と連携した地方創生、地域活性化。国内外のファンド獲得と自走型運営体制の構築。

北海道平野部における 野生生物による 防風林の利用状況に 関する研究

目黒文子（環境 NGO カピウ）
北海道

北海道十勝平野では広大な農耕地に細長い防風林が真っすぐ伸びる風景が広がっています。これらの防風林は野生生物の餌場や繁殖地として重要な役割を果たしていると思われます。しかし、その重要性はあまり認識されておらず、近年の農業機械の大型化や自動化に伴い伐採され急速に失われていきます。そこで、野生生物による防風林利用の実態を把握するために、林内に自動撮影カメラを設置すると同時に食痕や足跡、巣などの痕跡調査を行いました。



上：農耕地内にある防風林の伐採作業の様子（2013年8月）
下：林内踏査で確認されたコウモリ類のぬぐら（2023年6月）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：主に夜間に活動するため把握が難しかった哺乳類の生息や利用状況が分かったこと。
- 具体的な今後の目標：十分な防風効果を持ちつつ管理がし易く、多様な野生生物の生息地として長期にわたって持続可能な防風林の構造を明らかにすること。

当初はほとんど記録のなかった外来種のアライグマが多く、防風林で確認されるようになるなど、深刻な問題も明らかになりました。

今後は、外来種の分布状況を追跡調査すると共に、防風林がヒグマなど人間にとってありがたい生物の侵入経路になる可能性について着目したいと考えています。その上で、防風林のように身近にあつて当たり前と思われがちで自然や風景の魅力や重要性について発信し、地域の人にはまず興味を持ってもらうことで自然環境の保全や回復に繋がっていききたいと思っています。

身近な自然体験の 教育的効果の検証 ～多摩市内の里山環境を生かした 教育実践の総合的調査～

野田 恵（法政大学 兼任講師／
立教大学 ESD 研究所 特任研究員）
東京都

与えていることが明らかになった。助成終了後も各研究者は、緩やかな連携の中で森林・学校をテーマに、自然とかわる活動の意義を明らかにする研究を続けている。

※原著論文タイトル「森林体験を伴う環境教育活動による意識変容とその持続性―多摩市立連光寺小学校5年生による1年間の学習活動を事例として―」および「環境教育を行う教師の意欲的態度の形成プロセス―多摩市連光寺小学校教師の「語り」の質的分析を手がかりに―」

左：多摩市の自然
下：論文の掲載された学会誌および助成金で作成した報告書



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：本助成がなければ研究グループを立ち上げ短期間で成果を出すには至らなかったと思います。
- 具体的な今後の目標：自然とかわる活動の意義を研究を通じて実証し、持続可能でネイチャーポジティブな社会の実現に貢献したい。



震災後の増田川から 持続可能な地域社会への アプローチ ～丘陵地から津波にのみ込まれた 河口までの身近な自然を見つめ直す～

大橋信彦（増田川流域マップ制作実行委員会 代表）
宮城県

うテーマが選ばれた。

翌年の夏にスタートした「ガサガサ体験」と銘打ったイベントには、地域内の親子20組が思い思いの道具を手に、増田川の生きものの探しを楽しんだ。その時から9年、定期的に行われる河川清掃や川遊び体験、サケの観察会など、増田川に親しむための環境整備やイベントは今も継続して行われている。私たちの企画を採択し助成してくれた富士フィルム・グリーンファンドにこの誌上を借りてあらためて御礼を申し上げたい。



増田川の生きもののマップ（表紙）



増田川調査

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：普段は見過ごされがちな増田川への興味や関心を呼び起こし、地域住民にみちな河川に対する誇りと親しみを持ってもらえた点。
- 具体的な今後の目標：「継続は力なり」を合言葉に、これまで行ってきた河川清掃やイベントを継続して実行し、地域住民の中で特に若年層の参加を促していく。

小笠原諸島、西島の森林再生

藪内良昌 (NPO 法人小笠原野生生物研究会)
東京都



タコノキ実生の運搬 (2014 年 11 月)

西島南西部の稜線北部はほとんどが外来樹モクマオウに覆われている。礫混じりの荒れ地で南側は高麗芝を中心とした草原。北側だけでなく、南側もモクマオウが育ち始め、このまま放置すれば全面モクマオウ林になるために、拡大を阻止し、在来植生の先駆的植生を作るために、風や波浪に強く遺伝子の攪乱の無いテリハボクの播種を2014年5月から開始した。

2014年度から2年間、FGFの助成により西島に15回渡島し、延べ143人が参加し活動した。2年間でテリハボクを2万粒播種した。発芽本数は2590本であった。タコノキを200本植栽し、活着した苗は42本であった。モクマオウを約200本駆除した。2016年以降も適宜メン



播種したテリハボク (2023 年 4 月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：西島は、渡島に備船料がかかるため助成を受けることで初めて活動が可能になった。
- 具体的な今後の目標：2025年度末までに6ha(西島の12.2%)の外來種駆除を目指す。全島(49ha)の植生が回復するまで継続したい。(但し、海岸部の崖は作業不可)

愛子子どもの森の保全とふれあい活動

千田初男 (森の応援団愛子ハグリッツ)
宮城県



FGFの助成で完成した立派な井戸

愛子小学校の開校年から始まったことの森の活動も14年目に入りました。2014年にFGFさんの助成を頂き、立派なりっぱな井戸を掘りあげました。今ではこの井戸水は災害時の地域住民の貴重な飲料水になり、平時は地権者さんたちの大事な畑の必需品であります。そして3年生の総合学習での5種類の授業と親子の森活動は変わらず継続中で、楽しい貴重な経験を積んでいます。

ところがいよいよ子どもの森に開発の計画が持ち上がり、来年秋には住宅団地の工事が始まります。元々地権者様とは開発が始まったら返還するという約束でしたので改めて地権者様のご厚意、森の大事さ、重要さに気



原木栽培のための菌打ち

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：井戸を掘ることでものを作り上げる達成感を共有出来た事、森の魅力が1つ増えたこと。
- 具体的な今後の目標：子どもの森の代わりに新規の場所作りを皆で一から始め、喜びを共有出来る事。

又同時に代わりになる場所の選定も始めました。実は比較的近い所に用水目的の大きな池が2つあります。この辺りではちよつと有名な場所でありはたくさんさんのボランティアの方々が活動をしておりました。皆さん高齢になられたのか現在は朽ち果てた感があります。その池の周辺の再生を5〜6年生の高学年の総合学習で取り組みめいかと校長先生からの提案があり、今はこの2本立てで進んでおりみんなの夢が又見え始めました。

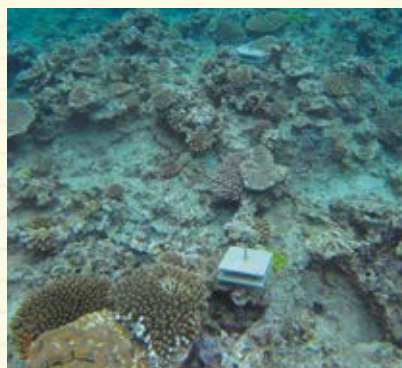
鹿児島県出水市における保護ツルの臨床検査 ～野生復帰羽数の増加を目指した臨床研究～

松鶴 彩 (鹿児島大学) ※所属名は助成当時のもの
鹿児島県

計10羽の検査を実施した。貧血、栄養状態、肝臓や腎臓の障害の程度等を把握するとともに、治療方針の決定、治療経過のモニタリング、麻酔前検査などに有用な情報が得られた。さらに2014年度は計6羽の保護あるいは死亡ツルにおいて、高病原性鳥インフルエンザウイルスの感染が認められた。このことから、ツルに対する本ウイルスの病原性解析についても研究を進め、ツルは高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染後、脳や心筋を含めて全身臓器へウイルスが感染し、病変を伴い死亡する可能性が明らかとなった。

琉球列島中部域における造礁サンゴの新規加入幼生の種多様性と遺伝学的集団構造に関する研究

中村雅子 (東海大学)
沖縄県



沖縄本島恩納村沿岸域に設置した人工幼生付着基盤 (2014 年)

「海の熱帯雨林」と呼ばれ、海洋生物の約25%を育む、生物相豊かなサンゴ礁では、気候変動や人為的攪乱の影響を受け、過去数十年の間に、造礁サンゴ(以下、サンゴ)の被度が約50〜80%減少している。サンゴは、サンゴ礁生態系の基盤を成す生物であり、その減少は、サンゴ礁に生息する生物種の多様性の減少などを招く。そのため、サンゴ礁生態系の保全には、サンゴ群集の維持及び回復機構を適切に評価することが不可欠であり、サンゴ幼生加入量の時空間変動を定量化することは、その第一歩となる。また、今後の気候変動の影響を正しく評価するには、新規に加入した幼サンゴを種レベルで定量化し、各種の遺伝的集団構造を捉え、集団間のコネクティビティを推定する必要がある。

付着基盤上に定着したハナヤサイサンゴの幼体 (2014 年)



付着基盤上に定着したハナヤサイサンゴの幼体 (2014 年)

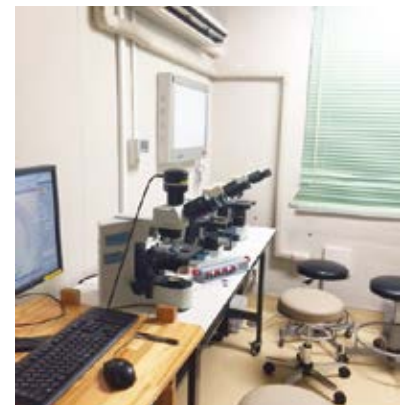
Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：応用研究に注目が集まりやすい傾向にある中で、野外で起こっていることを明らかにするような調査研究は助成対象となりにくい。助成を受けられたことで、定期的な調査が可能となり、調査研究が進展した。
- 具体的な今後の目標：日本沿岸に生息するサンゴ群集に起こりつつある変化を明らかにしていきたい。

そこで本研究では、2014年〜2015年に助成を受け、琉球列島沿岸域サンゴ群集の主構成者であるミドリイシ属サンゴを対象に、新規加入幼生の種多様性を定量化し、個体群間の遺伝的構造を明らかにすることを目指した。本研究では分子マーカーを用いて、採取した幼サンゴの種が確実に同定できたのは一種のみであったが、その後同様の手法を用いてハナヤサイサンゴ科を対象として実験を行い、成果を得ている。



上：ナベヅルの骨折治療
下：検査室



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：野生動物救護活動に基本的な検査系を導入、診断体制を築けた。
- 具体的な今後の目標：高病原性鳥インフルエンザのような動物由来感染症の対策には、多分野からのアプローチが不可欠であり、ワンヘルスの観点から対策を行っていききたい。

no.141
2014 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

東日本大震災の 津波被災地における 地域農業資源の保全に 関する実証研究

観山恵理子 (東京農工大学農学部農業市場学
研究室 助教)

宮城県



皆様のご協力を得て娘と一緒に調査研究を進めています

理するための共同作業への参加は減少し、ボランティアなどの地域活動への参加は増加した。また、震災後の転居や軽犯罪に巻き込まれた経験が周囲の人々への信頼を低下させていた。被災地の社会関係資本を維持・向上させるために必要な対策としては、被災地の治安維持、収入源の確保、趣味のサークルなどの交流機会の提供などが挙げられる。以上の内容は、国際誌である Sustainability 2023, Volume 15, Issue 5 に掲載されている。今後は、災害復興を遂げた地域の長期的変化にも注目してゆきたい。



仙台市内の農業法人での作業風景 (2015 年 4 月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：被災地において大規模なアンケート調査を実施することができたため、自然災害が広く地域住民に与えた影響を明らかにすることができた。
- 具体的な今後の目標：災害にも強い青果物流通システムの構築に関する研究を進めてゆきたい。

no.142
2015 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

『多摩川のケヤキと 共生する会』 青梅市多摩川流域の ケヤキの食葉性害虫からの 救済と緑陰の維持

古澤省吾 (たまあじさいの会)
東京都

分布を調査し、会員が個々に担当する櫟を決め年間を通して観察し記録する一方、毎月6か所を定点として観測を行いその変化を記録した。同時に食害の防除の方法を調べ、最適であると思われた、落ち葉掃き(幼虫が内在する落ち葉を取り除く)の実証実験に取り組んだ。

2018年8月、2年間にわたる活動の過程と成果を「青梅市多摩川流域の櫟の食葉害虫からの救済」という冊子にまとめた。この間の活動はFGFからの助成で行われた。

2008年から始まった櫟の食葉性害虫(ヤノナミガタチビタマムシ)による櫟への被害は、東京都西部に位置する青梅市の多摩川、日の出町平井川、あきる野市秋川、埼玉県飯能市入間川に至る地域にみられた。ヤノナミガタチビタマムシの成虫は体長2.6~4.2mmで形状は小判型の小さな虫。成虫は櫟などの粗皮下で越冬し、春に櫟の若葉に産卵し、幼虫は葉の葉肉を食べ成虫になる。そのため櫟は初夏を迎える季節に落葉を開始し、そして10月頃から新芽が芽吹くという異常な生育状況を示す。結果、樹勢は徐々に衰退し樹枝の枯死などがみられた。

私たちは青梅市多摩川の被害櫟の



上：盛夏にもかかわらず葉を落とした多摩川畔の櫟 (2014 年 8 月)
下：10 年以上にわたり猛威を振るった害虫の被害からすっかり回復している (2023 年 9 月)



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：それまで漠然として行っていた活動の目的と方向性が明確になり、具体化された。
- 具体的な今後の目標：2022 年ヤノナミガタチビタマムシによる櫟の食害は終息した。冊子やホームページなどを通して記録として残し、広報してゆきたい。

no.143
2015 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

「松代おやっこ村」 魅力アッププラン

富澤恵子 (松代おやっこ村 会長)
新潟県

が、今年になって古道を整備してトレイルランを開催するなど、都会から移住した若者を中心に環境保全の意識も高まり、地元の高齢者や児童・生徒を巻き込みながら活動を展開している。

生物多様性の土台作りや自然資源の回復のためには、身近な荒地や埋もれた古道を整備する活動が最も身近な課題解決につながる。「松代おやっこ村」の7集落も、高齢者が周辺の畑を耕すことで里山が維持され、環境保全の一助となっている。

上：助成金を活用したピオトープづくり
下：現在のピオトープ



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：湧水ピオトープを造成し環境を整備したことが「ふれあい市場」としての雰囲気高め、人々が立ち寄りやすい場所となった。
- 具体的な今後の目標：環境を維持する作業を継続するために、地元や都市の若者の協力体制をつくることが今後の目標である。

no.144
2015 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

奈良県 レッドデータブックに 記載されている 自生山野草の保全と管理

久保博司 (里山の山野草を守る会 代表)
奈良県



当会顧問梅原先生によるレクチャー (2015 年 10 月)

私たちが活動する地は奈良県桜井市三谷地区にあり、桜井駅から15km程の大和川源流に近い中山間地帯にあります。三谷地区はもともと山野草の自生地でしたが危機的な状況にあり、豊かな山野草の生育を復活させるため「里山の山野草を守る会」を2008年に発足させました。

約1haのフィールドを4つの班で分担し、保全・観察活動を実施しています。活動当初の調査では、草本284種、木本139種を確認しました。その内、奈良県レッドデータブックに記載されている絶滅寸前種など30種は全班会で、各班独自に設定した注目種(20~35種)は各班で、フォローしています。

観察活動は、定点観測と経時変化の記録であり、2021年には絶滅寸前種な



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：刈払い機等の機械化が進展。電柵からワイヤーメッシュへの切替えて獣害対策が進展。
- 具体的な今後の目標：3年に及ぶ新型コロナの影響で新規加入者が減り、メンバーの高齢化が一気に進む。新規メンバーを増やすことが大きな課題。

no.145
2015 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

野焼きボランティアのための 難燃性ゼッケン製作

和田譲二 (NPO 法人緑と水の連絡会議 事務局長)
島根県



群馬県みなかみ町の野焼き現場。難燃性ゼッケンを活用
(2016 年)

野焼きの現場で活用していただいています。

島根県大田市では天候や諸条件で中止になった年以外、毎年3月には100名をこえる参加者で三瓶山西の草原の野焼きを実施しています。草原性の貴重な植生が野焼きによって維持され、国立公園に訪れる観光客に景観を楽しんでいただいています。



島根県大田市三瓶山西の原の野焼き (2023 年 3 月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：ゼッケンを難燃性にしたというトピックで、危機管理意識の向上には一定の効果がありました。
- 具体的な今後の目標：全国の野焼きにおいて参加者の安全を確保するノウハウを現場体験から集めて「ヒヤリハット集」として共有していきます。

no.147
2015 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

希少動物 アマミノクロウサギ 保全に向けた 分子遺伝学的アプローチ

溝口 康 (明治大学農学部)
鹿児島県

FGF設立40周年、誠におめでとうございます。

奄美大島・徳之島に生息する固有種であるアマミノクロウサギは、国の天然記念物であり、環境省のレッドリスト絶滅危惧ⅠB類に指定されている希少な動物です。外来生物であるマンゲースによる捕食が問題となり、マンゲース駆除が実施されてきました。そのようなか、アマミノクロウサギの遺伝的多様性の度合いを把握することは環境保全の観点からとても重要と考えました。本助成に採択され、ミトコンドリアDNAの一部塩基配列とマイクロサテライトマーカーを用いて、アマミノクロウサギの遺伝的多様性の度



上と下：実験風景



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：アマミノクロウサギの遺伝的多様性の評価ができたこと。
- 具体的な今後の目標：アマミノクロウサギにおける感染症の感受性や抵抗性に関する遺伝的多様性及び遺伝特性の評価。

合いと遺伝特性を明らかにすることを目的として研究を実施しました。近年は、ノネコなどによる捕食が問題となっており、引き起こされる問題の一つに感染症が考えられます。そこで最近、アマミノクロウサギの免疫に関連する遺伝子領域の遺伝的多様性の度合いについて、解析しています。アマミノクロウサギの感染症に対する遺伝的な感受性や抵抗性を明らかにすることはとても重要と考えています。このような研究を通して、アマミノクロウサギの保全に役立てることが出来れば幸いです。

no.148
2015 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

対馬に生息する 希少植物種を保全するための 植生回復および 栽培試験に関する調査研究

鈴木浩司 (富山県立大学)
長崎県

対馬は九州と朝鮮半島の間に位置し、国内ではここだけでしか見られない希少な動植物種が分布している。2015年度のFGF助成により、希少種の生育状況の調査およびシカ食害から対馬固有種(ツシマノダケ)を保全するためにシカ柵の設置を行った。その後、ほぼ毎年シカ柵の管理と希少種の生育状況の調査を行い、対馬市で開かれる対馬学フォーラムにて発表してきた。そのせいもあり、対馬の生物多様性がいかに貴重なものであるか一般市民にも理解が広まったと考えている。

上：龍良山のシカ柵内
(助成当時、2016 年 8 月)
下：龍良山のシカ柵内 (2022 年 10 月)
多少は回復傾向、樹木の下部の葉がシカに食べられずに残っているのが分かる

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：実際にシカ柵を設置できたことや、地元の方を巻き込むことで対馬の自然の豊かさや希少性を改めて認識してもらったこと。
- 具体的な今後の目標：地域の自然は地域の人々で見守るという環境づくりのために、対馬の自然の希少性をアピールするガイドブックを作成するのが当面の目標。

no.149
2015 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

サクラにおける効率的な 挿し木繁殖法の確立および サクラ遺伝資源の 保存・管理に関する基礎研究

田中秀幸 (島根大学生物資源科学部)
島根県

サクラは日本の国花であり、花見は古くから人々に楽しまれてきた文化である。しかし、サクラは病気に弱く適切な管理をしなければその寿命は数十年と短い。花見の文化や名所を保存・管理していくためには、効率的な増殖法を開発し、数十年ごとに新たなサクラを植樹する必要がある。サクラの増殖において、挿し木は特別な技術を必要としない繁殖法であるが、多くの品種で挿し木による発根が困難であり効率的ではない。もし、どの品種におい



(左) 褐変した挿し穂
(中央) 褐変抑制剤で処理した挿し穂
(右) 発根した挿し穂

り、遺伝資源として保存・維持されている。これら豊富な遺伝資源を利用して挿し木を行ったところ、発根が容易(60%以上、中程度(20~60%)および困難(20%以下)の3グループに各品種を分類できた。発根が困難な品種において、挿し穂基部およびカルスの褐変が見られたため、褐変抑制剤を処理したところ、発根率を向上できた。今後は、褐変抑制剤のさらなる活用法を検討するとともに、サクラ観光地の発展に貢献する技術開発を行っていく。



島根大学生物資源科学部附属本庄総合農場には約160品種のサクラが植栽されてお



島根大学におけるサクラ遺伝資源

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：本助成により、効率的な繁殖法を確立することができ、サクラの増殖が格段に簡易になった。
- 具体的な今後の目標：この技術と島根大学の豊富なサクラ遺伝資源を活用することで、新たなサクラ名所・地域を作出し、人々の憩いの場の創出に貢献できる活動が出来ればと考えている。

名勝・重要文化的景観 「おばすて (田毎の月)」 棚田の保全活動

矢島重信 (田毎の月棚田保存同好会 事務局)
長野県



田植え作業。会員の職場の仲間が応援に (2017 年 6 月)

発足は1994年6月で、2023年で29年目になりますが、大勢の人(県内外の観光客ほか)が長野県千曲市嬬捨の棚田を訪れるようになりました。同好会には、これまでの28年間に、延べ112名の方が会員として活動を支援してきました。また、県外からの参加者も延べ41名になりました。私たちは毎年春から秋にかけて、棚田での米作りを継続していますが、こうした活動に小学生や高校生、そして保護者など、様々な人たちが参加してきました。

からは、棚田一帯を遊び場として活用する「自然保育」の園児や卒園児、保護者が作業等に参加しています。棚田保全の最も大切なことは、「毎年耕作を継続すること」です。私たちは「明るく・楽しく・無理なく・安全第一」をテーマに、これからも棚田保全活動を継続していきます。

2020年6月19日に、「嬬捨の棚田」は「月見」を主題としたストーリーが「月の都 千曲」として日本遺産に認定されました。また、同年から「信州の環境にやさし



小学生・保護者・会員による稲刈り・はぜ掛け作業 (2023 年 9 月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：会員の高齢化で、棚田での農作業は、大変重労働ですが、助成を受けて、安全性や効率化が図られました。
- 具体的な今後の目標：田植えと稲刈り作業には、2003年から、大勢の小学生が参加しており、今後もできる限り参加していただけるようにします。

はぐくむ、つなげる、 つたえる、まもる、 谷津田の生きものの いのちのにぎわいと つながり

小西由希子 (特定非営利活動法人
ちば環境情報センター 代表)
千葉県

耕作放棄地が広がる千葉市緑区下大和田の谷津田は、ミナミメダカなどの貴重な動植物が生息し、市の保全地区にも指定されている。上流域に広大な森や畑があり湧き水も豊富で、印旛沼に流下して千葉市民の飲料水源ともなっている。

当会では、1996年より自然観察会やごみひろい、森の手入れや米作りなど市民と協力して行ってきた。脱穀機の修繕や刈払機の燃料などに助成をいただき事業を継続することができた。2023年2月、千葉市レッドリストでは消息不明・絶滅とされていたキツネの生息が、35年ぶりに確認された。ほかにも絶滅が危惧される数種類の動物が新たに確認されている。地道な活動の継続が生物多様性の回



上：8月かかしづくり (撮影：田中正彦氏)
下：コシヒカリの稲刈り (撮影：田中正彦氏)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：より多く、多様な世代の方々が活動に参加してくれたこと。
- 具体的な今後の目標：市を含めた多様な主体が協力して現在の開発計画を見直し、持続可能な利用の在り方をともに考える場が持てること。

復につながったとも考えられる。現在ここに約76・3haの産業用地開発計画が持ち上がっている。生活道路をダンブが通るなど、無謀な計画に対し、「事業計画の見直しを含めた慎重な検討が必要である」との市長意見も出されている。

地球温暖化が深刻化する中、奇跡的に残った130haのまとまった緑は、政令市千葉市に住む98万人の市民にとって大切な共有財産。コモンズでもある。自然とかかわる豊かな暮らしの心地よさや価値をより多くの方々に理解してもらえ、地域を作っていく。

大淀川の絶滅危惧植物 「タコノアシ」の保全活動

杉尾 哲 (NPO 法人大淀川流域ネットワーク 代表理事)
宮崎県

動を継続して実施した結果、翌年の夏からはタコノアシの群落が増えて生育域が区間に広がり、晩秋には紅葉したタコノアシが階段護岸下の水際に帯状に連なるようになって、容易に観察することができるようになりました。また、環境省と宮崎県の準絶滅危惧種ミゾウジユのロゼットや、数種の絶滅危惧種も確認できるようになりました。身近な場所で希少植物の絶滅が危惧されていることを認識し環境保全の大切さを学ぶ良い機会となっています。今後も大淀川への環境への意識を高められる活動を続けたいと考えています。

上：助成当初
下：タコノアシの移植

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：絶滅危惧種タコノアシの群落が増え、多種の絶滅危惧種等の生育しているのが観察された。また、若者ボランティアの参加が増え、大淀川の環境保全や川づくり・地域づくりの連携が広がった。
- 具体的な今後の目標：身近な場所で希少植物の絶滅が危惧されていることを認識し、環境保全の大切さを学ぶ機会となる保全活動を、若いボランティアや地域住民と一緒に継続して実施して、大淀川への環境への意識をより高めたい。



ドローンと VR 技術を 活用した里山ランドスケープ のモニタリング手法の開発

一ノ瀬友博 (慶應義塾大学環境情報学部)
神奈川県

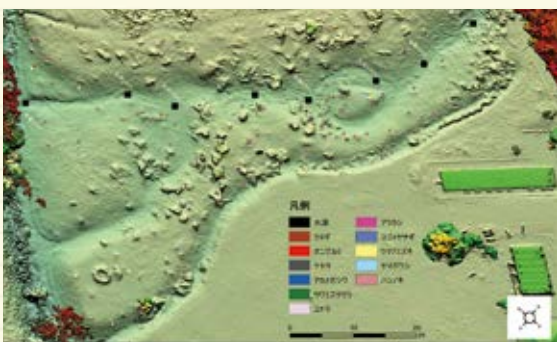


図1) 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスのピオトープの空撮画像から作成した DSM (Digital Surface Model)

研究では、ドローンと360度カメラを用いて、安価に里山ランドスケープをモニタリングする手法を開発することを目的とした。ドローンについては、DJI社のPhantom4と3D Robotics社の3DR Soloを用いた。Phantom4は当時最も広く普及したドローンで、高解像度の静止画、動画が取得できた。3DR SoloはマルチスペクトラルセンサーであるSequoiaを搭載し、近赤外線バンドも取得できた。取得したデータからオルソ画像を生成し、DSM (Digital Surface Model) を作成した(図1)。360度画像については、EPLC Pro と RICOH THETA S を用いて比較した。

研究助成を受けた
2016年度に比べて

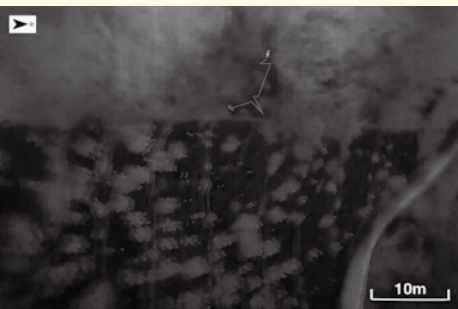


図2) 赤外線センサーを搭載したドローンで空撮したイノシシとその移動経路
(論文 <https://doi.org/10.1111/2041-210X.13829> より)

Achievements and next step

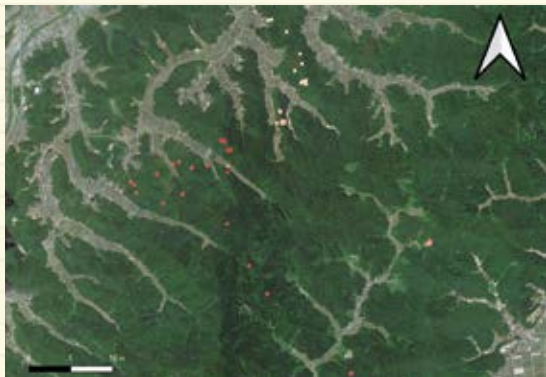
- 助成を受けていちばん進展があったこと：貴研究助成によって必要な機器を購入することができ、構想していた研究に着手することができた。
- 具体的な今後の目標：精度が高く、簡便な生物多様性モニタリング手法を開発していく予定である。

GPS 首輪を用いた
積雪地域における
イノシシの行動特性山本麻希 (NPO 法人新潟ワイルドライフ
リサーチ 会長)

新潟県

した。助成後も合計で6年近く、く
り罠を用いた捕獲を試み、2022年
に1頭のイノシシの捕獲が成功しGP
S首輪を装着することができた。この
データより、イノシシは、苦手な積雪
を避け、雪の少ない地域に冬季は移動
を行っていることが明らかとなった。近
年は、中山間地域の農村の過疎、高齢
化が大きな問題となり、鳥獣被害の
対策に苦慮している。今後は、中山間
地域の地域活性化や里山林の手入れ
などに活動を広げていきたいと考えて
いる。

NPO 法人新潟ワイルドライフ
リサーチは、新潟県内で生じる野生動物
と人間の共存を目指し、鳥獣対策の支
援や保全に関する調査研究を行っている。
新潟県のイノシシは、明治以降、
一度絶滅したと言われているが、その
後、分布は拡大傾向にあり、日本のコ
メどころでもイノシシによる農作物被
害は深刻な問
題である。積
雪期は、効率
的な銃猟が実
施できるため、
積雪下のイノ
シシの行動を
GPS首輪で
調べ、イノシ
シが利用する
環境の特徴を
明らかにする
ことを目的と

上：イノシシの GPS データから得られた
結果
下：昨年度捕獲したイノシシ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：
イノシシの冬季の行動を明らかにできた
こと！
- 具体的な今後の目標：人は里に住み、動
物は山に住むというゾーニングができるよ
う、緩衝地帯となる農村の地域活性化や
里山の循環利用に寄与したい。

外来アライグマの
営巣特性調査と
対策コスト削減のための
巣箱型ワナの開発池田 透 (北海道大学)
北海道

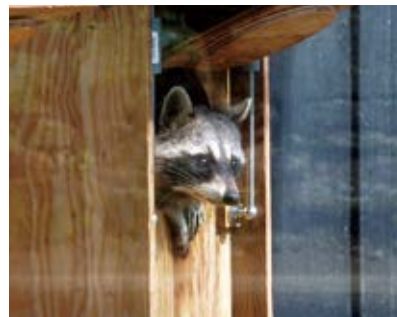
本事業においては、アライグマが樹
洞を出産や休息場所に用いる巣として
利用する生態的特性を応用して、低コ
ストで継続的なワナ捕獲作業が可能
な外来アライグマ捕獲用巣箱型ワナの開
発を行いました。広域的に分布する外
来アライグマ対策では、自治体等の予
算不足は深刻な課題で、誘因餌を用い
る従来の箱ワナでは、餌の交換と在来
種の混獲を防ぐための毎日のワナの見
回りが必要で、このことが長期的な捕
獲作業の継続を難しい
ものにしていました。

そこで本事業では、
アライグマの営巣調査
から明らかとなった樹
洞等を営巣場所として
選択する行動特性を利用
して、餌の代わりに
営巣空間を誘因とする、
誘因餌の不要なワナを

上：巣箱型ワナ実験 (2016 年 11 月)
下：巣箱型ワナで捕獲されるアライグマ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこ
と：営巣特性調査の他に、アライグマ
を用いた実験を重ねることで、捕獲効
率のよい巣箱型ワナの構造に仕上げる
ことができました。
- 具体的な今後の目標：さらに改良を加
え、長期的使用にも耐えるワナの開発
を目指します。

里山を活かした
こどもの遊び場と
大人のコミュニティスペース青木 薫 (土沢森あそびの会)
神奈川県

同じフィールドで活動していた「M
TBチーム」のメンバー達と、里地
里山資源 (Heritage) を守り
(Keeper)、次世代に受け継ぐ
ことをミッションとする合同会社ヘリ
テッジキーパーを設立。森林サービス
産業 (キャンプ場運営、MTBや森林
浴などのコンテンツを活かした観光プ
ログラム・教育研修プログラムの企画
運営など) を中心に、津久井の風土と
歴史を活かし、川や畑を活用した事業
も行っています。楽しむことで豊かな
自然を守るように、多様な人々が交
流できる地域づくりを目指します。

相模原市緑区津久井地域にある13 ha
の「つちざわの森」で、2011年
より【森をつなぐ (継ぐ)、森をつな
がる (繋がる)】をコンセプトに、子
どもの遊び場と大人のコミュニティス
ペースとして森を活用・保全しながら、
次世代に残すことを目的に活動をして
います。2017年度助成金で、林業
家による危険木伐採、林道整備のため
のクローラードンプ、冬の活動のため
の新ストープ購入、植生調査などを行
いました。定期的な保全活動が続け、
山野草や昆虫も数を増やしてい
ます。明るくなった森に手作りの
デッキやベンチを配し、四季
を通してより多くの人々、車い
すの子どもたちや高齢の方も
訪れやすくなり、これまで延べ
3000名以上がつちざわの森
を楽しんでくれています。

上：マウンテンバイクチ
ームによる林道整備 (助成当
時)。運搬車や車いすが通
れる道が出来ました。
下：全国一斉 Go to forest
では思い思いに森を楽しみ
ました (参加者 100 名程)
(2023 年 5 月)

Instagram



上：マウンテンバイクチ
ームによる林道整備 (助成当
時)。運搬車や車いすが通
れる道が出来ました。
下：全国一斉 Go to forest
では思い思いに森を楽しみ
ました (参加者 100 名程)
(2023 年 5 月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：
林道を整備したことで、森の保全と活用が
進んだ。
- 具体的な今後の目標：森林サービス産業と
いっても、単なる消費の場ではなく、楽し
みながら keeper として参加してもらえ
るような場を運営していく。企業などにも働き
かけ、次世代につなぐための経済基盤をつ
くっていく。

子どもたちによる
里山再生プロジェクト
～南アルプスユネスコエコパーク内
での獣害につよい畑づくり～加藤 博 (南アルプス子どもの村中学校)
山梨県

南アルプス市薬山集落では、古民家
のリフォームと畑仕事を続けており、
地域の人と道ですれ違えば声を掛け
合ったり、畑や草刈りのアドバイスをい
ただいたりといった関係が続いている。
獣害につよい畑づくりは、電気柵に
よる防衛が主な手段だった。活動助成
をいただいて購入した電気柵を利用し
て、野生動物 (シカ、イノシシ、サル)
による食害から、果実や野菜を守る活
動が継続している。活気あふれる子ど
もたちの姿は、農作業にやってくる
方々に元氣と希望を与え、市民活動
にも発展するきっかけにもなり、以
前はさびしい無人集落であった地に
人が行き交うようにもなった。

一方で、中学生たちが時間をかけ
て作成した冊子は、現在も細々と
売れ続けており、南アルプスユネス
コエコパークの自然や野生生物たち
の多様性や保護に関して知る材料と



けもの被害から守る実験農園に挑戦したメンバーたち

なっている。
また、中学
生たちが中
心となって
築山でコン
ニヤクイモや
サトイモのイ
モ類や、小
麦や米、大
豆などの穀物づくりを進めている。す
べては無農薬有機肥料で育て、イネは
アイガモ農法に挑戦して2年が経過し
ている。子どもたちは、土と戯れ、イ
ネが分結して太く強く育つ様子に目を
見張り、いそがしく働くアイガモの姿
を愛をもって見守っている。そこで収
穫されたものは、「0 から食堂」と名
づけた中学生たちが不定期で開店する
レストランに出され、地域の人や学校
の保護者を招き、自然の恵みや私たち
の身近にあるくらしの豊かさを再認識
していただく機会にもなっている。

耕作放棄されていた田んぼを復活させ、しろかき作業。
アイガモ農法を進め、近所の方々も足をとめて見守っ
てくださる。

ネチャーポジティブに向けて

- 助成を受けていちばん進展があったこと：地域の魅力
を再発見し、発信できたことで、自然や人のくらしを
より身近に感じられるようになった。
- 具体的な今後の目標：築山の畑でリジェネラティブな
大地再生農業に挑戦し、環境に配慮した農業に挑戦
したい。

豊田市の中山間地を 舞台とした 多世代参加型の 自然とのふれあい活動

佐藤雄哉（豊田高専ドミタウン実行委員会）
愛知県

2017年度活動助成に採択していただき『豊田市の中山間地域における多世代参加交流活動「豊田高専ドミタウン」』に取り組ませていただきました。2015年から学生と教職員の有志による『豊田高専ドミタウン実行委員会』を組織して、豊田市内の中山間地域をフィールドとして、休耕地を活用した自然ふれあい活動に継続的に取り組み、活動9年目になります。

ドミタウンとは「学生寮（ドミトリ）」の仕組みを取り入れ、多世代交流によってつくられるまち（タウン）」のことです。この活動では、高専生・公募した小学生・地域の方々などの多世代が中山間地域で自



上：集合写真（たくさん笑顔でいっぱい！）
（2018年8月）
下：ドローンで撮影した田植えの様子（2023年5月）



Facebook

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：活動の中核に“自然との触れ合い”を据え、継続的に取り組む基盤ができた！
- 具体的な今後の目標：地域の方々と協力関係を維持しながら、活動を継続させていきたい！



東京藝術大学 上野キャンパスにおける 武蔵野の植生再生と 維持の活動

君塚和香（東京藝術大学キャンパス
ランドデザイン室）
東京都

東京の上野公園に隣接する東京藝術大学上野キャンパスの外縁部は、長らく鉄の柵で囲われていましたが、私たちはそれを開き低木の緑地帯に置き換えるプロジェクト「藝大ヘッジ」を2016年から展開しています。

関東武蔵野の地域在来種から選んだ40種類を超える苗木を、学生・教職員・大学関係者、地域の方たち自らの手でワークショップにより植え、有志学生の「お世話隊」が、苗木の水遣り、枝葉の剪定、腐葉土でマルチングするなどのお手入れを継続して実施しています。植物と触れ合いそのお手入れを通してキャンパスに愛着が生まれており、モチーフやヒントを得て自身の作品制作に活かしている学生もいます。



上：植樹ワークショップの様子。学生たちとともに植え付け（2017年）
下：ベンチを設置し、憩いの空間となった道（2020年）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：初期の段階で助成を得られたことが大きな弾みとなり、その後の定期的な植樹活動の継続につながりました。
- 具体的な今後の目標：大学を縦貫する道路沿いの緑化完了まであと少しとなっており、本年11月末に緑地帯をさらに35m延伸します。

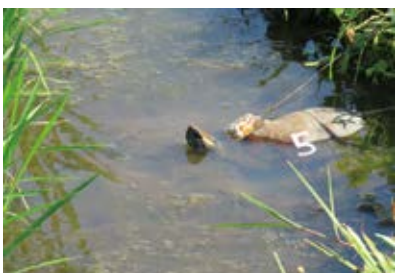


ニホンイシガメの 保全を目的とした 生活史の解明

小賀野大（千葉県野生生物研究会）
千葉県

行動圏が明らかになってきました。産卵場所は水田の畦や農道ではなく、水田から少し離れた畑や園芸用ハウス、人家の庭、お寺の境内などでした。一方、幼体の生息場所は越冬期も含めて水田水路、湿地、小池などの浅い水辺を利用し成体とは環境を異にすることや行動圏も比較的に狭いことがわかりました。このことから、水田、森林、池や川に加えて、畑などの産卵場と幼体の好む浅くて安定的な水場という生息環境をセットとして良好に保つことが、本種個体群の維持に重要であると考えられました。

上：水田で確認した電波発信機を装着したニホンイシガメの雌個体（2018年6月）
下：「ニホンイシガメの里」に作った子ガメ用の保護ハウス（2022年10月）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：調査から本種の産卵場、幼体の利用環境が明らかになりました。現在、お寺や地域の方々の協力を得て「ニホンイシガメの里」創りに取り組んでいます。
- 具体的な今後の目標：本種の個体群調査と土水路、湿地、森林の管理などを通して里山の生物多様性の維持や回復に貢献していきたい。

石狩海岸における 希少アリ類・海浜植物・ 外来カエル類の相互関係に 関する研究

吉田剛司（NPO 法人 EnVision 環境保全事務所）
北海道

北海道の石狩海岸のイソスミレは、国内の北限分布の一つとされる。地元有志によるイソスミレの株数調査（2012年）と本研究（2018年）を比較したところ、株数は約33%も減少したことが判明した。イソスミレは、アリ類に種子散布を依存する。石狩海岸には、多くのアリ類が生息し、特にエゾアカヤマアリのスーパーコロニーが知られていた。しかし港湾開発、海浜植生の荒廃によって、スーパーコロニーの消滅が懸念されている。そこに北海道に自然分布しないアズマヒキガエルが侵入し、わずか数年で個体数を爆発的に増加させた。

本研究にて胃内容物を採取したところ、アズマヒキガエルは、エゾアカヤマアリなど希少性の高い種も含むアリ類を主な餌資源としていた。気



アズマヒキガエル。東日本に生息するニホンヒキガエルの固有亜種。北海道では外来種。一夜で200匹以上を捕獲したこともあった

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：外来カエル、アリ類、イソスミレの生態学的な特徴を助成研究で地域に詳細な情報還元ができた。
- 具体的な今後の目標：本研究の成果を他地域にモデルとして広く普及し、北海道へのアズマヒキガエル侵入の危険性を明示していきたい。



踏査によって生存株数を把握したイソスミレ。アリの巣の近辺に株が生育することが多い

候変動、海岸浸食、オーバーユーズなど様々な課題に直面しつつも、これまで何とか維持されていたイソスミレとアリ類の相互関係もアズマヒキガエルの侵入によって、そのバランスが大きく崩れる可能性がある。本研究では、地域関係者と多くの意見を活発的に交換し、地域のアズマヒキガエルの防除対策も前進させることができ、北海道の湿地や海岸植生におけるアズマヒキガエル侵入の危険性について警鐘を鳴らすことができた。

no.166
2018 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

大人も子どもも楽しく 安全に自然体験が 楽しめるガイアの森づくり

平本友香 (NPO 法人ガイア自然学校とやま)
富山県

当団体は富山県内で幼児・中学生を
主な対象とした自然体験活動を行って
います。2014年より富山県富山市
の長年放棄地となっていた里山（私有
地）をお借りして、森遊びや川遊びが
楽しめるフィールド「ガイアの森」と
して整備してきました。インフラ（電
気・水道・ガス）がない森にコンポス
トトイレや東屋を手作りし、幼児や未
満児を対象とした「森のようちえん」
活動を行っていました。しかし、一部
遊歩道が未整備の
部分があり、また
12月から3月は気
温が低く、毎年50
cm以上の降雪があ
るため、活動が難
しい状況でした。

遊歩道の整備
と、冬でも快適に
活動できるよう薪



上：助成前は何もない原っぱでした
下：母屋の中で「森のようちえん」の卒
園式を行いました

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進歩があったこと：真冬でも暖かく過ごせる拠点が完成し、冬場も森で自然体験活動ができるようになった。
- 具体的な今後の目標：ソーラーや風力などの持続的に利用できるエネルギーを導入し、母屋の設備等に利用していきたい。

no.168
2018 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

豊北の水と生態系の 研究・下関北高協同 ～栗野川流域図作成を原点に～

岡崎新太郎 (北高夢ロード実行員会)
山口県

題名の活動に対して2018、
2019年度に貴会より助成をいただ
きました。山口県下関市豊北町は山口
県北部に位置し、基幹産業は農業・漁
業です。豊北町にある唯一の高校であ
る山口県立下関北高の教育をサポート
するという形で活動を
しました。

2018年度は豊北
高校3年生・生徒3
名の授業「自然探究」、
2019年度は下関北
高2年生・生徒13名の
授業「地域探究授業・
環境・自然」のサポー
トという形で活動を
しました。豊北町を流
れる栗野川、栗野川源流
の白滝山、栗野川が流
れ込む油谷湾、栗野川
から運ばれる豊富な有



上：栗野川河口の栗野港
より油谷湾観察に出発
下：角島海岸でユリヤ貝
の貝殻（5ミリ・緑）捜す

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進歩があったこと：6年間の継続の出発点はFGFの助成でした。講師謝礼を使いながら、この地域の各分野の専門家の協力を得ることができました。
- 具体的な今後の目標：高校生を巻き込み、これまでの活動を地産産業の再建につなげることです。



no.169
2018 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

海岸の自然観察を通じて マイクロプラスチックの 危険性を学ぶ

馬塚文司 (特定非営利活動法人
サンクチュアリエヌピーオー)
静岡県

の観察会と同時にマイクロプラごみ回
収体験を実施。プラごみのマイクロ化
を阻止する必要性を伝えた。野生生物
のプラごみ誤食防止のための啓発とし
て、マイクロスコープで魚の内臓から
マイクロプラスチックを観察し、身近
に迫る危険性を伝えた。環境学習では、
海岸の砂を学校に持ち込み、水槽に砂
を投入してマイクロプラごみを浮かせ
て確認、マイクロプラごみの危険性を
伝えた。また、パネル展を開催してプ
ラごみ削減への取り組みを呼びかけた。



HP

上：遠州灘海岸でのマイ
クロプラごみ回収体験
下：マイクロスコープで
魚の内臓から取り出した
マイクロプラスチックを
観察

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進歩があったこと：事業の立ち上げ時に助成頂いたことで、啓発横断幕やマイクロプラスチック回収の道具が整備出来、学校での環境学習や海岸での活動の機会を多く持てた。
- 具体的な今後の目標：事業は、現在も継続中であり、より多くの子どもたちへのマイクロプラスチック体験が出来るように、他県にも働き掛けていきたい。

For FGF 40th Anniversary

伊豆諸島青ヶ島の 絶滅危惧種が生育する 噴気孔原群落の 保全に向けた基礎研究

上條隆志 (筑波大学)
東京都

原では地温が40℃を超える測定値が見
られ、50℃を超える場合もあり、特殊
な立地条件であることが明らかになっ
た。さらに、2018年には青ヶ島で
自然観察会も行い、噴気孔原の独自性
と保全の必要性に関する講演を実施で
きた。島での観察会は2019年も
実施し、2021年には青ヶ島遠征太
鼓の荒井氏が参加する伊豆諸島の自然
保護オンラインシンポを伊豆諸島植生
研究グループの代表として開催した。
2023年には青ヶ島遠征太鼓が主催
する青ヶ島シンポジウム（開催地：銀
座）において噴気孔原の重要性を含め
た講演を行った。2023年10月にも
青ヶ島現地での観察会と講演を予定し
ている。本研究の成果と青ヶ島の普
及活動は、絶滅危惧種が生育する噴気
孔原群落の保全に関する理解を高める
ことに強く貢献できたと考えている

青ヶ島は伊豆諸島の有人島としては
最南に位置する、面積6平方kmの火山
島である。島は二重カルデラとなつて
おり、島全体が絶景である。島には独
自の自然景観が見られ、その代表が森
の中に裸地状の景観を作り出している
噴気孔原である。噴気孔原は、地温が
高く、水蒸気が立ち上がり、島では
“ひんぎや”と呼ばれ、サクラジマハナ
ヤスリなどの希少植物の生育地となつ
ている。また、ひんぎやの地熱は、人
の暮らしとも密接であ
り、サウナや調理にも活
用されてきた。



ひんぎやの地熱を利用してゆで卵
を調理する（2023年3月）。ひん
ぎやは、人の暮らしとも密接



サクラジマハナヤスリ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進歩があったこと：青ヶ島現地の自然保護の担い手との関係が強まったこと。希少な植物を大切に守ることの重要性を訴えることができたこと。
- 具体的な今後の目標：定期的に観察会などの普及活動を行うこと。特に、人と自然の持続的な関わりを大切にできるよう、協力できること。国立公園などの保全の枠組み作りにも貢献すること。

no.172
2018 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

網走市こまば木の ひろばにおける エゾモモンガの生態調査

後藤ひとみ（東京農業大学生物産業学部
海洋生物学教室）
北海道

調査地、網走市こまば木のひろばは森林総面積16・7haの保安林で、森にはハルニレ、ミズナラ、ハンノキなど湿性の広葉樹、トドマツ、エゾマツなどの針葉樹が混生し、多くの野鳥やエゾリス、シマリス、エゾモモンガ、アカネズミなどが生息する貴重な森である。森林保護の観点から市に働きかけることを目的とし、生活圏を森林に依存するエゾモモンガの生態調査を2016年から開始し、2018年から2020年まで助成を受けた。

調査方法はエゾモモンガの食痕など痕跡のある木を探し、営巣の可能性がある木は樹高、胸高直径、樹種、巣穴の高さ、向きなどを計測し記録した。また、1年を通して、特定の巣穴にセンサーカメラを取り付け、定点観測を行った。



上：モモンガトラップによるモモンガ捕獲のようす（助成当時）
下：定点カメラによる貯食行動記録（現在）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：エゾモモンガは貯食行動をしないとされているが、本調査によって貯食行動が確認されたこと。
- 具体的な今後の目標：貯食行動は毎年行うわけではないが、どのような条件で行うのか、調査を行う。現在、木のひろばと別の場所でセンサーカメラによる観測を継続して実施している。

助成期間中は行動圏を知るために、巣穴にモモンガトラップを仕掛けてモモンガを捕獲し、発信機を装着した。しかし、装着個体の発信機が離脱し再捕獲に失敗するなど行動圏のデータを取得することができなかった。

調査の結果としては営巣木の樹種ではシラカンバが全体の約28%、イタヤカエデ、ハルニレが約15%で樹種の約半数を占めており、また、巣穴の向きとしては南東、南西を含む南向きが約44%と日当たりの良い巣穴を好むことが判明した。また、現在は冬季のみ貯食行動の確認に絞って調査を行っている。

no.173
2018 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

巨樹・名木と それを取り巻く地域社会に おける生態系サービス及び Eco-DRR 機能の 定量的評価

宇野宏司（神戸市立工業高等専門学校）
兵庫県

近年、生物多様性には生態系・種・遺伝子の多様性の維持に加えて、生物多様性をもたらす生態系サービスの持続的利用という目的が注目されつつある。巨樹・銘木が織りなす自然環境は、緑地の存在や浄化機能、景観の美しさと教育・憩いの場といった生態系サービスを有すると考えられる。こうした樹木を保全していくには、これまでの樹木が置かれてきた空間の履歴と現状を把握することが大切である。

本研究では、全国各地に点在する巨樹・名木の中から地域性等を踏まえて代表的なものを抽出し、現在の樹木の位置情報や健全さなどを記録するための現地調査を行った。また、樹木や森林の管理形態、生態系サービス、



上：巨樹・古木の立地特性に関する現地調査（立山神社）
下：都市に残存するため池の淡水ブルーカーボン機能の検証（現在）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：実際のフィールドに向いて、巨樹・名木を取り巻く環境を目の当たりにできたこと。
- 具体的な今後の目標：本研究によって得られた地形、地勢の特徴、被災リスク、周辺環境を考慮した上でこれらの樹木を保全する策や樹木・森林の防災機能を最大に活かした取り組みなど、地域に見合った持続可能なまちづくりを構築するための具体的な手法を提案していくこと。

過去の被災リスクなど具体的内容を知るために、管理者を対象としたアンケート調査を行った。さらに過去と現在の土地利用の変化や自然災害における被災リスクを知るためにGISを用いて空間情報解析を行った。その結果、立地特性としては住宅街の中にある神社や寺に分布しているものが多く、これらの樹木は主に景観の場やレクリエーションの場、生物の生息・生育環境となっており、地域の数少ない貴重な自然景観を提供しうる空間であることを明らかにすることができた。

no.174
2018 年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の 砂浜植生再生活動を通じた 環境教育プログラムの開発

島田直明（岩手県立大学）
岩手県

「岩手県の砂浜植生再生活動を通じた環境教育プログラムの開発」と題して、2018年から2年間助成いただいた。この研究では東日本大震災の復興工事後の砂浜への海浜植生再生を目指して、地元の小中学校を対象とした環境教育プログラムの開発を目的とした。

環境教育プログラムは、海浜植物の名前や特徴を知る、砂浜環境の特徴を調べる、地元の海浜植物の種子を蒔いて苗を育て、砂浜に植栽するということを体験し、自分たちの身近な自然環境をよりよくしていく方法について学ぶものである。対象地は野田村十府ヶ浦（野田小学校）、山田町船越（船越小学校）、釜石市根浜（釜石東中学校）、陸前高田市大野（広田小



上：地元の海浜植物からタネを集め小学校で育てたものを地元の海岸に植栽した（2018年10月）
下：拾った海ゴミを利用したアート作品づくりの授業（2022年11月）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：もっとも進展があったことは海浜植物群落の再生である。
- 具体的な今後の目標：海ゴミ問題などを授業に組み入れ、地域の海辺全体を守っていく意識の醸成に努めていく環境教育プログラムとすることを目標に取り組んでいる。

学校）である。これまでの成果としては、①それぞれの海岸において海浜植物群落の再生が確認されていること、②環境教育に用いる「岩手県の海辺の植物図鑑」が作成できたことが挙げられる。この授業が海浜植物群落の自然回復の一助になり、十府ヶ浦や大野海岸では大きく群落が再生した。授業内容も植栽活動から海ゴミ拾いや海ゴミアートづくりへと変化させている。今後もこの授業を継続しつつ、小中学校や地域の方が行えるようにマニュアル化することを考えている。

no.175
2019 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

浅間山系における ミヤマシロチョウの 保全活動と生態調査

花岡敏道（浅間山系ミヤマシロチョウの会 会長）
長野県

ミヤマシロチョウは、1901年に長野県の八ヶ岳で発見された高山蝶の一種で、国内では南北アルプスや中信高原の八ヶ岳と浅間山系の標高1400m～2000mの渓谷や高原に分布していましたが、経済成長期の別荘開発やゴルフ場開発でその生息環境が失われたため、著しく減少してしまいました。

2010年に本会が設立され、主に啓発活動と生息個体数のモニタリング調査を継続してきましたが、この間にも美ヶ原と八ヶ岳ではミヤマシロチョウがいなくなつたため、浅間山系の生息域を保全することがますます重要になってきました。そこで、本会では2019年に助成決定をいただき、2019年から2020年にかけて事業を実施しました。



上田盆地を背景にハクサンシャクナゲから飛び立ったミヤマシロチョウ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：調査結果については、専門誌『昆虫と自然』に寄稿、松本むしの会『まつむし』に報文3本を投稿し、公表することができました。
- 具体的な今後の目標：生息環境維持のために、国や県に働きかけていくことが重要となります。

事業内容は、飼育調査と啓発活動で、飼育調査では、これまで生態や形態が不明であった点を中心に調査するとともに、ミヤマシロチョウの人工増殖が可能かどうかを確かめるために平地と高原において交配と産卵の実験を行ったところ、高原において増殖の可能性があることが確認できました。啓発事業では、まず高山帯の遺存種として共に衰亡著しいライチョウとミヤマシロチョウの写真展を開催し、生態などを紹介するパネルも展示。2020年には、配布用パンフレットを作成し、7月には市民対象のミヤマシロチョウ観察会を開催しました。11月には日本チョウ類保全協会との共催で「全国チョウ類保全シンポジウム」を長野県東御市で開催し、基調講演、各地の現状報告、パネルディスカッションなどを行い、合わせて分布や生態をまとめた記録誌を作成し、ミヤマシロチョウの現況を広く周知することができました。

男鹿の自然にふれあい
生きる力を身につけよう！
多世代参加の
自然体験プロジェクト小玉由紀（子育てカフェ・にこリーフ）
秋田県

私たちは、2012年から、なまはげで有名な秋田県男鹿市をフィールドに、豊かな自然と生活文化を学ぶ体験プログラムを実施しています。活動を続ける中で、自然体験のフィールドである山や川、海において、気候変動によるものと思われる様々な変化を感じる場面が増えてきました。例えば、プログラムの1つ、秋田の郷土料理「ハタハタ寿司作り」の材料であるハタハタは、男鹿の海で大量に水揚げされていましたが、ここ数年で漁獲量が激減し、入手が困難になりつつあります。同様に、里山トレッキングのプログラムでも、見られる植物が少しずつ変わってきて



上：ジオパークガイドと行く寒風山トレッキング（2019年）
下：休耕田を利用した自然農と手仕事体験での稲刈りのようす（2021年）



HP

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：この助成がきっかけで、これまでの自然体験プログラムをブラッシュアップすることができました。FGF機関紙で他団体の取組み等、参考になりました。
- 具体的な今後の目標：今後の目標は、無理をせず活動を継続していくことです。

多摩丘陵に残された
里山と古街道の
歴史環境遺産を保護し、
自然景観の維持と
活用に貢献する宮田太郎（歴史古街道団 代表）
東京都

東京都と神奈川県双方に跨って横たわる、広大なる「多摩丘陵」。その西部に残る12本の貴重な歴史古街道群の保護・保全をテーマに、古道周辺の緑地・山林内に残る「自然環境＆歴史環境」の整備や、新旧住民が世代を超えて参加できる複数の学習と体験のプログラムを実施しました。

主な実施内容は、環境整備（14回）と歴史の魅力を実体験できる「古街道ウォーク（22回）」、「多摩丘陵の12古街道展（多摩市と町田市の2会場で開催）」、歴史講演会（3回）、ファミリー野外教室（古街道の歴史地図作成・親子体験教室）、若手ガイド養成講座、古道跡のメンテナンス（継続中）、中世城砦内の鎌倉道・試掘調査、万葉時代の防人の道・時代再現イベントなどを実



上：時代再現「万葉時代・防人の道“古代東海道”ウォーク」の風景（2021年11月）
下：「多摩丘陵の12古街道」での若手ガイドの養成



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：これまでの研究・保全・啓蒙的活動の成果を、パネル展示や映像シアター、立体模型、時代再現イベントなどで複合的に紹介できたこと（多摩丘陵の12古街道展）。
- 具体的な今後の目標：より若い世代の参加を増やし、地域の自然＆歴史環境の保全・維持に幅広い世代が関り合える機会を創出していきたいと思っています。

球磨郡相良村
湿地再生及びそれに係る
地域連携の構築一柳英隆（球磨湿地研究会）
熊本県

熊本県球磨地域には、希少種が生息するいくつかの湿地がある。いずれもかつては水田であったが、放棄され、陸地化して高茎草本が優占することで、湿地性生物の多様性が低下している。我々は、これら湿地の再生を続けている。乾生植物の除去、耕耘を行い、水面を造成した。また、水生昆虫であるタガメや水草類を指標としてモニタリングし、維持方法・水面の造成方法にフィードバックさせた。タガメ

ンティアが参加し、そのボランティアを地域の人材が道具準備や事前整備、食事作りなどによって支えている。再生湿地の数や面積は徐々に増加している。社会的な体制の確立とともに、流域の生物多様性保全として、もう少し戦略的に進めていくことも必要だろう。生物多様性のどの部分を強化していくのか、生態系の多面的な機能のうちの機能を重視するのか、そのネットワークをどうするのか、等々、流域レベルでの検討が必要かもしれない。

上：絶滅危惧種デンジソウの群落
下：高校生・大学生が参加した水生昆虫調査（2020年）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：高校生や大学生ボランティアの受け入れの充実により、湿地整備の体制が整った。
- 具体的な今後の目標：タガメの個体群を安定的に継続するとともに、迫の再生湿地の総面積を10年以内に30ha程度まで増加させる。

七尾湾の環境改善と
環境保全型農業の
実現に向けた海藻草の
回収活動大慶則之（能登の森里海研究会）
石川県

本会は海藻アマモに着目した能登半島七尾湾の環境改善活動を行っていています。会ではアマモの播種活動と並行して、アマモが吸収した栄養塩類を有効利用する目的で、打ち寄せられる大量のアマモを肥料として農業に生かす活動をFGFの助成により実施しました。活動では有機農業従事者など5名に、天日乾燥させたアマモを用いた野菜栽培（ハクサイ、ニンジン、ダイコン、ジャガイモ、トマトの5種）を依頼しその効果を評価しました。この結果、ニンジン、ハクサイでは甘みを引き立てる効果が認められ、アマモの肥料原料としての有用性が示されました。



乾燥アマモを用いたハクサイ栽培の様子

近年の温暖化の影響によるものか、海の中では人々の目につきにくい重大な変化が急速に進行しています。本会はこれらの実態を地域の皆さんに発信しつつ、環境の変化に対応したアマモの増殖方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。

しかし最近になって、ここ約30年間で七尾湾のアマモの生息域が半分以上に減少したことや、本来多年生



アマモ播種作業の様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：有機農業従事者の方々に乾燥アマモを用いた野菜の栽培試験に取り組んでいただき、その生育状況や食味を実体験してもらうことができた。これによって、海藻アマモの野菜栽培への利用を広めるための素地を形成することができた。
- 具体的な今後の目標：アマモの減少に歯止めをかけるため、温暖化が進む七尾湾の現状に沿ったアマモの増殖技術を開発して実用に応じたい。



HP

天然記念物コクガンの
捕獲および
GPS 送信機装着事業鈴木卓也 (南三陸ネイチャーセンター友の会)
宮城県

渡りの経路について、初年度は1羽の幼鳥がオホーツク海の対岸に位置するマガダンを経由して北極海に到達し、秋にはカムチャツカから千島列島を経由して北海道に戻るまでのデータが得られました。次年度の家族群では、オス成鳥が北極海沿岸のレナデルタに到達したこと、幼鳥の1羽が道東で他の家族と離れてカムチャツカ半島東方に長期間滞在したことが確認でき、志津川湾のみならず日本で越冬するコクガンたちの渡りのルート、繁殖地及び換羽地に関する貴重なデータを得ることができました。

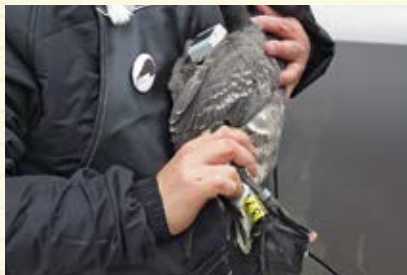
上：発信機装着の様子

下：発信機を装着した幼鳥の、放鳥直後の様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：コクガンに対する地域の認知度が上がり、より好意的に接していただけるようになったと感じています。
- 具体的な今後の目標：コクガンをはじめとする生物多様性豊かな南三陸の環境づくりをさらに進めたいと思います。

助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活用センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上にいて、行動圏は狭いものでした。家族群の場合、親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がるのがわかりました。

内部標識を用いた
絶滅危惧種ギバチ
(*Pseudobagrus tokiensis*)
の生活史調査早川拓真 (宇都宮大学大学院)
栃木県

向性は見られなかったことから、本種は生活史の多くを河川内の小さなスケールで完結していることが確認された。

宇都宮大学農学部農林生態工学研究室では、里地里山に暮らす生き物と人との共生をめざした研究を行っている。地域の希少な生物の生態解明は、豊かな自然の再生に寄与する知見となるとともに、その地に根付いている文化(例えば、ギバチは栃木県では「ギンギョ」と言う名で親しまれている)の保全にも貢献することが考えられる。今後も希少な生物の生態解明を通じて、人と生き物の関わり合いの中で培われてきた文化も保全したいと考えている。

上：エレクトロフィッシャーによるギバチの採捕の様子
下：学会での成果発表の様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：小規模な研究室では難しい機材が調達でき、幅広い研究を視野に入れることができたこと。
- 具体的な今後の目標：助成費で購入したカメラの改良を続けており、ギバチの産卵行動を撮影することが目標である。

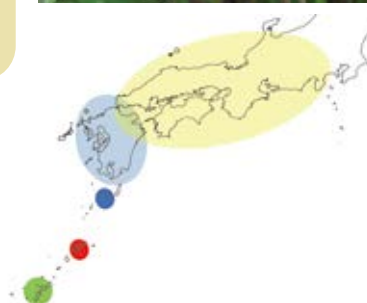
広域分布型
絶滅危惧植物の域外保全策
確立に関する研究：
ラン科カンランを例にして長澤淳一 (京都府立大学
京都地域未来創造センター)
京都府

次に選抜後のカンラン個体についてSNPを用いた集団遺伝解析を行い、その結果、野生集団の遺伝構造として、南西諸島(屋久島、奄美大島、沖繩本島)にそれぞれ大きく分化した固有系統が認められました。一方で、昭和時代を中心に採取され産地情報が明確な栽培個体の解析結果は現存する自生個体の遺伝構造とは一致せず、九州と中国・四国地域を境界に東西で遺伝的分化がみられ、種子の山播きのような人為的な遺伝子攪乱の可能性が示唆されました。

上：自生地でカンランの花を見ることは非常に稀だが、奄美大島では2個体の開花株が確認できた
下：カンランの遺伝構造(京都大学・西原美佳氏作成)。南西諸島(屋久島、奄美大島、沖繩本島)にそれぞれ大きく分化した固有系統が認められ、九州と中国・四国地域を境界に東西で遺伝的分化がみられた

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができ、国内全般を網羅したカンランの遺伝構造が明らかになったこと。
- 具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産カンランの解析も進めて日本との関係を明らかにする。

自然豊かな河川と
水害をもたらし河川に関する
伝統知と環境・防災教育に
関する実践研究落合知帆 (京都大学大学院)
和歌山県

野地域を訪れる観光客も地域の川との営みを知る機会を提供し、環境・防災意識の向上につながっている。

地域の人々と川の関係は大きく変化している。高齢化・過疎化が進み、川遊びをする子供たちの姿を見かけることも減っている。川に関する総合的な知識や周辺環境の把握は子供の頃からの川遊び、地域の習慣や伝統文化などと密接に関係しており、これらを継承するためには多様な方向からのアプローチが今後さらに求められる。



伝統漁と生きもの説明を聞いている様子

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町(特に大塔川流域)を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらし川」を同時に捉え、専門的な知見に加え、地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指した。

当地の小学校ではこれまで、地域学習の一環として小学4年生を対象として「川の生物調査」が行われてきた。これを土台としながら、そこに地域の伝統漁法、昔の川遊び、伝統食に関する情報を付加し、さらに水害時の川の変化や危険性、災害時の対応についても学ぶことができる副読本を完成させた。これは小学校のみならず一般



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な視点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

動植物とその生息環境の保全と安全登山のために

大塚信男 (雷神山を愛する会)
群馬県

助成金を頂いた後、コロナで思うように活動できないこともあって、大変でしたが細々と活動を続けられたのも、助成金のおかげと感謝しています。

私たちの活動では、カッソウの保護活動と合わせ、その他の植物の保護も行っています。一番大きな活動は、貴重な植物をシカなどの食害から守るために行っているネット張りでしょうか。貴重な植物は、ネットを張って数年後には、復活が顕著になります。しかし、ネット張りは資金もかかりますし人手もかかります。ある程度の高価な道具とネット、消耗品の購入に助けられ、ネットを張る活動は助成金を頂いた後大きく進展しました。今年も何度もネットを張る活動は行っていますし、その成果があちこちで出てきています。

カッソウの保護活動の一環では、カッソウが咲いている時期には首都



上：ネットの設置中
下：ネット内で復活した植物



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：ネット張りが大きく進展したこと。
- 具体的な今後の目標：今まで通り動植物を守る運動と、登山道整備など地道な活動が続けられればと思います。

「法」の字プロジェクト ～低層植物の保護・再生による京都五山送り火の山の保全、そして、送り火行事の保存継承へ～

岩崎 勉 (公益財団法人松ヶ崎立正会
(妙法保存会) 理事長)
京都府

ツツジ等の低層植物の保護・再生と表土流出防止を図り、火床を守り、松ヶ崎「妙法」送り火の保存継承を図るプロジェクトに、2020年にFGF様の助成金を交付頂きました。具体的には、山の法面が急峻で、鹿の増加によりツツジ等の食害が著しく、地盤が露出している「法」の字山を対象に、63基の火床の周辺四方を囲む遮断柵（防鹿柵）を設置するものでした。

その第1弾として、鹿の移動の実態（大学での研究結果）を踏まえ、東側と西側に南北方向の柵（延長260m）の設置を2021年3月に完了しました。翌春には開花するツツジが見受けられ、プロジェクトの成果の端緒を確認することができました。FGF様の



上：ツツジ等の生育状況
下：ドローン撮影による植生の経年変化のようす



2021年6月20日 (Photo by 丹羽英之 (2023)/CC BY 4.0)
2022年6月27日 (Photo by 丹羽英之 (2023)/CC BY 4.0)
2023年6月27日 (Photo by 丹羽英之 (2023)/CC BY 4.0)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：ツツジ等の低層植生の新芽が鹿の食害を受けず、徐々に開花に至っている。ツツジの根が枯れることなく、その地盤が維持されている。
- 具体的な今後の目標：ドローン撮影等を通じ、植生の経年変化を確認し、必要に応じ、育苗等の取り組みを考える。

ご支援を始め、「宝が池の森」保全再生協議会との連携、京都大学の高柳先生、京都先端科学大学の丹羽先生との協働、松ヶ崎消防分団等地域の関係団体有志の皆様のご協力に、改めて感謝している次第です。

先鞭を付けて頂き、第2弾として2021年度は、クラウドファンディング等を通じて寄付も得て、山頂と山麓、東西方向の柵(延長170m)を、お蔭様で、翌年3月に総延長430mの設置を完遂することが出来ました。

絶滅危惧Ⅱ類「ヤマグチサンショウウオ」の棲息環境の保護・保存と小学児童の環境教育

新村義昭 (小串ヤマグチサンショウウオ保護・保存会)
山口県

自然環境教育の一環としての、児童による飼育・観察における最大の問題点は、越夏対策、すなわち、夏季の高温(25℃以上)によってほとんどのヤマグチサンショウウオが死亡することであった。この解決のため、2021年には、大型水槽の水を冷却し、間接的に飼育箱を冷やす冷却器と水中ポンプを導入したが、児童個別の飼育観察箱を冷やすまでには至らなかった。

2022年は、飼育箱の天井に保冷剤を置いて冷ます方法に加え、飼育の先輩から「冷蔵庫」を有効に用いる方法のアドバイスを頂き、試みた結果、極めて良い成績、すなわち、夏季のヤマグチサンショウオの死亡数が劇的に減少した。そ



上：児童個別に飼育・観察。2021年まではこのまま越夏をしていた(2020年)
下：容器は別荘・冷蔵庫は避暑地。冷蔵庫に入れ、夏季休暇を安全に過ごす(2022年)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：児童による飼育・観察対象のヤマグチサンショウウオの死亡率が減少したこと。
- 具体的な今後の目標：棲息地で上陸直後の幼体が最初に隠れる場所の確認。

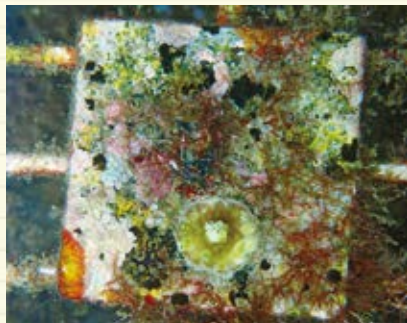
の方法は、手のひらサイズのタッパーウエア(別荘)の蓋に数ヶ所の空気孔を穿ち、十分に湿らせたミズゴケと一緒にサンショウウオを入れ、冷蔵庫(避暑地)で飼育するという極めて簡単な方法であった。

一方、棲息地では、林床の落葉落枝量が多ければ、ヤマグチサンショウウオの餌となる森林土壌動物も多いという報告をもとに卵囊数と落葉落枝量との関係を調べたが、明らかな関係は見いだせなかった。また、ヤマグチサンショウウオの産卵池の表面積と水深を調べているところである。

分布北限域におけるエダミドリイシの有性生殖法を用いた養殖・移植方法の確立に向けた活動

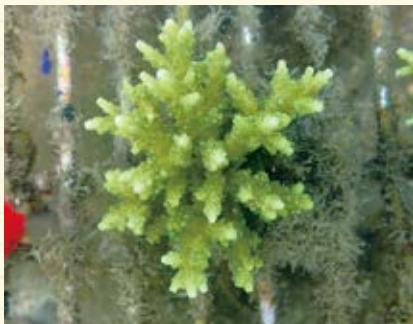
NPO 海辺を考える しおさい 21
静岡県

エダミドリイシは、絶滅危惧Ⅱ類に分類される日本の温帯域に特有の枝状の造礁サンゴである。かつて静岡県沼津市西浦久連地先には、分布北限域最大規模のエダミドリイシの群落が見られた。その群落は、90年代半ばの冬の低水温や、ガンガゼの食害などで消滅の危機に瀕するようになっていた。そのため、枝の小片を海中で育てて移植する方法で、保全と現状復帰の取り組みを続けてきている。しかし、元々あるエダミドリイシの枝を育て増やす方法だけでは、群落全体の遺伝的多様性が減少し、環境変動に対して脆弱な群落となっている可能性が否めないと考えた。



2021年8月に生まれたエダミドリイシ群体の様子(2022年8月)

2020年に陸上水槽中に移したエダミドリイシの産卵を観察することができた。さらに、2021年には卵と精子を採取し、受精させ、幼生まで飼育し、それらの幼生を基盤に着床させ、基盤ごと幼体を海中に移設した。その後、生残と成長の観察を現在も継続的に行っている。



同じエダミドリイシ群体の1年後の様子(2023年8月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成を受けたことで、新しい活動に取り組めた。
- 具体的な今後の目標：分布北限域のサンゴは現在も大きく変動しつつある。そういった変動と向き合いながら保全にかかる活動を続け、次世代に伝えていきたい。

外来種である
キノボリトカゲのテリトリー
を用いた駆除技術の開発保田昌宏 (宮崎大学農学部獣医学科)
宮崎県

昆虫食の中型トカゲが日本国内の複
数地域に外来種として定着して地域の
生態系に深刻な影響をおよぼすことが
懸念されています。例えば、スウィン
ホーキノボリトカゲ（特定外来生物）
は神奈川県、静岡県、宮崎県などで定
着が確認されています。宮崎県で定着
している個体群は、我々の調査によっ
て爆発的に密度が上昇し、定着域がど
んどん拡大していることが確認されて
います。本種は昼行性で樹上と地上の
両方で採餌をする待ち伏せ型の捕食者
であり、アリやセミなどの昆虫をはじめ
、様々な無脊椎動物を餌としている
ため地域の固有種や絶滅危惧種等をは
じめ生態系への深刻な影響が予想され
ています。

これまで本種の捕獲
は、春から秋にかけて
粘着トラップやヒトに
よる釣り竿を用いた地



上：樹幹上でなわばりを主張するスウィンホーキノボ
リトカゲ（オス）
下：冬季不動化したトカゲ（上：オス、下：メス）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成を頂い
たことで、活動の為に道具がいろいろ揃ったことが大
きいです。春から秋にかけてキノボリトカゲの捕獲が
順調に実施でき、捕獲個体を使って本種の生態をしつ
かり調べることができ論文としてもまとめました。
- 具体的な今後の目標：冬季に地上で越冬しているこ
とが明らかになったので、本種の習性を使った簡易・
安価で汎用性のある駆除方法を開発中です。うまく
いけば、冬季から早春にかけて本種の駆除を徹底的
に行えることになります。まずは低密度管理にもって
行き、完全駆除へ向かって進めていきたいと思います。

市民科学手法を活用した
外来魚アメリカナマズの
侵入前線検出吉田 誠 (東京大学大気海洋研究所)
滋賀県

北米原産の外来魚アメリカナマズ
（和名・チャネルキャットフィッシュ）は、
在来生態系や内水面漁業への悪影響が
懸念され、2005年には特定外来生
物に、2018年には緊急対策外来種
にそれぞれ指定されている。本種は現
在も国内の複数の水系で分布を拡大し
ているとみられ、適切な防除・対策を
行うための基礎情報として、各水系に
おける分布を正確に把握する必要があ
る。

本研究では、釣り人をはじめとす
る市民の方々から広く情報提供を募る
市民科学手法を活用し、本種の分布解
明に取り組んだ。情報募集チラシ、各
種SNSおよびスマートフォンアプリ
「Bione」を活用した情報収
集を通じて、東北～関西の
各地から計704件の報告
が寄せられた。また、愛知
県の矢作川水系における現



上：本助成を受けて製作したアメリカナマズの情報
冊子。本種の生態や分布、釣り方に加え、本種と間
違えられやすい在来のナマズ類2種との見分け方も
掲載した。本冊子の電子データは左記のQRコード
のサイトにもウェブ公開中

下：現在開発中のウェブマッピングシステムの一画
面。市民科学調査で寄せられたアメリカナマズの捕
獲地点をウェブ地図上に表示し、地域・水系ごとの
本種の分布状況をひと目で把握可能。2024年度中の
公開を目指して開発中

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：全国規模
の市民参加型調査により、これまで見過ごされが
ちだった釣り人（市民）の方々も様々な情報を
学術データとして把握・整理できた。
- 具体的な今後の目標：データは開発中のウェブ地
図にて2024年度に公表予定である。

西表島固有種
ショキタテナガエビの
絶滅回避に必要な
保全遺伝学的研究今井秀行 (琉球大学理学部)
沖縄県

川釣りで有名なテナガエビやミナミ
テナガエビが一般的ですが、日本の川
には約20種のテナガエビ類が記録され
ています。そのほとんどは、ふ化した
幼生が海で成長して稚エビから川の生
活へ変えます。しかし、一生を川で過
ごす種類がいます。西表島だけに生息
するショキタテナガエビです。

西表島が2021年に世
界自然遺産となり、オー
バーツーリズムや森林開発
および外来種の侵入などの
影響で絶滅する可能性も考
慮した保全に取り組まなけ
ればなりません。そ
こで西表島内のショキタテ
ナガエビが河川ごとにどの
ような遺伝的特徴をもつの
かを調査しました。着手す
る頃はコロナ禍で出張がで
きないなど、想像以上の困



上：ショキタテナガエビ（雄）
下：徒歩や車でアクセスできない河川で、
捕食者や競争種が少ないショキタテナガエ
ビの楽園

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：未知であ
ったショキタテナガエビの遺伝的
多様性や河川ごとに小進化した集団である
ことを明らかにできたことが大きな進
展でした。
- 具体的な今後の目標：今後は学術雑誌へ
の掲載発表と保全のための啓発活動をし
ていきたい。

愛宕山てっぺんの
森の「生態系管理」
「環境教育拠点化」事業石巻 司 (NPO 法人愛宕山てっぺんの森を
守る会 理事)
長野県

開発著しい軽井沢町に開発できない
場所を作ろうと発足した当NPOは、
日本ナショナル・トラスト協会様、個
人及び企業様からの寄付により軽井沢
町の愛宕山てっぺん付近の山林を取得
しました。その山林を保護する活動が
シンボルとなり、活動の輪が広がり外
来種が駆除され、種の多様性が守られ、
軽井沢町が益々自然豊かな街になる事
を目的に活動しています。

主な活動は、「人が誠意と敬意を持つ
て手を入れた自然は、手つかずの自然
より美しい場合がある。」との信念の
元、森に育つ絶滅危惧種の植物
オオヤマカタバミとオニヒヨウ
タンボクの保護や定期的な間伐。
また森の白樺から採種してその
種から育苗して多くの方々に植
樹して頂き、植樹した苗を虫か
ら守る為に虫を食べるシジュウカ
ラなどの鳥の巣箱を設置して毎



上：FGFの助成を受けて植樹会を開催した
下：白樺の苗。多様性を守る為にこの森の種
を育苗する

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：森の間伐
が出来た事。長年人の手が入らなかった森は昼な
お薄暗く不気味で人が入る事を拒んでいるようでした。
熟練の木こり達が間伐する事により、森に光
と風が入り、草が茂り花が咲き、人が入れるよう
になりました。
- 具体的な今後の目標：今年度から始まった植樹会
と鳥の巣箱の清掃と巣箱作りの会を定期的に催し、
多くの方々に森に来て頂く事。その為に定期的な木
の間伐、白樺の苗づくりをしています。又、森の
中の音楽会や森とアートなどの企画も既があり、そ
れを実現したいと考えています。一人でも多くの
人が森に来ますように。



年清掃と修繕をしています。
目指すところは、なによりも多くの
方々に森に来て頂きたい。森に来て自
然保護の大切さ、その為の人の役割、
森林の役割を知って頂き、それを多く
の方々に流布して頂きたいと願ってい
ます。そして森についていい、楽しいな
と感じて頂き、私達の住む場所でも何
か出来ないかな、やってみたいなど思っ
て実際に活動して頂けたら本望です。
バタフライ効果の様に、一本の白樺
の植樹が地球のどこか荒れて草木の無
い土地が森に生まれ変わるそんな事を
夢見ています。

カヤネズミと ヒナカマキリを含む地域の 生物多様性保全プロジェクト in 竹尾緑地 2021

佐伯美保（環境ネットワーク「虹」代表）
福岡県

子どもたちは今、電子映像メディア接触が増え、自然体験や農業体験等が減少している。体験不足による想像力の低下が生物多様性保全意識の低下につながる事が危惧されるが、「緑地など地域の自然環境に高頻度で行く子どもは、そでない子どもに比べて高い生物多様性保全意欲を持つ」（2016年東京大学大学院研究グループ）との調査結果がある。

環境ネットワーク「虹」では、地域の生物多様性を保全し持続可能な社会にしていくなめには、地域の緑地等での自然体験型の学びの機会を継続的に提供し、「自然感覚」（他の生物や環境に配慮し大



上：カヤネズミの巣（2023年9月）
下：カヤネズミの観察（2021年）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：フィールドに棲息する希少なヒナカマキリやカヤネズミやニホンアカガエル、カスミサンショウウオの生息状況の調査が進んだ。
- 具体的な今後の目標：引き続き子どもたちと竹尾緑地の生自然観察や調査を続け、生物多様性保全に貢献したい。

生物多様性保存型 里山ビオトープの造成と その活用に関する事業 (環境省レッドリスト絶滅危惧IB類の ホクリクサンショウウオなどの両生類の保全)

岡田一雄（NPO 法人自然環境ネットワーク・
射水市ビオトープ協会）
富山県

当協会は小杉高校生物クラブOB会を母体として有志によって設立され、自然保護活動を行ってきました。【生物多様性保存型里山ビオトープの造成に関する事業】が私達の活動テーマです。

原生的地域の生物多様性は人が関与することにより劣化し、里山の地域の生物多様性は人の関与が減少することにより劣化します。原生的自然は少ないですが、里山地域は多くある射水市において、【人と野生動物植物の共生】を図り、生物多様性・生態系の理念を啓発し、希少動植物・地域在来動植物・絶滅危惧種の保存を図るとともに過密化や高齢化の進行による里山の生物多様性の衰退を防ぎ地域の活性化を図ることを目的として、射水南部丘陵において【人間の営みと野生動物（特に両生類）の共生】を目指しています。



オーストラリア訪問団と学習会・意見交換した

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：10年間の活動で約1.5haの里山ビオトープを造成できた。侵入竹800本伐採・広葉樹600本の植樹・耕作放棄地や山の沢を活用し産卵用の池や水路を10ヶ所造成、ホクリクサンショウウオ他10種の両生類の自然産卵を実現した。
- 具体的な今後の目標：国連や環境省が目指す環境共生サイト【OECM】への登録を実現し事業の継続性を図る。保全・維持に幅広い世代が関り合える機会を創出していききたいと思います。

やながわ有明海水族館を 活用した 幅広い世代への 体験型環境教育の実施

内山里海（NPO 法人 SPERA 森里海・
時代を拓く 理事長）
福岡県

様性について考える、そして自然や有明海また掘割の再生を目指す意識を生み出すと同時に、多くの皆様の【笑顔】が多種多様で新たな繋がりを生み出しています。『カメスケのかわいい水辺の生き物』絵図鑑も大好評、おいでませ〜柳川に！



HP

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：フィールド活動「柳川お堀の大調査」や「荒尾干潟観察会」では干潟の生き物に直接触れ、計測し記録も取るので大好評！繋がりの環が無限に広がり笑顔と元気を発信しています。

SPERAとはラテン語で希望・信頼と言いう意味。管理運営、活動の拠点は「やながわ有明海水族館」水都柳川の930kmにも及ぶ掘割が有明海へとつづく終着点に位置し、館長は歴代学生であることで有名。瀕死の海有明海の再生・ニホンウナギの復活・絶滅危惧種の保全活動を中心に「つながる喜び」を提案できる活動を行っています。



上：荒尾干潟観察会
下左：荒尾干潟観察会で観察したマジャク
下右：柳川お堀の大調査



ホトケドジョウ類の 進化史の解明と 保護施策の確立 ーホトケドジョウ学の醸成ー

宮崎淳一（山梨大学教育学部）
山梨県

ホトケドジョウ類は、里山の湧水や奥山の細流に生息する体長が最大で8cm程度の小型の純淡水魚であり、人間の活動による生息地の破壊や環境の改善のため生息数が減少し、日本在来の4種全て（エゾホトケドジョウ、ホトケドジョウ、ナガレホトケドジョウ、トウカイナガラホトケドジョウ）が絶滅危惧IB類に指定された。

本研究では特に愛知県東部と静岡県西部の主に矢作川水系・豊川水系・天竜川水系のみに生息するトウカイナガラホトケドジョウの保護に資する生態学的なデータをj得るために、助成金をいただき研究を行った。その結果、本種



トウカイナガラホトケドジョウ

がイワナやヤマメ等の捕食者のいない、河川勾配が20度以下の山間の小川に生息し、ほぼ1年中繁殖を行っていること、ま

た、個体識別を行って、成長率が年齢に伴って減少しつつ10年以上の長きにわたって生存し、季節を問わず上流や下流に移動すること、を明らかにした。さらに生息地にみられる砂防ダムをスリット型に変換することによって遺伝的交流の阻害が解消される可能性を示した。今後これらのデータを基にホトケドジョウ類の形態・生態・進化史・新種発見・遺伝学的構造・保護活動などをまとめ、ホトケドジョウ学を醸成することを目指す。



調査地点で流程を測定しているところ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成をいただいたおかげで、これまで10年以上継続してきた研究の成果をまとめることができたこと。生態学的側面については論文を投稿中であり、砂防ダムの遺伝的交流に与える影響については論文を準備中。
- 具体的な今後の目標：同志とともにホトケドジョウ類の知見を網羅した本を出版して、ホトケドジョウ学を醸成する。これはホトケドジョウ類の保護につながるだけでなく、希少生物の保護・生物多様性保全に関する全ての活動の礎となると思われる。

七北田低地
(仙台・多賀城) への
シジュウカラガン復元に
向けた基礎研究呉地正行 / 澤 祐介 (日本雁を保護する会)
宮城県

である秋田県大潟村でシジュウカラガン9羽に発信器を装着し、追跡を行ったところ、厳冬の12月下旬に宮城県仙北平野北部に移動し、化女沼、蕪栗沼、河川をめぐらとして大豆畑、水田、麦畑などの農地で採食していることが明らかになりました。これらのデータをもとに重要な生息地とその環境要因を特定し、保護区と越冬地の環境改善と拡大を求める政策提言を行い、七北田低地での越冬地復活をめざす活動を展開していきます。

日本雁を保護する会では、20世紀初頭に日本の空から姿を消してしまったシジュウカラガン(絶滅危惧IA類)の群れについて、仙台市八木山動物公園、ロシア科学アカデミー、米国魚類野生生物局と共同で1983年より「羽数回復事業」を実施してきました。この中で、人工繁殖した鳥をかつての繁殖地である千島列島で放鳥する活動を行ってきました。その活動が実り、現在、日本への渡来数は9000羽を超えるまでに回復し、宮城県北部を中心に越冬しています。

上：化女沼でシジュウカラガンのねぐら入りを観察する仙台育英学園高校の生徒たち(2022年12月)(写真提供：仙台育英学園高等学校)
下：公開シンポジウムで、多賀城市長(左)に提言を行う仙台育英学園高校生(2023年5月)(写真提供：東北緑化環境保全(株))

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：越冬期間中の行動圏、利用環境、ねぐらを詳細に特定できたことに加え、繁殖地である千島列島と越冬地である宮城県の往復の渡りルートを詳細に追跡することができ、1年を通したシジュウカラガンの生活を明らかにすることができました。
- 具体的な今後の目標：現在、七北田低地では、地元の仙台育英学園高等学校などと連携したシジュウカラガン復活活動を展開しています。多賀城市への政策提言などを行い、活動の核となっている地元高校生を支援しながら、本研究の成果を活かし、次世代主導による七北田低地での越冬地復活をめざします。



伊豆諸島の三宅島は火山の島として有名です。繰り返し噴火とともに人々が暮らしてきました。島では溶岩流や泥流などで植生がなくなつた後に時間をかけて回復する「遷移」を繰り返しています。2000年の大噴火から20年経つた今、山はハチジョウススキに覆われています。土壌が殆ど存在しない厳しい状況でも生えることができるハチジョウススキは噴火と切っても切れない関係にあるのです。一方、三宅島では以前はほとんどの建物が茅葺だったことが文献からわかってきます。共有の茅場があり共同で屋根を葺き替えていました。明治期以降に急速に減少し、現在は島役所跡のみに残っていました。

私たちの目標は、数年後の島



上：茅刈り体験
左：ワークショップで作った茅の小屋

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：小中学校での茅に関するワークショップを実施して、茅に対する意識が少しずつ広がったこと。
- 具体的な今後の目標：屋根葺に三宅島の茅を使うこと。みんなで屋根葺を手伝えるように準備すること。

三宅島における
ハチジョウススキの特徴
—自然と文化をつなぐ茅葺の
復活をめざして—黒田乃生 / 上條隆志 / 廣田 充
(筑波大学)
東京都

役所跡の屋根葺に三宅島のハチジョウススキを使うことです。その第一歩として、2023年には筑波大学のメンバーに加え茅葺の専門家と職人の方をお招きして島の小学校と中学校でワークショップを実施しました。授業で茅について学んだ後、実際に茅を刈って小さな小屋を作りました。冬には試験的に山でハチジョウススキの刈り取りを始める予定です。これから三宅島の茅葺をつなぐ新しいしくみを作っていきます。

奄美群島における
漂着物学研究推進の
ための基礎的研究西村千尋 (歩健学研究室)
鹿児島県

子の記録」として、第22回漂着物学会岩手・大槌／釜石大会で発表を行う予定です。その後は、調査回数が多かつた徳之島に関するデータ解析を行うことにより、漂着物学の推進に貢献していきたいと考えています。

さらに、研究成果や連携による資料提供などをもとに、環境教育だけでなく、保健教育などと融合した教育活動にも取り組んでいるところで、徳之島だけでなく、喜界島でも教育現場に赴き、授業を担当する機会を得ました。その教育効果などについても、日本学校保健学会第69回学術大会で報告する手続きを進めています。

上：瀬戸内町立郷土館での漂着物に関するギャラリートークの様子(2022年11月)
下：夏休みの図書館イベント(徳之島伊仙町)にて参加者に漂着物の解説をする(2023年8月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：奄美群島内での連携ができたこと、特に、一升展示の提案をきっかけに、奄美大島瀬戸内町郷土館での企画展、さらにギャラリートークまで発展したことです。
- 具体的な今後の目標：もちろん調査も継続しますが、これまでのデータの解析を進め、漂着物学会で発表、さらに論文執筆までつなげていきたいです。

福島県飯舘村
- 耕作放棄地の
土地活用に向けた漆の
試験栽培、苗木生育のための
圃場整備活動佐々木 亨 (特定非営利活動法人ウルシネクスト)
秋田県

生してきた日本人の生活と深く関わってきました。現代においてもプラスチックに代わる代替素材など、様々な分野で活用できる可能性を秘めていることから、国連が主導するSDGs(持続可能な開発目標)に合致した、村の新たな産業に育てられるのではないかと考えています。

まずは試験栽培によって飯舘の地でしっかりと育つのが、生育環境を整え圃場整備を行い、会津若松の有志団体と連携しながら、農地の回復と国産漆の6次産業化を目標に取り組んでいます。

上：国産漆の6次産業化を目指して始めたウルシの試験栽培
下：今年7月の漆畑の様子。育ってきた奥のウルシ苗を間引き、手前側のエリアを使用し適正間隔に植え替えを行う予定

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成金で購入させていただいた草刈り機で、圃場の一部草刈り(試運転)を行いました。省力化、効率化に大きな効果がありました。
- 具体的な今後の目標：会津若松の有志団体と連携して苗木の間引きや植え替え作業を行い、適正本数にして生育環境を整えた後に、本栽培に向けての作業効率の検証等を行う予定です。

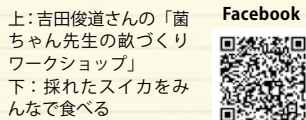


炭素循環型農業による 生きものの 保全・再生の拠点づくり

肥後貴美子（熊野の森もうおかスタイル）
神奈川県

東日本大震災と福島第一 原発事故を契機に、エネルギーと食を地域で考える活動を行っています。耕作放棄地だった土地を「コミュニティ農園」にして3年。農業従事者の高齢化により農地を手放す人が増え、生きものの生息地が資材や残土置き場に替わり、失われるスピードが年々早くなってきた。を感じます。

農園の約半分の土地に炭素循環型農業を取り入れ、枯れた竹や枝などの炭素素材を畝に入れ微生物の力で野菜を育てています。不耕起で無肥料、無農薬、刈った草はマルチとして利用。炭素素材



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：菌ちゃん（吉田俊道）先生の講演会と畝づくりのワークショップを行ったことで、関心を持つ地域の方々とながれたこと。
- 具体的な今後の目標：野菜の収量を増やすこと。自家採種。循環を学ぶ仲間づくり。



自然界と共存し、 自然界を保全していく 町づくり活動

佐藤東児（小泉ユニバーサルビーチユニット）
宮城県



ビオトープ清掃集合写真（2023 年 10 月）

あることも小泉地区の人はほぼ知らない状態です。小泉は、海・山・川・ビオトープ全てがある素晴らしい地区なので、住み続けられる町づくりをしていくには、自然界との共存と保全は必須です。

今回、ビオトープ清

当団体活動地区の宮城県気仙沼市本吉町小泉地区は東日本大震災により、町は勿論、海岸線・川全て地形が変わるほど崩壊しました。住民達は自宅再建に追われる中、新たな小泉地区には県内最大高14・7mの防潮堤が建設され、住民同士・住民と行政での大きい波紋が起きました。一方で防潮堤裏に動植物専門の教授の意見を取り入れながら、人工的なビオトープもつくられました。震災復興にもめどが立ち、これからというときに新型コロナウイルスが猛威をふるい、住民達や地区内には重たい空気が漂っていました。当団体は、地区行事がおこなえないそんな時だからこそ、小泉にある自然界の魅力を知る時間にあてようと考えました。魅力の例を言うと、大きい波紋が起きた県内最大高の防潮堤は、探鳥会をした際に、鳥が逃げない距離だということがわかりましたし、ビオトープが

掃を3回・津谷川清掃を2回・探鳥会を3回実施しました。最初は参加人数が少なく苦戦しましたが、回を重ねるごとに1人2人と増えてきましたし、私達の活動を知って、ビオトープをつくった宮城県気仙沼土木事務所様もこれからの管理方法なども含め参加してくれました。住んでいる場所の近くにこんな場所があったんだね、望遠鏡で見る鳥は迫力がありハマリそう、などと皆言ってくれます。この活動をコツコツと続け発信していき、住民達が自然環境を意識して行動していくことが出来れば、この先の小泉地区は【自然界と共存している町】になると考えています。

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：県や市といった行政との連携・協力が得られたこと。官民一体でこれからも実施していきます。
- 具体的な今後の目標：自然界と共存している、住み続けられる素晴らしい町を目指す上で、まずは全住民配布の「小泉地区で見られる鳥の種類・植物の種類・底生生物の種類・魚の種類」をまとめたMAPなどのパンフレットを作成することです。

埼玉西部を流れる 高麗川並びにその流域の 水生生物の調査並びに 川での子供たちへの 環境教育活動

伊藤教行（NPO 法人 奥武蔵ピースラボ 理事）
埼玉県

私共NPO法人奥武蔵ピースラボでは、富士フィルム・グリーンファンド様の助成金のご支援を受けて2022年度より日高市の子どもの夏休み体験企画である「ひ・まわり探検隊」で、高麗川でのガサガサ体験を企画して、2022年に1回、2023年には2回、小学生を対象に1回の企画で15名の子ども達に川でのガサガサを体験して頂きました。富士フィルム・グリーンファンド様には、子ども達が使用するライフジャケット購入のご支援を頂きました。

この企画では、埼玉県日高市を流れる清流、荒川水系の高麗川の中流域の清流橋付近において、手網を使用して川の水生生物を捕獲し、観察、同定を行うもの



上：ひ・まわり探検隊
下：ひ・まわり探検隊活動の様子



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：不足していた消耗品類の購入が可能となり、より安全・確実に活動が可能となった。
- 具体的な今後の目標：活動を実施している埼玉県の奥武蔵エリアに密着した、生物多様性を維持・保存する活動を深耕していきたい。

であり、私達NPO法人奥武蔵ピースラボの環境部会のメンバーと、ボランティア参加の市内の大学生、特別支援学校の先生、市役所の職員、一般市民が子ども達の水生生物捕獲の指導や捕獲した水生生物の同定（その生物の種類の特長）を実施、観察後川に放流する活動で、参加した子ども達は、手網を使用して捕獲した、魚類ではカジカ、カワムツ、ドジョウ、ギバチなど、ヌマエビやスジエビ、ヤゴ、トビケラやクロカワムシなどの水生昆虫を笑顔で観察しました。夏休みの忘れられない思い出となりました。

淀川のワンドに 生息するイタセンパラを はじめとした在来魚類の 保全活動と地域に根ざした 環境教育活動

三橋雅子（城北水辺クラブ / 大阪工業大学工学部）
大阪府

城北水辺クラブは、大学の目の前にある淀川と、そのワンドに生息する絶滅危惧種イタセンパラの保全を目的として結成された大阪工業大学の公認クラブです。「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」に所属し、イタセンパラが生息するワンドで定期的に地引網を引いて、外来魚（主にブルーギルとオオクチバス）の駆除と、在来魚の調査を主体的に行っています。

淀川のイタセンパラは2006年に野生絶滅しており、2013年に飼育個体500匹が放流されました。2018年春には2万匹を超える稚魚が確認されましたが、翌年以降、稚魚の数が減少し、2022年の春には80個体しか確認されておらず、大変厳しい状況です。

2023年は城北ワンドに加えて、上流の庭窪ワンドでも8日間の地引網による活動を行いました。調査結



上：ワンドで力を合わせて地引網を引いているところ（2023 年 2 月）
下：小学校のワンドの生物観察会で採集した生物を解説中（2022 年 11 月）



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：電動船外機付き小型ボートと地引網を購入し、駆除活動の実施と調査・研究をする環境が整った。
- 具体的な今後の目標：活動を継続し、淀川の生態系や生物の生息環境の調査をすること、生物の現状を近隣住民の方と共有する場を作りたい。

果は学会等で発表しています。さらに、誰でも参加できる外来魚駆除釣り大会（5月）の開催や、近隣の小学校でワンドの生物の観察会（11月）を実施するなど、淀川に生息する希少な生物や外来魚の問題などを知ってもらう活動も行っています。

今後も活動が続いて、イタセンパラをはじめとした在来魚が淀川に普通に生息できるようにすること、日本第二の大都市大阪にある自然について地域の皆さんをはじめ、多くの人に知ってもらいたいです。

耳石微量元素分析を用いたニホンウナギの
ハビタット間移動と堰との
関係の解明久米 学 (京都大学フィールド科学
教育研究センター)
和歌山県

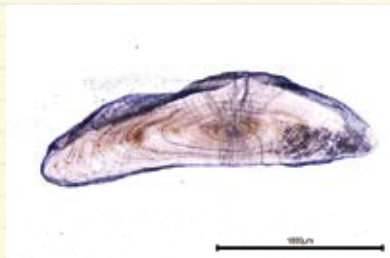
くらのいの全長の時期に“堰を登るのか”を調べる手法が確立できた。現在残りの4河川での分析を進めている。今後、この手法を多くの堰で適用し、堰の構造(堰高・壁面構造・魚道の有無など)に踏み込んだ解析を行う。既存の堰を撤去するのは、利水・治水や費用対効果の観点から現実的ではない。そのため本研究の成果は、天然ウナギの保全と増殖を視野に入れた河川管理(堰の建設や改修)方策の検討に貢献できると考える。

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：本研究の最大の進展は、耳石の年齢査定とSr:Ca比分析を用い「どのくらのいの全長の時期に堰を登るのか」を調べる手法が確立できたことである。
- 具体的な今後の目標：今後、天然ウナギの保全と増殖を視野に入れた研究を継続していきたい。

ウナギ属魚類は、国内外を問わず、絶滅の危機に瀕しているため、その保全のための研究は数多く行われている。中でも、堰のような比較的小規模な河川横断工作物は、ニホンウナギの移動阻害の原因となり、その影響評価は急務である。そこで本研究では、潮止堰に着目し、耳石の年齢査定とSr:Ca比分析を用いて「ニホンウナギが生活史の中で、どのくらのいの全長の時期に、“どのくらのいの高さの”堰を登るのか」を調べ、堰の高さとそれを超えられる本種の全長との関係を解明することを目的とした。

これまで5つの河川で試料を採集し、そのうちの1河川で分析を行った。その結果、耳石の年齢査定とSr:Ca比分析を用い「どの



上：ニホンウナギの耳石切片。青丸が耳石の核、黄色がエルバマー、赤が年輪
下：福岡県柳川市でのニホンウナギ採集(2023年2月)

ニホンスッポンと
チュウゴクスッポンの
交雑実態の解明ならびに
交雑個体の検出法の確立桑原紗香 (三重大学生物資源学研究所)
三重県

A分析により日本各地におけるニホンスッポンと外来スッポンの交雑状況を調べてきました。その結果、中部・近畿地方においては各地でニホンスッポンとチュウゴクスッポンの大規模な交雑が生じており、この交雑が生じた時期は何れも比較的古いことが判りました。ニホンスッポンと外来スッポンの交雑は養殖目的のため1960's 80年代に大陸から持ち込まれた外来種が原因であり、私は日本の固有種の保護だけでなく生物多様性を守る義務があると考えています。本研究がそのための一歩となるよう今後も研究に精進する次第です。

上：実験室でのサンプルの処理
下：研究対象種であるスッポン

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：本助成により日本各地のサンプル入手とDNA分析が可能となりました。
- 具体的な今後の目標：全ゲノム解析を行う事により精度の高い交雑状況の推定を行うと共に、ニホンスッポンと外来スッポンの識別手法の確立を行う予定です。

淡路島における
シロチドリの生息・
営巣状況の調査および
保全対策の実施と検証原 彩葉 (淡路島ちどり隊)
兵庫県

チドリの営巣地である砂浜に多くの人が踏み入るようになっていきます。そこで「淡路島ちどり隊」では、砂浜の一部に保護エリアを設け、営巣の保護に取り組んでいます。人か鳥か、という極端な選択肢ではなく、共存できる方法を探っている真最中です。保全への理解を広めるのは難しいことですが、「シロチドリを守ることは海の環境を守ることに直結し、同時に、島のシンボルを守っていくことにもつながる」ということを地元の方々にお話させていただきながら、今後も調査研究に取り組んでいきたいと思っています。

上：淡路島東浦のシロチドリ
下：淡路島ちどり隊活動の様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：島内9か所において月1回以上の定期的な調査を実施することが出来たことで島内全体の営巣状況を知ることができました。
- 具体的な今後の目標：調査結果をまとめ淡路島内におけるシロチドリの生息状況の基礎データを作成するとともに、最善の保全方法を立案・実施できるようにしたいです。

広島県における
空気中の環境 DNA を
指標にした森林野生
哺乳動物の生息モニタリングと
その応用に関する研究西堀正英 (広島大学大学院統合生命科学研究科 /
大学院スマートソサイエティ実践科学院)
広島県

のニホンリスが食したアカマツ球果を採取し、アカマツ球果に付着したニホンリスDNAを抽出でき、それらのニホンリスが中国山地西部の個体群に属することも明らかにでき、広島在来のニホンリス生息をモニタリングすることができた。広島県において一時絶滅に瀕したニホンリスをモニタリングすることがネイチャーポジティブの第一歩であり、豊かな自然を回復し、このようなアクションが生態系の具体的な保全、保護に直結、実現に繋がるものと思われる。

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：広島県において絶滅種であったニホンリスの生息をモニタリングし、動画に記録した。
- 環境DNAのみならず環境RNAの検出に成功した。
- 具体的な今後の目標：ニホンモモンガやヤマネなど西中国山地で絶滅が危惧されている夜行性哺乳類をeDNA法の特徴を活かしてモニタリングする。
- 森林野生哺乳動物の生息する時期を、環境DNAと環境RNAをともに検出することで推定することができるシステムを構築する。



上：広島市安佐動物公園ツキノワグマ舎前でのeDNA回収実験の様子
下：広島県庄原市で撮影できたニホンリス



私たちは、近年減少傾向にある野生送粉者の保全のために都市緑地をポリネーターガーデンとして有効活用するための研究をしています。野生送粉者の保全は、野生植物種の個体群の維持から農業生産での送粉者利用に至るまで、送粉サービスを介して私たちの生活にも関わる実は身近な環境問題の一つです。特に、都市化は野生送粉者の減少の主要因であることから、都市緑地にポリネーターガーデンを創出することは、人間活動により消失した自然環境の機能を都市域にて代償させるグリーンインフラとしての有益な価値を持ちます。

自主的な事業 ① 未来のための森づくり

2023年度、公益信託富士フィルム・グリーンファンド（以下、「FGF」とする）は、次の4つの事業を展開いたしました。これからも自然環境の保全に役立つ幅広い事業を各方面のご協力をいただきながら進めていく所存です。一層のご支援をお願いいたします。

② 緑のための支援事業

より多くの人々にFGFへの理解を深めていただくために、写真展やシンポジウムなど、さまざまな活動をしてきました。「自然観察路コンクール」は1984年から実施しています。2023年度には通算40回目のコンクール開催となりました。本誌では今年度の受賞作品を紹介するとともに、FGF 40周年を記念して、編集担当が過去の受賞者への取材を行いました。詳しくは本誌28ページからをご覧ください。



助成事業 ③ 緑とふれあいの活動助成 ④ 緑の保全と活用の研究助成

1年間、もしくは2年間の身近な自然とのふれあい活動や自然環境保全のための調査研究に対する助成です。本年度は活動助成6件、研究助成5件の計11件が助成対象に決定されました。2023年度の助成先の紹介は76～77ページをご覧ください。

東京都心域の都市緑地を活用したポリネーターガーデンの創出と技術的指針の検討

堀内勇寿（国立科学博物館筑波実験植物園）
東京都

私たちは、近年減少傾向にある野生送粉者の保全のために都市緑地をポリネーターガーデンとして有効活用するための研究をしています。野生送粉者の保全は、野生植物種の個体群の維持から農業生産での送粉者利用に至るまで、送粉サービスを介して私たちの生活にも関わる実は身近な環境問題の一つです。特に、都市化は野生送粉者の減少の主要因であることから、都市緑地にポリネーターガーデンを創出することは、人間活動により消失した自然環境の機能を都市域にて代償させるグリーンインフラとしての有益な価値を持ちます。



上：トラップ設置の様子（自然教育園）
下：皇居域や自然教育園における採集の様子



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：今回の助成により、今までは断念せざるを得なかったDNA分析手法を導入できたことが大きな進展です。
- 具体的な今後の目標：実験系の一部では苦戦している部分を解消して、普及啓発に向けた学会発表を実施することが今後の目標です。

教育園において、ポリネーターガーデンの創出に有益な条件を模索するために、送粉昆虫（特にハナアブ類）の体表の付着花粉等のDNAを解析し、約200個体のハナアブから100種を超える餌資源植物の存在を明らかにしました。生物保全や送粉サービスの抱える問題の解決に、多くの人々にとって最も身近な都市緑地を有効活用できるため、社会実装性が高く普及啓発のしやすい内容です。身近な都市の自然からネイチャーポジティブへ貢献するための第一歩になるように、研究を進めていきたいと考えています。



Nature Positive

ネイチャーポジティブ



2024年度も助成申請をお待ちしています！

応募の締め切り **2024年5月7日(火)**

2024年度の活動・研究助成の申請は2024年3月1日より受付を開始いたします。応募要項をご希望の方は、ハガキまたはファクスに住所・氏名・電話番号・研究あるいは活動助成の別を明記の上、下記宛てにご請求ください。また、一般財団法人自然環境研究センターのウェブページ (<http://www.jwrc.or.jp/>) から当該文書をダウンロードすることができます。

〒130-8606
東京都墨田区江東橋三丁目3番7号 江東橋ビル
(一財) 自然環境研究センター内
公益信託富士フィルム・グリーンファンド事務局
TEL. 03-6659-6310 (平日10:00～17:00)
FAX. 03-6659-6320



2023年度の助成先をご紹介します。

■緑の保全と活用の研究助成

大雪山国立公園の利用者とエゾナキウサギの良好な関係の構築のための自然・社会科学研究
渡辺 遼二（北海道大学大学院地球環境科学研究院） 北海道

愛らしさで人気の高い希少種ナキウサギは、公園利用者からのストレスに悩まされているのだろうか。公園利用者への聞き取りと自動撮影カメラの映像の解析からナキウサギの行動の変化を分析し、公園利用者との良好な関係を築くことを目指した提言を行う。



調査の様子

■緑の保全と活用の研究助成

山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査

野口 亮太（NPO 法人流域環境保全ネットワーク） 三重県

ミナミアカヒレタビラとヤリタナゴは日本の様々な地域で国内外来種として確認されており、移入先での同種の地域固有の遺伝子のかく乱への影響が懸念されている。この2種の自然分布域のうち未調査の山陰・北陸地方について、生息状況及び遺伝のかく乱や、地域固有性の実態を解明する。



ミナミアカヒレタビラ

■緑の保全と活用の研究助成

利根川沿いに生息する生物は交雑によって多様化しているか？

石井 康人（東北大学理学部） 宮城県

過去に流域を大きく変えてきた利根川が、その流域の生物の種分化に及ぼす影響について、陸貝のミスジマイマイとヒタチマイマイをモデルとして、両種とその交雑集団を遺伝的・形態的に解析することで利根川の流路変化による多様性形成を実証し、流域の生物多様性の適切な評価の確立を目指す。



調査の様子

■緑の保全と活用の研究助成

環境保全機能と集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続条件

野田 岳仁（法政大学現代福祉学部） 東京都

日本で200万人が使用する、小規模集落水道。その存続と水源林の管理を通じた里山の生態系保全の意義について、福島、新潟、山梨各県の集落への聞き取り調査から明らかにし、環境保全機能および集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続可能な政策を提言する。



小規模集落水道の水汲み場

■緑とふれあいの活動助成

猪名川河川域の植物調査（絶滅危惧植物の保全・増殖および昆虫が利用する植物のフェノロジーの製作）

大阪府立園芸高等学校 ハニービーサイエンスクラブ 大阪府池田市

クラブ活動で養蜂を行いながら、セイヨウミツバチとその利用植物について継続的に調査を行っている。ミツバチが巣に持ち帰る花粉を分析することで蜜源植物を特定し、蜜源植物の開花フェノロジーのカレンダー作成を目指す。蜜源植物として絶滅危惧種の栽培にも取り組んでいる。



保護増殖植物（カワラサイコ）の播種

■緑とふれあいの活動助成

VRも活用した石狩川流域の湿地環境保全・利活用の普及活動

石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク 北海道札幌市

石狩川流域に点在する湿地の保全を通じて地域を活性化し、人と自然が共生する社会を目指す団体。生物調査や地域文化の体験会など様々な活動を通じて湿地の魅力や大切さを伝えている。新規にVR空間に各地の湿地をつくり、人が集えるプラットフォームとして活用する予定。



湿地 VR 体験会

■緑の保全と活用の研究助成

越冬環境の泥と水の深さがサドガエル幼生の越冬成功と翌春以降の成長・発生に与える影響：江やビオトープを重視した保全対策の改善に向けて
高津 邦夫（新潟大学佐渡自然共生科学センター） 新潟県

2012年に新種とされたサドガエルは、幼生（オタマジャクシ）が泥の中で越冬する性質をもつ。市民にとっても身近かつ希少な佐渡の固有種として、保全のために幼生が越冬する環境づくりが行われているが、さらなる保全対策の強化に向けて、保全のカギとなる越冬の好条件を探る。



サドガエルのオタマジャクシ

2023年度の助成先をご紹介します。

■緑とふれあいの活動助成

「森の忍者・ムササビ」観察会及び生息調査

矢部郷自然観察会 熊本県山都町

「自然を知り、自然を学び、大切な自然を未来に残す」ことを目的として、地域住民を対象に野生生物の調査や観察会などの活動を37年間続けている団体。熊本県の準絶滅危惧種ムササビの生息状況の解明と、観察会を通じた環境保全への理解向上を目指す。



観察会

■緑とふれあいの活動助成

「根尾川むいむいの森」ユースセンターの子ども自身による自然学校・拠点整備

一般社団法人よだか総合研究所 岐阜県本巣市

保護者や地域住民の協力を受けつつ子ども自身が運営と拠点づくり、管理を行うことで、里山文化の継承の機会と場を提供する。子どもたちが身近な自然の中で自主的に活動することを支援して、子どもたちの居場所の創造と実践的な自然環境保全を実現することを目指す。



子ども自身の自主的な活動

■緑とふれあいの活動助成

佐賀の田舎から心を育み、生きる力を養う自然体験活動を届ける

秀島 彩女 佐賀県唐津市

自宅の庭を解放して自然体験や農業体験のイベントを行い、体験や人との交流を通じて「心の豊かさ」や「生きる力」を育む機会を創出する。助成を受けて、月1回の体験会だけでなく、サマースクールやキャンプなどのお泊りイベントを充実させていく予定。



そめん流しのイベント

■緑とふれあいの活動助成

子どもたちの日常の中に自然を取り入れるきっかけを与える事業

一般社団法人 Camp 福岡県朝倉市

自然とふれ合い自然から学ぶ機会を提供することで、地域の自然の現状を知ってもらい、「豊かな自然を未来につなぐ」「自然とのかかわり方を考えるきっかけを与える」ことを目的として活動する団体。災害にあった川、山での防災教育を含めた学びと遊びを通じて、災害を乗り越える力を養うことを目指す。



9月に実施した「川を知る、川で遊ぶ」



助成応募内訳

活動助成応募内訳

森林を場とした活動.....14件
里山を場とした活動.....6件
田畑・農村環境を場とした活動.....2件
河川・海域・池・湖沼を場とした活動.....9件
その他.....2件

研究助成応募内訳

動植物（地域生態系）の基礎的な調査・研究.....21件
緑地の効用・保全に関する研究.....3件
その他.....2件



FGF助成一覧

1984年～2023年までの220件のFGF助成先をご紹介します。

※団体名・所属名等は助成当時のものです。

●1984年度

- 1 オオムラサキの森づくり
●嵐山町立菅谷小学校PTA
●埼玉県 ●600万円
- 2 自然を守り生かす青少年の森づくり
●黒石市青少年の森をつくる会
●青森県 ●600万円
- 3 社寺林の保全・管理に関する法学的研究
●野村好弘（東京立大学）
●400万円
- 4 リスのいる森づくり
●高橋啓二（千葉大学）
●千葉県 ●398.5万円

●1985年度

- 5 子供たちのフォレスト・ファーマーシング
●興禅寺
●長野県 ●578.1万円
- 6 屋敷林の保全と活用
●今米緑地保全会・川中熙子
●大阪府 ●360万円
- 7 明神地域の保全・活用に関する生態学的研究
●牧野徳太郎（(財)みどりのまちながわ県民会議・足柄上地区推進協議会）
●神奈川県 ●400万円
- 8 知床の大型野生動物の生態と自然教育への活用に関する研究
●中川元（斜里町立知床博物館）
●北海道 ●400万円

●1986年度

- 9 自然と芸術の森づくり
●創造の森子ども美術館
●大阪府 ●500万円
- 10 ドングリー粒運動による広葉樹林の育成
●ドングリの会
●岐阜県 ●591万円
- 11 歴史的居住環境の保存と利活用に関する研究
●多田壽夫（観光資源保護財団）
●長野県 ●380万円
- 12 伝統的な人里環境の生態学的研究
●田口正男（神奈川県立橋本高校）
●神奈川県 ●132.3万円

●1987年度

- 13 ギフチョウが舞い、サギ草の咲き乱れるコウヤマキの森づくり
●自然と趣味に生きる会
●島根県 ●400万円
- 14 自然史博物館「嵐山自然と文化の森」の保全と活用
●旭川自然史懇話会
●北海道 ●593万円
- 15 自然の宝庫・桶ヶ谷沼を生かしたまちづくり
●桶ヶ谷沼を考える会
●静岡県 ●200万円
- 16 飛騨山脈の自然生態調査と一般登山活動での自然学習のあり方
●小野木三郎（高山短期大学・飛騨自然博物館）
●岐阜県 ●326.6万円
- 17 緑と人間の親和性を高める環境絵本づくり
●延藤安弘（熊本大学）
●397.5万円

●1988年度

- 18 「いろいろの里」生活原体験及び自然観察会
●太平宿を残す会
●長野県 ●500万円
- 19 雑木山から生活文化を問い直す
●杉の会
●滋賀県 ●500万円
- 20 野外博物館「山の子村」の保全と活用
●内山慎二
●長野県 ●200万円
- 21 「市民による雑木林の保全・管理」のテキストづくり
●重松敏則（大阪府立大学）
●大阪府 ●400万円
- 22 神社の社叢における神樹の調査研究
●谷川健一（日本地名研究所）
●神奈川県 ●400万円

●1989年度

- 23 寒風山「風雪の森」づくり運動
●「風雪の森」をつくる運動実行委員会
●秋田県 ●400万円
- 24 花いっぱい鳥いっぴいの森づくり
●エコシステム
●熊本県 ●400万円
- 25 荒廃したサンゴ礁を復元するサンゴ移植活動
●八重山サンゴ礁保全協議会
●沖縄県 ●400万円
- 26 トロッコ道に見る霧島連山百年の変遷について
●川平和美（鹿児島大学）
●鹿児島県 ●130万円
- 27 裏磐梯湖沼群の生態と自然保護教育への活用に関する研究
●星一彰（福島県立福島東高校）
●福島県 ●400万円

●1990年度

- 28 「望ヶ原天然林」を生かした自然に親しむ活動
●利賀の自然を守る会
●富山県 ●400万円
- 29 見沼カムバックふるさとプラン
●(財)埼玉県野鳥の会
●埼玉県 ●400万円
- 30 「帯広の森」野生動物とのふれあいの場づくり
●エゾリスの会
●北海道 ●400万円
- 31 イトウのずめる森づくり
●小野有五（北海道の森と川を語る会）
●北海道 ●400万円
- 32 ホタルの生息する人里の水系環境保全と人間活動の調和
●大場信義（横須賀市自然博物館）
●神奈川県 ●400万円

●1991年度

- 33 奥球磨山地に「人間の森」をつくる
●人吉・球磨自然保護協会
●熊本県 ●280万円
- 34 ネイチャートレイルの設置活動から村の自然のサンクチュアリー化運動へ
●(財)育てる会
●長野県 ●700万円
- 35 谷津干潟保全対策の研究
●石川敏雄（千葉大学）
●千葉県 ●382万円
- 36 糸島地方の自然解明とその保護及び一般への啓蒙
●若宮義次（糸島自然研究会）
●福岡県 ●400万円

●1992年度

- 37 農山村エコミュージアムづくりによる都市・農山村の交流
●自然文化誌研究会
●東京都 ●600万円
- 38 紀伊半島沿岸におけるウミガメの調査及び保護活動
●紀伊半島ウミガメ情報交換会
●和歌山県 ●600万円
- 39 御前・釈迦岳ブナ・シオジ林の自然とその保全について
●小野孝（郷土日田の自然調査会）
●大分県 ●392.5万円
- 40 湧水に生息する生物の生態研究
●森誠一（京都大学）
●岐阜県 ●400万円

●1993年度

- 41 森は海の恋人
●牡蠣の森を暮らう会
●宮城県 ●520万円
- 42 森・人・生きもの・地球を緑の輪で結ぶ京都大原野の体験森づくり
●環境市民基金設立準備会
●京都府 ●515万円
- 43 坪井川遊水池における生態系の復元
●甲守崇（坪井川遊水池研究会）
●熊本県 ●300万円
- 44 十津川村地方における伝統的養蜂の調査研究
●宅野幸徳（島根県私立江の川高校）
●島根県 ●104.4万円
- 45 宮古諸島におけるサシバと緑と人間の親和性を高めるための基礎研究
●久貝勝盛（沖縄県立博物館）
●沖縄県 ●293万円

●1994年度

- 46 ジュンサイ再生保全活動による緑と生きものの復元
●専菜池にジュンサイを残そう市民の会
●千葉県 ●300万円
- 47 子供達と水生生物との共生をめざす湿地「たんぼ水族館」の保全と利用に関する研究
●湊秋作（熊野川小学校）
●和歌山県 ●140万円
- 48 あなたにも出来る保全生物学「市民による絶滅危惧植物の保全研究のマニュアルづくり」
●井上健（長野県植物研究会）
●長野県 ●300万円

●1995年度

- 49 筑波山に炭焼きの里づくり
●自然生クラブ
●茨城県 ●260万円
- 50 コアジサシの生態調査及び保護活動と水辺環境の復元
●水鳥研究会
●千葉県 ●170万円
- 51 生活光とホテルの共存について
●中川七三郎（新潟県ホテルの会）
●新潟県 ●130万円
- 52 オオサンショウウオの生息状況調査
●大沼弘一
●兵庫県 ●170万円

●1996年度

- 53 市民参加型緑地保全活動の実践及び推進
●緑地環境保全フォーラム実行委員会
●神奈川県 ●240万円
- 54 「新タンポポ地図」の作成とその環境教育への応用
●渡邊幹男（愛知教育大学）
●愛知県 ●180万円
- 55 高知県宇佐竜蟹ヶ池における水湿植物の保全に関する生態学的研究
●石川慎吾（高知大学）
●高知県 ●230万円
- 56 学校緑地にビオトープを導入するための基礎的研究
●中村和幸（大阪府立城山高校）
●大阪府 ●65万円

●1997年度

- 57 里道の修復による赤目の里山の保全
●赤目の里山を育てる会
●三重県 ●137万円
- 58 手づくりの湿地や水辺の復元活動
●遠州自然研究会
●静岡県 ●130万円
- 59 多摩ニュータウン19住区の農業公園化構想
●由木の農業と自然を育てる会
●東京都 ●210万円
- 60 学校緑地にビオトープを導入するための基礎研究
●中村和幸（大阪府立城山高校）
●大阪府 ●65万円

●1998年度

- 61 「体験の森づくり」活動
●ものべ体験の森クラブ
●高知県 ●186万円
- 62 草原・里山の維持管理技術の啓発と実践による半自然植生の保全
●緑と水の連絡会議
●島根県 ●175万円
- 63 森林活動による精神発達障害者の療育効果に関する研究
●上原巖（精神発達障害者更正施設「親愛の里松川」）
●長野県 ●126.6万円
- 64 小動物の利用環境として都市残存林を評価する手法の研究と生態ガイドブックの作成
●渡辺修（さっぽろ自然調査館）
●北海道 ●159万円

●1999年度

- 65 農業体験教室「草の根農業小学校」の運営
●農業小学校をつくる会
●滋賀県 ●234.6万円
- 66 絶滅危惧植物ガシャモクの保全生物学的研究
●上原浩一（千葉大学）
●千葉県 ●182万円
- 67 ニホンザリガニの分布・生息環境とその保全に関する研究
●斉藤和範（旭川大学）
●北海道 ●146.3万円

●2000年度

- 68 野尻湖における水草帯の復元と環境教育
●野尻湖水草復元研究会
●長野県 ●244.2万円
- 69 スノーケリングによる藻場・海中林及びアマモ場を主体とした海中自然観察会
●南伊豆海洋生物研究会
●静岡県 ●157万円
- 70 豊かな里山を次世代に残すために
●宮原町里山クラブどんごろす
●熊本県 ●132万円

●2001年度

- 71 大町グラウンドワークによる上原ビオトープ創出事業
●フッパランドの会
●長野県 ●200万円
- 72 えひめあやめ指定地その周辺里山整備計画
●西浦えひめあやめ保存会 若林清利
●山口県 ●149.6万円
- 73 市街地緑地の種の保存と供給機能の研究
●田口正男（神奈川県立弥栄東高校）
●神奈川県 ●107万円

●2002年度

- 74 有明海および島原湾の底生生物データベース作成
●秋元和實（熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター）
●熊本県 ●290万円
- 75 多摩川中流域河床の「地層の野外観察」用の観察路と支援システムの構築
●松川正樹（東京学芸大学）
●東京都 ●200万円

●2003年度

- 76 林業スクール
●森づくり集団「里ネット」
●埼玉県 ●82.2万円
- 77 「やまんばの森」の「春の女神」保護活動
●NPO法人やまんばの会
●滋賀県 ●118.3万円
- 78 東京都府中市立 南白糸台小学校「水辺の学校プロジェクト」
●府中市立南白糸台小学校PTA
●東京都 ●212.2万円
- 79 沖縄県、慶長間諸島にみられる貴重な森林生態系の持続的保全と活用
●遠藤晃（科学技術振興事業団）
●沖縄県 ●237万円

●2004年度

- 80 子供達とヤマメの巣箱製作、設置、生態と生息する森林生態系の観察と記録
●芸北町自然保護レンジャー
●広島県 ●184万円
- 81 霧多布湿原ファンづくりのための木道修復活動
●特定非営利活動法人霧多布湿原トラスト
●北海道 ●100万円
- 82 金沢市とその近郊の農業用水の生物多様性維持機能を高めるための基礎的研究
●上田哲行（石川県農業短期大学）
●石川県 ●168万円
- 83 桂川・相模川水系におけるシジミ類の生息調査及び在来種マシジミの保存に向けた繁殖実験
●國原哲司（向上高等学校）
●神奈川県 ●193万円

●2005年度

- 84 研究者と市民の協働による里山の生物多様性保全のための活動及び調査
●金沢大学「角間の里山自然学校」
●石川県 ●156.8万円
- 85 田舎暮らしグラウンドワーク・ウスイロヒョウモンモドキの舞う蒜山高原自然再生事業
●真庭遺産研究会
●岡山県 ●170万円
- 86 瀬戸内海の干潟における貝類を中心とした環境指標生物の探索
●森千恵（岡山大学大学院）
●岡山県 ●137.3万円
- 87 環境教育機能を備えた学校林の生態管理システムの構築
●林田光祐（山形大学農学部）
●山形県 ●135.7万円

●2006年度

- 88 小網代の森保全推進のためのパトロール活動
●特定非営利活動法人 小網代野外活動調整会議
●神奈川県 ●224万円
- 89 里山と共に育つ学校の森づくり
一里山が育つ、里山と育つ、里山から育つー
●奈良教育大学付属中学校裏山クラブ
●奈良県 ●122.5万円
- 90 名古屋周辺における外来カメ類の現状調査と在来カメ類の保護・保全活動
●特定非営利活動法人 犬山里山学研究所
●愛知県 ●170.2万円
- 91 水田におけるゲンゴロウ幼虫の保全に関する野外調査研究
●大庭伸也（岡山大学大学院）
●岡山県 ●89.2万円

●2007年度

- 92 赤とんぼ全国調査
●全国トンボ市民サミット全国実行委員会
●静岡県 ●150.5万円
- 93 ニッポンバラタナゴを救う伝統的農業水管理法「ドビ流し」の効果
●特定非営利活動法人 ニッポンバラタナゴ高安研究会
●大阪府 ●147万円
- 94 日本におけるカキ礁生態系の研究と保全
●山下博由（貝類多様性研究所）
●神奈川県 ●201.6万円
- 95 都市的環境で在来種が外来種に駆逐される要因の解明
●松本崇（京都大学）
●京都府 ●139万円

●2008年度

- 96 公園管理と蜚の養殖
●倉淵はたるの会
●群馬県 ●10.2万円
- 97 湖北野田沼内湖の再生で動き出す琵琶湖のいのちプロジェクト
●特定非営利活動法人 旅するおさかなサポーター
●滋賀県 ●200万円
- 98 身近な地域・自然を学ぶ環境学習の教材化とプログラムの構築ー倉敷市水島地域を対象にー
●財団法人水島地域環境再生財団
●岡山県 ●100万円
- 99 ヒサカキの種子散布にかかわる生物間相互作用が三宅島の森林生態系回復に果たす役割
●阿部晴恵（財団法人日本モンキーセンター）
●愛知県 ●192.6万円



FGF助成一覧

1984年～2023年までの220件のFGF助成先をご紹介します。

※団体名・所属名等は助成当時のものです。

●2008年度

- 100 筑後川の支川・小石原川におけるアカザの生態
●鬼倉徳雄（九州大学大学院）
●福岡県 ●98.7万円
- 101 九重タデ原・坊ガツル湿原における火入れによる土壌環境改変の実態とその効果の検証
●伊豫部勉（北九州市立大学）
●福岡県 ●79.5万円
- 102 休耕田を利用した湿生植物群落の回復
●高野瀬洋一郎（新潟大学超域研究機構）
●新潟県 ●141万円

●2009年度

- 103 遊んで学ぶ里山体験
●ボランティアグループ「未来の家」
●兵庫県 ●119.9万円
- 104 栗山鳥の下自然公園・ムクロジの里ステップアップ事業
●特定非営利活動法人四街道メダカの会
●千葉県 ●186万円
- 105 カンキョウカガジカの生態研究とその保護対策について
●利賀飛翔の会（利賀河魚の会）
●富山県 ●63万円
- 106 奄美大島湯湾岳の野生絶滅植物リュウキュウアセビの復元に向けた遺伝解析
●瀬戸口浩彰（京都大学大学院）
●京都府 ●118万円
- 107 秋吉台の絶滅危惧植物の保護に向けたゾーニングのための基礎研究
●荒木陽子（秋吉台科学博物館）
●山口県 ●61万円
- 108 中央アルプス山麓の里山に生息する絶滅危惧種ミヤマシジミとヒメシジミの保全に関する研究
●中村寛志（信州大学農学部付属アルプス圏フィールド科学教育研究センター）
●長野県 ●147万円
- 109 京都・平安神宮内の池に生息するイチモンジタナゴの保護
●細谷和海（近畿大学農学部）
●奈良県 ●150万円

●2010年度

- 110 参加型フットパス・ツーリズムの振興による棚田・里山環境の保全とその活用
●NPO法人蔵野の棚田を守ろう会
●佐賀県 ●280.4万円
- 111 生駒市西畑地区の棚田・里山の再生と創造
●いこま棚田クラブ
●奈良県 ●54万円
- 112 スナメリから見つめる瀬戸内海
●牛窓のスナメリを見守る会
●岡山県 ●94.4万円
- 113 福岡市室見川におけるシロウオの産卵環境の解明と住民参加型の保全活動について
●伊豫岡宏樹（福岡大学大学院）
●福岡県 ●149.2万円
- 114 琵琶湖固有亜種とされるビワマスにおける遺伝的多様性の変化
●桑原雅之（滋賀県立琵琶湖博物館）
●滋賀県 ●135.3万円
- 115 昆虫類を指標とした都市近郊の里山の生物多様性評価手法に関する研究
●小池伸介（東京農工大学大学院）
●東京都 ●104.3万円

●2011年度

- 116 高校生・若者による埼玉県小川町での里山づくりと環境教育活動
●NPO法人共存の森ネットワーク
●東京都 ●145.2万円
- 117 MY大嵐山方式（会員ボランティア）による大嵐山の自然環境保全運動の仕組みづくり
●NPO法人白山しらみね自然学校
●石川県 ●66.8万円
- 118 牛耕復活による里山のたたずまい再生
●NPO法人環境の島研究室
●新潟県 ●117万円
- 119 「干潟生物の市民調査」手法による八代海のベントス相調査
●佐々木美貴（NPO法人日本国際湿地保全連合）
●東京都 ●175万円
- 120 東北太平洋沖地震津波による蒲生干潟周辺域の被害現況調査と海浜性生物の再定着プロセスの解明
●長島康雄（仙台市科学館）
●宮城県 ●278.6万円

●2012年度

- 121 大人も子どもも谷戸で楽しく自然体験
●津久井の自然を守る会
●神奈川県 ●35万円
- 122 伝統的循環型農業の復活と自然素材を活かした古民家再生によるツシマヤマメコと共生する村づくり
●ツシマヤマメコ共生村協議会
●長崎県 ●160万円
- 123 多摩川における外来魚調査及び外来種問題啓発活動
●NPO法人おさかなポストの会
●神奈川県 ●90万円
- 124 ラムサール条約登録湿地・伊豆沼・内沼の食物網における放射性物質の濃縮の評価
●嶋田哲郎（財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）
●宮城県 ●120万円
- 125 大分県指定天然記念物カマエカズラの繁殖生態と保全に関する研究
●小林峻（琉球大学大学院理工学研究科）
●沖縄県 ●110万円
- 126 野生鳥獣の放射能汚染が狩猟者の捕獲活動に与える影響
●上田剛平（兵庫県但馬県民局朝来農林振興事務所）
●兵庫県 ●185万円

●2013年度

- 127 3次元GISモデルを用いた八王子滝山里山保全地域の環境モニタリング活動
●NPO法人自然環境アカデミー
●東京都 ●150万円
- 128 日本に留学している大学生の中山間地域における日本文化体験プログラム
●早稲田大学社会医学研究室
●埼玉県 ●40万円
- 129 来浜者の踏圧がウミガメのふ化に及ぼす影響についての調査
●NPO法人屋久島うみがめ館
●鹿児島県 ●85万円

- 「家族で学ぼう 福島環境教育エコツアー」開催事業
●NPOアジア職業エコガイド・ウォーキング指導者協会
●福島県 ●58万円

- 石川県沿岸に生息する絶滅危惧種イカリモンハンミョウの生態解明と保全対策の検討
●柳井清治（石川県立大学環境科学科）
●石川県 ●103万円

- 北海道平野部における野生生物による防風林の利用状況に関する研究
●目黒文子（環境NGOカピウ）
●北海道 ●53.8万円

- 身近な自然体験の教育的効果の検証～多摩市内の里山環境を生かした教育実践の総合的調査～
●野田恵（東京農工大学農学部）
●東京都 ●110万円

- 「震災後の増田川から持続可能な地域社会へのアプローチ」～丘陵地から津波にのみ込まれた河口までの身近な自然を見つめ直す～
●大橋信彦
●宮城県 ●80万円

●2014年度

- 小笠原諸島、西島の森林再生
●NPO法人小笠原野生生物研究会
●東京都 ●100万円
- 愛子子どもの森の保全とふれあい活動
●森の応援団愛子ハグリッス
●宮城県 ●30万円

- ロープ魚礁とアマモによる生態系の創出活動
●NPO法人庄内浜を考える会
●山形県 ●45万円

- 鹿児島県出水市における保護ツルの臨床検査－野生復帰羽数の増加を目指した臨床研究－
●松鶴 彩（鹿児島大学 共同獣医学部）
●鹿児島県 ●85万円

- 琉球列島中部域における造礁サンゴの新規加入幼生の種多様性と遺伝学的集団構造に関する研究
●中村雅子（沖縄科学技術大学院大学）
●沖縄県 ●200万円

- 奄美諸島における希少野生植物の繁殖に関する生物相の基礎的研究
●前田芳之
●鹿児島県 ●190万円

- 東日本大震災の津波被災地における地域農業資源の保全に関する実証研究
●観山恵理子（東北大学大学院）
●宮城県 ●190万円

●2015年度

- 「多摩川のケヤキと共生する会」青梅市多摩川流域のケヤキの食葉性害虫からの救済と緑陰の維持
●たまあじさいの会
●東京都 ●120万円

- 「松代おやっこ村」魅力アッププラン
●松代おやっこ村
●新潟県 ●140万円

- 奈良県レッドデータブックに記載されている自生山野草の保全と管理
●里山の山野草を守る会
●奈良県 ●55万円

- 野焼きボランティアのための難燃性セッケン製作
●全国草原再生ネットワーク
●鳥根県 ●30万円

- 市民調査による岩手県の植物相の研究
●鈴木まほろ（岩手県立博物館）
●岩手県 ●95万円

- 希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ
●溝口 康（明治大学農学部）
●鹿児島県 ●160万円

- 対馬に生息する希少植物種を保全するための植生回復および栽培試験に関する調査研究
●東 浩司（京都大学大学院理学研究科）
●長崎県 ●110万円

- サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究
●田中 秀幸（鳥根大学）
●鳥根県 ●130万円

●2016年度

- 京都府立須知高等学校の「ウィードの森」の生態調査と里山の整備
●京都府立須知高等学校PTA
●京都府 ●170万円

- 名勝・重要文化的景観「おぼすて（田毎の月）」棚田の保全活動
●田毎の月棚田保存同好会
●長野県 ●90万円

- はぐくむ、つなげる、つたえる、まもる。谷津田の生きもののいのちのにぎわいとつながり
●特定非営利活動法人ちば環境情報センター
●千葉県 ●90万円

- 大淀川の絶滅危惧植物「タコノアシ」の保全活動
●NPO法人大淀川流域ネットワーク
●宮城県 ●34万円

- ドローンとVR技術を活用した里山ランドスケープのモニタリング手法の開発
●一ノ瀬友博（慶應義塾大学）
●神奈川県 ●110万円

- GPS首輪を用いた積雪地域におけるイノシシの行動特性
●山本麻希（NPO法人新潟ワイルドライフリサーチ）
●新潟県 ●110万円

- 遺伝情報を用いた絶滅危惧植物ヤチシャジンの野生集団の再生
●渡邊園子（広島大学大学院）
●広島県 ●100万円

- 外来アライグマの営巣特性調査と対策コスト削減のための巣箱型フナの開発
●池田透（北海道大学大学院）
●北海道 ●140万円

●2017年度

- 女川学びの森の整備と利活用促進
●NPO法人女川ネイチャーガイド協会
●宮城県 ●85万円

- 里山を活かしたこどもの遊び場と大人のコミュニティスペース
●土沢森あそびの会
●神奈川県 ●60万円

- 子どもたちによる里山再生プロジェクト
●南アルプス子どもの村中学校
●山梨県 ●100万円

- 豊田市の中山間地を舞台とした多世代参加型の自然とのふれあい活動
●豊田高専ドミタウン実行委員会
●愛知県 ●40万円


- 東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動
●東京藝術大学キャンパスグランドデザイン室
●東京都 ●160万円

- ニホンイシガメの保全を目的とした生活史の解明
●小賀野 大一（東邦大学理学部）
●千葉県 ●165万円

- 知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究
●下鶴 倫人（北海道大学大学院）
●北海道 ●145万円

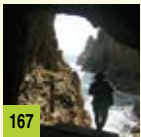
- 石狩海岸における希少アリ類・海浜植物・外来カエル類の相互関係に関する研究
●吉田 剛司（酪農学園大学）
●北海道 ●95万円

● 2018 年度




大人も子ども楽しく安全に自然体験が楽しめるガイアの森づくり

●NPO 法人 ガイア自然学校とやま
●富山県
●150 万円




みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究

●特定非営利活動法人 みちのくトレイルクラブ
●宮城県
●200 万円




豊北の水と生態系の研究・下関北高協同～粟野川流域図作成を原点に～

●北高夢ロード実行委員会
●山口県
●50 万円




海岸の自然観察を通じてマイクロプラスチックの危険性を学ぶ

●特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌビーオー
●静岡県
●60 万円




伊豆諸島青ヶ島の絶滅危惧種が生育する噴気孔原群落の保全にむけた基礎研究

●能登の森里海研究会
●東京都
●50 万円




天然記念物ミヤコタナゴの再導入等の候補地の探索および生息域の再生手法の検討

●鈴木規慈（三重大学大学院）
●千葉県
●150 万円




網走市こまば木のひろばにおけるエゾモンガの生態調査

●後藤ひとみ（東京農業大学）
●北海道
●30 万円



巨樹・名木とそれを取り巻く地域社会における生態系サービス及びEco-DRR 機能の定量的評価


●宇野宏司（神戸市立工業高等専門学校）
●兵庫県 ●70 万円



岩手県の砂浜植生再生活動を通じた環境教育プログラムの開発

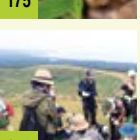
●島田直明（岩手県立大学）
●岩手県
●90 万円

● 2019 年度




浅間山系におけるミヤマシロチョウの保全活動と生態調査

●浅間山系ミヤマシロチョウの会
●長野県
●83 万円




男鹿の自然にふれあい生きる力を身につけよう!多世代参加の自然体験プロジェクト

●子育てカフェ・にこりーフ
●秋田県
●42.3 万円



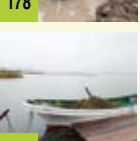
多摩丘陵に残された里山と古街道の歴史環境遺産を保護し、自然景観の維持と活用に貢献する

●歴史古街道団
●東京都
●120 万円



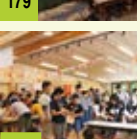
球磨郡相良村の湿地再生及びそれに係わる地域連携の構築

●球磨湿地研究会
●熊本県
●94.6 万円




七尾湾の環境改善と環境保全型農業の実現に向けた海藻草の回収活動

●能登の森里海研究会
●石川県
●38 万円




天然記念物コクガンの捕獲および GPS 送信機装着事業

●鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）
●宮城県
●130.8 万円



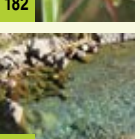
内部標識を用いた絶滅危惧種ギバチ (*Pseudobagrus takiensis*) の生活史調査

●早川拓真（宇都宮大学大学院）
●栃木県
●50 万円



広域分布型絶滅危惧植物の域外保全策確立に関する研究：ラン科カンランを例にして


●長澤淳一（京都府立大学京都地域未来創造センター）
●京都府 ●146.3 万円



自然豊かな河川と水害をもたらす河川に関する伝統知と環境・防災教育に関する実践研究


●落合知帆（京都大学大学院）
●和歌山県
●145 万円

● 2020 年度



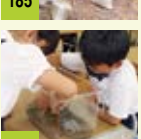
動植物とその生息環境の保全と安全登山のために

●雪神山を愛する会
●群馬県
●42.4 万円




「法」の字プロジェクト～低層植物の保護・再生による京都五山送り火の山の保全、そして、送り火行事の保存継承～

●公益財団法人松ヶ崎立正会
●京都府
●137.2 万円




絶滅危惧Ⅱ類「ヤマグチサンショウウオ」の棲息環境の保護・保存と小学児童の環境教育

●小串ヤマグチサンショウウオ保護・保存会
●山口県 ●26 万円




分布北限域におけるエダミドリイシの有性生殖法を用いた養殖・移植方法の確立に向けた活動

●NPO 海辺を考える しおさい21
●静岡県
●112.8 万円




外来種であるキノボリカゲのテリトリーを用いた駆除技術の開発

●保田昌宏（宮崎大学農学部）
●宮崎県
●100.2 万円



市民科学手法を活用した外来魚アメリカナマズの侵入前線検出


●吉田 誠（国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター）
●滋賀県 ●100 万円



西表島固有種ショキタテナガエビの絶滅回避に必要な保全遺伝学的研究

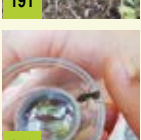
●今井秀行（琉球大学理学部）
●沖縄県
●144 万円

● 2021 年度




愛宕山てっぺんの森の「生態系管理」「環境教育拠点化」事業

●特例認定 NPO 法人 愛宕山てっぺんの森を守る会
●長野県
●150 万円




カヤネズミとヒナカマキリを含む地域の生物多様性保全プロジェクト in 竹尾緑地 2021

●環境ネットワーク「虹」
●福岡県
●45 万円




生物多様性保存型里山ビオトープの造成とその活用に関する事業

●NPO 法人自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会
●富山県
●95 万円




Lady go! 女性が中心となり、女性が育む「ガイアの森」里山再生モデル事業

●NPO 法人どんぐり 1000 年の森をつくる会
●宮崎県
●65 万円



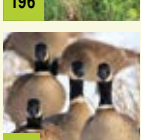
やながわ有明水族館を活用した幅広い世代への体験型環境教育の実施

●NPO 法人 SPERA 森里海・時代を拓く
●福岡県
●65 万円




ホトケドジョウ類の進化史の解明と保護施策の確立ーホトケドジョウ属の鑑成ー

●宮崎淳一（山梨大学教育学部）
●山梨県
●120 万円




七北田低地（仙台・多賀城）へのシジュウカラガン復元にに向けた基礎研究

●呉地正行（日本雁を保護する会）
●宮城県
●100 万円



三宅島におけるハチジョウススキの特徴ー自然と文化をつなぐ茅葺の復活をめざしてー


●黒田乃生（筑波大学芸術系）
●東京都
●120 万円



奄美群島における漂着生物学研究推進のための基礎的研究


●西村千尋（歩健学研究室）
●鹿児島県
●90 万円

● 2022 年度




福島県飯館村・耕作放棄地の土地活用に向けた漆の試験栽培、苗木生育のための圃場整備活動

●特定非営利活動法人ウルシネクスト
●福島県
●48.2 万円




炭素循環型農業による生きものの保全・再生の拠点づくり

●熊野の森もろおかスタイル
●神奈川県
●69.5 万円




埼玉西部を流れる高麗川並びにその流域の水生生物の調査並びに川での子供たちへの環境教育

●奥武蔵ピースラボ
●埼玉県
●25.8 万円




自然界と共存し、自然界を保全していく町づくり活動

●小泉ユニバーサルビーチュユニット
●宮城県
●55.1 万円




淀川のワンドに生息するイタセンバラをはじめとした在来魚類の保全活動と地域に根ざした環境教育

●城北水辺クラブ
●大阪府
●74.2 万円




耳石微量元素分析を用いたニホンウナギのハビタット間移動と堰との関係の解明

●久米学（京都大学フィールド科学教育研究センター）
●和歌山県 ●155 万円




ニホンスッポンとチュウゴクスッポンの交雑実態の解明ならびに交雑個体の検出法の確立

●桑原紗香（三重大学生物資源学部）
●三重県
●112 万円




淡路島におけるシロチドリの生息・営巣状況の調査および保全対策の実施と検証

●立田彩葉
●兵庫県
●97.1 万円



広島県における空気中の環境 DNA を指標にした森林野生哺乳動物の生息モニタリングとその応用に関する研究


●西堀正英（広島大学大学院）
●広島県
●120 万円



東京都心域の都市緑地を活用したポリネーターガーデンの創出と技術的指針の検討


●堀内勇寿（国立科学博物館筑波実験植物園）
●東京都 ●79 万円

● 2023 年度




「森の忍者・ムササビ」観察会及び生息調査

●矢部燭自然観察会
●熊本県
●20 万円




「根尾川むいむいの森」ユースセンターの子ども自身による自然学校・拠点整備

●一般社団法人よだか総合研究所
●岐阜県
●85 万円




佐賀の田舎から心を育み、生きる力を養う自然体験活動を届ける

●秀島彩女
●佐賀県
●39 万円




子どもたちの日常の中に自然を取り入れるきっかけを与える事業

●一般社団法人 Camp
●福岡県
●100 万円




猪名川河川域の植物調査（絶滅危惧植物の保全・増殖および昆虫が利用する植物のフェノロジーの製作）

●大阪府立園芸高等学校
ハニービーサイエンスクラブ
●大阪府 ●33 万円




VR も活用した石狩川流域の湿地環境保全・利活用の普及活動

●石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク
●北海道
●100 万円




越冬環境の泥と水の深さがサドガエル幼生の越冬成功と翌春以降の成長・発生に与える影響：江やビオトープを重視した保全対策の改善に向けて

●高津邦夫（新潟大学佐渡自然共生科学センター）
●新潟県 ●100 万円




大雪山国立公園の利用者とエゾナキウサギの良好な関係の構築のための自然・社会科学的研究

●渡辺悠二（北海道大学大学院地球環境科学研究院）
●北海道 ●90 万円




山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査

●野口亮太（NPO 法人流域環境保全ネットワーク）
●三重県 ●45 万円



利根川沿いに生息する生物は交雑によって多様化しているか？

●石井康人（東北大学理学部）
●宮城県
●95 万円



環境保全機能と集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続条件

●野田岳仁（法政大学現代福祉学部）
●東京都
●100 万円

本誌に関するお問い合わせ・本誌入手をご希望の方は

〒130-8606 東京都墨田区江東橋三丁目3番7号 江東橋ビル
（一財）自然環境研究センター内 公益信託 富士フィルム・グリーンファンド事務局
TEL. 03-6659-6135